



仙說阿彌陀經要解

清·蕩益大師 著者
台灣NPO法人西有学会 翻訳



仏ぶつ
説せつ
阿あ
弥み
陀だ
經きょう
要よう
解かい

要 仏説阿弥陀經
日 本 語 訳 解 姚秦・三蔵法師鳩摩羅什 漢訳
台 湾 N P O 法 人 西 有 学 会 著 者
清 有 沙 門 蕩 益 智 旭

『仏説阿彌陀經要解』 日本語訳 序文

釈迦摩尼世尊以大慈悲，応化世間，講經三百余会，說法四十九年，目的無非令衆生破迷開悟、離苦得樂。而達此目的之至直捷、至穩当途徑，莫過於信願持名、往生西方極樂世界之彌陀淨土法門。

信願持名之經典当中，求其最精要者，即『仏説阿彌陀經』也。『仏説阿彌陀經』之註解当中，求其最精要者，莫過於蓮宗九祖蕩益大師之『仏説阿彌陀經要解』，簡稱『彌陀要解』。蓮宗十三祖印光大師謂『彌陀要解』曰：「即令古仏再出於世，現広長舌相，重註此經，当亦不能超出其上。」其為贊歎也，

可謂無以復加！實則『弥陀要解』非但為淨土法門之縮影，亦為如來一代時教之縮影。行者非唯可從中通達淨土法門，亦可由之通達一代時教，其重要性可知矣！

淨土經典之始傳日本，可上推至距今一千四百年前之隋朝時期。而日本淨土宗之弘揚，可謂盛極一時，故其後『弥陀要解』亦東傳日本，並代有人弘。然古大德所弘傳者，皆漢文版本，如比叡山天台家秀雲和尚在寶永元年（一七〇四年）著『弥陀經要解百川記』三卷；光謙和尚在享保二十一年（一七三六年）著『弥陀經要解俗談』（歙浦本）；慈等和尚著『弥陀經要解一心鈔』三卷，成書於天保二年（一八三一年），此皆漢文古本，非現代日本人所易解讀者。『弥陀要解』作為淨土宗之精要典籍，三百余年来，竟未有一日文本問世，堪歎可惜！

一真居士与其團隊發菩提心，願此淨宗要典再度光照日本，普惠淨宗學人，俾得早登淨土，速証円覺，故以三年之辛勤奮勉，將『仏説阿弥陀經要解』訳為現代通用之日本語。非僅利益当代、且將惠及後世。此願此行，可謂功德無量！付梓之際，囑序於余。余嘉其舉，故不揣淺陋，略贅數語以隨喜云。

西元二〇一七年九月底釈淨空謹識

於法国巴黎聯合國教科文組織淨空之友社

釈迦牟尼世尊が大慈悲を以て、この世に応化され、お経を説かれたこと三百回余り、説法なされたこと四十九年、その目的はひとえに衆生に迷い

を断たせ、悟りを開かせ、心身の苦しみから離れ、楽しみを享受させる為に他ならない。この目的を達成させるに至る、直接的かつ穩当なる経路は、信願持名であり、西方極樂浄土に往生する阿弥陀浄土の法門以上のものはないのである。

信願持名の經典の中でも、その真髓を最も深く追求したものが、即ち『説阿弥陀経』である。『仏説阿弥陀経』の註釈の中でも、最も精妙を極めてい
るものが、中国の浄土宗第九祖の蕩益大師の『仏説阿弥陀経要解』（略称『弥陀要解』）である。中国の浄土宗第十三祖の印光大師がこの『弥陀要解』に対して、「仮に、古仏がこの世に再び現れ、広長舌相を呈し、もう一度当経の為に註釈するとしても、当要解を超越することは出来ないであろう。」と言っている。それは賛嘆であり、これ以上加えるものなどないということである。実

に『弥陀要解』は、浄土法門の縮図であるだけでなく、釈迦如来の四十九年間に及ぶ全ての教えの縮図でもある。修行する者はこれにより、浄土法門に広く通じ、達することができるようになるだけでなく、如来の四十九年間にかけた全ての教えに広く通じ、達することができるようになるのである。その重要性を知っておくべきである！

中国の浄土宗の経典が日本に最初に伝わったのは、今を遡ること千四百年前の隋朝の頃である。日本の浄土宗が最も盛んに広められた時期であった。故にその後経典と共に『弥陀要解』も東方の日本に伝わり、代々受け継がれ、広められていったのである。しかしながら、いにしえの大いなる功徳を備えた伝承者達、が、当時日本で弘布の際に使っていた書籍は全て漢文のものであった。例えば、

比叡山天台宗の秀雲和尚が宝永元年（一七〇四年）に書き記した『阿弥陀経要解百川記』三卷、光謙和尚が享保二十一年（一七三六年）に書き記した『阿弥陀経要解俗談』（歙浦本）、天保二年（一八三一年）に刊行された慈等和尚が書き記した『仏説阿弥陀経要解一心鈔』三卷等であり、これらは全て漢文の古書で、現代の日本人が読んでわかり易いものではない。蕩益大師のこの『弥陀要解』が、浄土宗の真髓を最も極めて重要な文献としてこの三百年余りの間一冊の日本語訳も出版されなかった事は、嘆かわしく、残念なことである。

一真居士と居士の仲間達が菩提の心を起こし、この浄土宗の真髓を代表する『弥陀要解』が再び日本を照らすように、浄土宗を学ぶ者達に遍く御利益がもたらされるように、早く極楽浄土へ行けるように、速やかに円覚を証

得するようになり、三年もの間、発奮、努力し、『仏説阿弥陀経要解』を現代に通用する日本語に翻訳したのである。このことは当代のみの僅かな御利益だけではなく、その恵みは後世にまでも及ぶであろう。この願いとこの行いは、無量の功德と言えるであろう！当書が刊行されるにあたり、私は序文を依頼された。私は彼らの善行を褒めたたえ、私自身も喜びをもつて僭越ながら簡単な挨拶を一言三言させて頂いた。

二〇一七年九月末 釈 浄空 敬具

フランス・パリ・国連教育科学文化機関・浄空の友の会にて

目次

序文～日本語訳	2
仏説阿弥陀経要解～日本語訳	10
智旭 <small>ちぎよく</small> 大師の跋文 <small>ぼつぶん</small> ～日本語訳	293
著者紹介・蕩益智旭	296
(付録一) 印光大師から見た蕩益大師と要解について	298
(付録二) 阿弥陀仏 <small>しじゅうはちがん</small> の四十八願～日本語訳	312
後書き	336

要解 元夫諸仏憫念群迷。隨機施化。雖歸元無二。而方便多門。

諸仏は九界における迷える衆生しゅじやうを憫れみ、それぞれの根性こんじやうに随い、教化を施されている。何れも本来具わっている真如本性しんによほんしんじやうに回歸させることが唯一の目的で、それ以外にはない。しかし教化を施されるにあたり、実際には無量無辺むりやうむへんの方便法門が用いられているのである。

要解 然於一切方便之中。求其至直捷至円頓者。則莫若念仏求生淨土。

その全ての方便法門において、至高の、直截ちやくせつ且つ究極きうごくに円頓えんどんなものを求めるならば、念仏して（極樂）淨土への往生を求める以外にはない。

要解 又於一切念仏法門之中。求其至簡易至穩当者。則莫若信願專持名号。

また、全ての念仏法門の中で、最も簡易で、最も穩当な方法は「信願」し、専ら（阿弥陀仏の）名号を執持する以外にはないのである。

要解

是故淨土三經並行於世。而古人獨以阿弥陀經列為日課。豈非有見於持名一法。普被三根。摂事理以無遺。統宗教而無外。尤為不可思議也哉。

故に、（『無量壽經』、『仏説觀無量壽仏經』、そして『仏説阿弥陀經』と、

いわれる）「淨土三部經」が並行して世に流布されてきたが、古人たちはな

ぜ唯一『仏説阿弥陀經』だけを日課として選んだのか？恐らくこの持名念仏の法門は、上、中、下の何れの機根の衆生に対しても遍く対応し、また「事持」、「理持」のどちらも漏れることなく包摂している。更には禪宗も禪宗以外の全ての宗派、いわゆる教宗の内容も全て統括している為、特に優れて

おり、非常に不可思議なものであるという認識に至ったからに違いない。

要解

古來注疏。代不乏人。世遠就湮。所存無幾。雲棲和尚著為疏鈔。大精微。幽溪師伯述円中鈔。高深洪博。蓋如日月中天。有目皆睹。特以文富義繁。辺涯莫測。或致初機淺識。信願難階。

古來同經の注疏は、時代とともに数多くの方々がおやりになったが、残念なことにそれらの著作の殆どが時代の変遷とともに煙のように消失してしまつた。今日に至るまで残っているものは極僅かである。そのうち、雲棲和尚が注釈を行つた『仏説阿彌陀經疏鈔』は、廣大を致し、精微を尽くしたものである。幽溪師伯（幽溪伯父の意）の著作である『仏説阿彌陀經略解円中鈔』もまた、深遠博大なものである。両氏の傑作はまるで天中

に輝く太陽と月のようなもので、そのことは誰の目にも明らかである。しかし、それらの文章は内容が非常に豊富で、意義も繁多はんたであり、その果てを計り知れないほどに奥が深い。故に初めて学ばれる方、若しくは浅識せんしきな方にとっては、「信願」の気持ちができ難いことがあるのではないかと心配しているのである。

要解 故復弗揣庸愚。再述要解。

よって自分のような庸愚ようぐなものが、身のほどもわきまえず、僭越せんえつとは存じるが、再度このお経に『要解』という形で注釈を付けることに至った次第である。

要解 不敢与二翁競異。亦不必与二翁強同。譬如側看成峰。横看成嶺。縱皆不尽廬山真境。要不失為各各親見廬山而已。

決して異を唱え、先輩お二方と競うつもりもなければ、無理にお二方と同じものを作らなければならぬとも考えてはいない。これがどういふことかは、「側より看れば峰ほうを成し、横より看れば嶺れいを成す」、という詩に描かれていることと似ている。要するに、廬山ろざんの真相を全て知り尽くすことができなくとも、少なくとも各々が廬山を親見する必要があるということである。

要解 将釈經文。五重玄義。

続いて經文を解釈する前にまず、五重玄義ごじゅうげんぎを紹介しておく。

要解 第一積名。此經以能說所說人為名。

第一は積名である。(積名とは経題を解釈し名を明かすことである。)
当經の経題である『仏説阿弥陀經』は、お経をお説きになる方の名と、説かれる方の名からなっている。

要解 仏者。此土能說之教主。即釈迦牟尼。乘大悲願力。生五濁惡世。以

先覺覺後覺。無法不知。無法不見者也。

仏とは、この娑婆しゃぼ世界において教えることのできる教主で、即ち釈迦牟尼しゃかむにのことである。釈迦しゃか仏は大悲の願力に乗じて、五濁ごじよく惡世あくせに降生こうせいし、先覺せんかく者として後覺こうかく者を覺さらせる。正ただに全知ぜんち全能ぜんのうのお方なのである。

要解 說者。悅所懷也。仏以度生為懷。衆生成仏機熟。為說難信法。令究竟脫。故悅也。

「説」とは心に悦びが沸き、その所懷をお説きになることである。仏は衆生を濟度し、成仏させることを所懷としている。その為、衆生の成仏の機が熟していると知ると、皆に「難信の法」をお説きになり、究極なる解脱を遂げさせ、成仏させるので、故にお悦びになるのである。

要解 阿彌陀。所說彼土之導師。以四十八願。接信願念仏衆生生極樂世界。永階不退者也。

阿彌陀とは、釈迦仏が説かれる極樂世界の導師である。阿彌陀仏は四十八の誓願をお立てになって、信願念仏の衆生の極樂世界への往生を引

接じようなさり、永遠さんふに三不退たいてん転しんを証得しやうとくさせて下さるのである。

要解

梵語阿弥陀。此云無量壽。亦云無量光。要之功德智慧。神通道力。依正莊嚴。說法化度。一一無量也。

梵語の阿弥陀はこちら漢文訳すると無量むりやうじゆ壽じゆであり、無量光むりやうこうでもある。要するに功德も智慧も神通力じんつうりきも道力えしやうも依正二報も莊嚴も說法げぽも化度げども一々無量なのである。

要解

一切金口。通名為經。对上五字。是通別合為題也。教行理三。各論通別。広如台藏所明。

仏がお説きになる全ての法は共通して「經」と名付けられている。しか

し、「佛說阿彌陀」の五文字は他のお經と區別する為の別題であり、「經」の單一文字は通題である為、通、別二合一にして本經の經題となっているわけである。また佛がお説きになった教、教が表す道理である理、教による修行である行の三つにもそれぞれ通と別があるので、それについての更なる詳しい説明は天台宗の經典に論じられているのでご参考にしていただければと存じる次第である。

要解 第二弁体。大乘經皆以実相為正体。

第二は弁体である。(弁体とは本經の体である法理を究めることである。) 大乘經は、皆、諸法実相(人生宇宙の真相の意)を本体(法理の根拠の意)とする。

要解 吾人現前一念心性。不在内。不在外。不在中間。非過去。非現在。非未來。

我々の現前げんぜんの一念の心性しんじょう（即ち真如本性、宇宙万物の本体）は、内にあ
るものでも、外にあるものでもなく、中間にあるものでもない。過去もな
ければ、現在、未来もない。

要解 非青黃赤白。長短方円。非香。非味。非触。非法。

青、黄、赤、白の色彩もなく、長くもなく短くもなく、四角でも円でも
ない。香りもなければ、味もない。触でもなければ、法でもない。

要解 覓之了不可得。而不可言其無。具造百界千如。而不可言其有。

このように心性は探し求めても不可得であるが、「無」とは言えない。心性は百界千如（宇宙万物の意）を本体に具え、変現することはできるが、「有」とは言えない。

要解 離一切縁慮分別。語言文字相。而縁慮分別。語言文字。非離此別有自性。

心性は（清浄無垢で）一切の縁慮（観ずる対象をとらえようと思ひ量る心）、分別、言語、文字の相にとらわれない。しかし心性はその働き、作用として縁慮、分別、言語、文字等に代表される全ての相を変現することができる。全て相（姿、形など）あるものは皆、心性から現れるもので、どれ一つとってみても、心性の本体から外れておらず、これら全ての相を離

れて別個に心性を探し求めても見つからないのである。

要解 要之離一切相。即一切法。離故無相。即故無不相。不得已強名実相。

要するに、心性は一切の相にとらわれることがないと同時に、一切の法を離れていないのである。とらわれないが故に無相（空の意）であり、とらわれるが故に有相なのである。やむ得ず「実相」という仮名をつけているだけである。

要解 実相之体。非寂非照。而復寂而恒照。照而恒寂。

実相の体は寂にも非ず照にも非ず、（不二なのであるが）一方でまた「寂而常照」（寂にして常に照す）「照而常寂」（照にして常に寂し）である。

要解 照而寂。強名常寂光土。寂而照。強名清淨法身。

「照にして常に寂し」が故に、敢えて「常寂光土」と名付けている。「寂にして常に照す」が故に敢えて「清淨法身」と名付けている。

要解 又照寂強名法身。寂照強名報身。

また照寂は敢えて「法身」と名付けている。寂照は敢えて「報身」と名付けている。

要解 又性徳寂照名法身。修徳寂照名報身。

また性徳の寂照は「法身」と名付けている。修徳の寂照は「報身」と名付けている。

要解 又修徳照寂名受用身。修徳寂照名応化身。

また修徳の照寂は「受用身^{じゅゆうしん}」と名付けている。修徳の寂照は「応化身」と名付けている。

要解 寂照不二。身土不二。性修不二。真応不二。無非実相。

寂照不二、身土不二、性修不二、真応不二、全て実相である。

要解 実相無二。亦無不二。

実相は不二であり、不二もまたないのである。

要解

是故拳体作依作正。作法作報。作自作他。乃至能説所説。能度所度。

能信所信。能願所願。能持所持。能生所生。能贊所贊。無非実相正印之所印也。

それ故に、心性の本体をあげて、その全ては、依報（物質環境、人事環境の意）となり、正報（自身の意）となり、法身を変現し、報身を変現し、自分を変現し、他人を変現する。ないし教えることのできる釈迦仏も釈迦仏がお説きになる阿彌陀仏も、教化済度する諸仏菩薩も、教化済度される衆生、仏を信じることのできる心も信じる仏の理論、方法、境地も、能願（娑婆世界を離れたいの意）も所願（極楽世界へ往生したいの意）も能持（身、口、意の意）も所持（阿彌陀仏の名号の意）も、能生（信願行の意）も所生（極楽世界の意）も、賛美する事の出来る釈迦仏と諸仏も賛美され

る阿弥陀仏と極樂世界も、全て実相じつしょうの正印しやういんに印いんされているものなのである。

要解 第三明宗。宗是修行要徑。会体枢機。而万行之綱領也。提綱則衆目

張。挈領則襟袖至。故体後応須弁宗。

第三は明宗めいしゆうである。(明宗とは本經の宗要を明かすことである)宗は宗旨の意で修行において最も重要な経路と方法である。宗は心性の本体に切り込む為の枢機すうきであり、万行まんぎやうの綱領こうりやうである。提綱ていこう挈領けつりやうのような部分である。即ち「漁網ぎよもうの口の部分の綱を引っ張って投げると自然と沢山の網の目が張るように。また、衣服の襟を引っ張るだけで服全体が持ち上がるようなものである」。故に弁体の後は必ず修行の宗旨を明らかにしなければならぬ。

要解

此經以信願持名為修行之宗要。非信不足啓願。非願不足導行。非持名妙行不足滿所願而証所信。經中先陳依正以生信。次勸發願以導行。次示持名以徑登不退。

当經は「信願持名」を修行の宗要とする。信じなければ願望を啓発するのに足りない。願わなければ修行を導くのに足りない。持名妙行でなければ、心中の願いが皆満ち足りるに及ばず、且つ所信を証得するのに足りない。当經の段落構成についてだが、先ず西方極樂世界の依報（物質生活環境の意）と正報（教主の意）の莊嚴を紹介する。その目的は信心が生まれるようにする為である。次にそこへ發願往生することをお勧めする。その目的は修行に導くことができるようにする為である。最後に執持名号の方法を紹介する。その目的は極樂淨土へ行き、位行念の三不退を証得する為

である。

要解

信則信自。信他。信因。信果。信事。信理。願則厭離娑婆。欣求極樂。

行則執持名号。一心不乱。

信とは、即ち信自、信他、信因、信果、信事、信理のことである。願とは即ち「厭離穢土、欣求淨土」（この娑婆世界を「穢れた国土」として、それを厭い離れ、阿弥陀仏の極樂世界は清淨な国土であるので、そこへの往生を切望するの意）のことである。行いとは即ち執持名号であり、阿弥陀仏の名号を一心不乱に信じ称えることである。

要解

信自者。信我現前一念之心。本非肉团。亦非縁影。豎無初後。横絶

辺涯。終日隨縁。終日不變。十方虛空微塵国土。元我一念心中所現物。我雖昏迷倒惑。苟一念回心。決定得生自心本具極樂。更無疑慮。是名信自。

信自とは、我現前わがげんぜんの一念の心を信じることをいう。我現前わがげんぜんの一念の心とは、本来肉の塊である心臓でもなければ、妄心もうしん（第六意識の心）でもない。時間の前後（過去、現在、未来）もなければ空間の限りもない。この心は（鏡のように）常に縁に随つて千變万化するが、常に不變である。十方世じゅうぼう界、尽虚空遍法界じんこくうへんぼうかい、微塵刹土みじんせつどは悉く元来我一念の心より變現されたものである。「我」は顛倒迷妄てんとうめいもうなものであるが、もしも一念が心性に歸依きえするならば、必ず自らの心性に本来具わっている極樂浄土への往生を果たすことが出来る。更に、疑つてあれこれ考えをめぐらせることがなくなることを信自という。

要解

信他者。信釈迦如来決無誑語。弥陀世尊決無虛願。六方諸仏広長舌決無二言。随順諸仏真實教誨。決志求生。更無疑惑。是名信他。

信他とは、釈迦如来は決して虚誑語きょきやうごを使わず、弥陀世尊の四十八の願力は決して虚妄なものではなく、六方諸仏ろっぽうが広長舌相こうちやうぜつそうを現し称賛していることに決して二言にごんはないことを信じてすることである。また諸仏の真实なる教えに随順ずいじゆんして尊信そんしんし、必ずや極樂浄土へ往生するという志を決め、いささかの動揺も無いことを信他という。

要解

信因者。深信散乱称名。猶為成仏種子。況一心不乱。安得不生浄土。

是名信因。

信因とは、散乱した心のままで称名念仏しても成仏の種となることであ

る。況して一心不乱に念仏してどうして極樂浄土に往生できないことがあろうか。このことについて深信することを信因という。

要解 信果者。深信浄土。諸善聚會。皆從念仏三昧得生。如種瓜得瓜。種豆得豆。亦如影必隨形。響必應聲。決無虛棄。是名信果。

信果とは、極樂浄土において諸しよ上じやう善ぜん人にんの俱く会え一いつ处しよが可能であるのは、皆念仏ねんぶつ三昧さんまいによつて得られた往生の結果なのである。瓜を植えれば瓜がとれ、豆を植えれば豆がとれるが如く、また影の形につき随うが如く、響きが声に應じるが如く因果は絶対ふに不昧まいである。これらのことを深く信ずることを信果という。

要解 信事者。深信只今現前一念不可尽故。依心所現十方世界亦不可尽。

実有極楽国在十万億土外。最極清浄莊嚴。不同莊生寓言。是名信事。

信事とは、ただ今現前の一念（心性、真心の意）が尽きることがない為、唯心所現ゆいしんしよげんの十方世界も尽きることがないことである。（西方）極楽世界は実有であり、ここ娑婆世界から西方へ、十万億土離れた仏国土を過ぎたところに位置する。そこは最極の清浄莊嚴なる阿弥陀仏の国土であり、莊子そうしの寓言えんげんに出てくる話とは異なるものである。これらのことを深く信ずることを信事という。

要解 信理者。深信十万億土。実不出我今現前介爾一念心外。以吾現前一

念心性実無外故。

信理とは、「十万億の仏国土は、我今現前けに介爾の一念の心性の外に非ず」ということを深信することである。何故なら、我現前一念の心性には実に外がないからである。

要解

又深信西方依正主伴。皆吾現前一念心中所現影。全事即理。全妄即真。全修即性。全他即自。我心遍故。仏心亦遍。一切衆生心性亦遍。譬如一室千灯。光光互遍。重重交摂。不相妨碍。是名信理。

また、西方極樂世界の依報と正報、主しゆと伴はんも皆、我現前一念の心の所現の影である。「全事ぜんじ即理そくり（事を全うして顕れたのが即ち理）、全妄ぜんもう即真そくしん（妄を全うして顕れたのが即ち真）、全修ぜんしゆ即性そくじやう（修を全うして顕れたのが即ち性）、全他ぜんた即自そくじ（他を全うして顕れたのが即ち自）」である。我が心性が

遍く故に、仏の心性も遍く。更には一切衆生の心性も遍く。それは以下の
ような状態のようなことを指す。一室に無数の灯りがついている。その光
は互いにすみずみまで照らし合い、重々に交錯し合っているが、お互いの
光を妨げることはないのである。これらのことを深く信ずることを信理と
いう。

要解 如此信已。則娑婆即自心所感之穢。而自心穢。理応厭離。極樂即自
心所感之淨。而自心淨。理応欣求。

これまで述べてきた事理^じを真に信じるならば、その場合、娑婆世界は即
ち自分の心に感じる穢れであり、自分の心が穢れているならば厭離するこ
とは当たり前である。（同様に）極樂世界は即ち自分の心に感じる清淨で

あり、自分の心が清浄ならば欣求するのは当たり前である。

要解 厭穢須捨至究竟。方無可捨。欣淨須取至究竟。方無可取。故妙宗云。

取捨若極。与不取捨亦非異轍。

穢が嫌ならば、それを究極に至るまで捨てなければならぬ。そうして初めて捨てるものがなくなるのである。(同様に)欣求浄土ならば、それを究極に至るまで求め得なければならぬ。そうして初めて求め得るものがなくなるのである。故に『観無量寿仏經疏妙宗鈔』は云う。「もしも取捨しゆが究極にまで至ったならば、不取ふしゆ不捨ふしゆとも何ら変わりはなくなくなる。」と。

要解 設不從事取捨。但尚不取不捨。即是執理廢事。既廢於事。理亦不円。

若達全事即理。則取亦即理。捨亦即理。一取一捨。無非法界。故次信而明願也。

（實際の修行において）もしも事相の面から取捨の修行を行うことなく、ただただ理に偏り、不取不捨だけを重んじるなら、即ち「理」にとらわれ、「事」を疎かにすることになる。「事」が疎かになれば、「理」も円融であるはずがない。もしも「全事即理（事を全うして顕れたのが即ち理）」の境地に到達したならば、その場合は、求め得ることも即ち「理」であり、（執着心を）捨てることも即ち「理」である。「一取（極楽）一捨（娑婆）、法界ならざるものなし」である。故に「信」の次に、必ず発願ほつがんを明らかにしなければならないのである。

要解 言執持名号一心不乱者。名以召德。德不可思議。故名号亦不可思議。名号功德不可思議。故使散稱為仏種。執持登不退也。

執持名号、一心不乱とは、（阿彌陀仏の）名号を以て自性じしやうに本来具わっている万徳万能を触発しふくはつするものである。性徳しやうとくとは不可思議なものである。故に名号もまた不可思議である。名号の功德も不可思議なものである。故に、散心念仏さんしんねんぶつですら成仏の種となり、（一心に）執持しゆじすれば、位行念いぎやうねんの三不退ふたいを証得できるのである。

要解 然諸經示淨土行。万別千差。如觀像觀想礼拝供養五悔六念等。一一行成。皆生淨土。

然しながら、諸經典に示されている極樂淨土へ行く修行の方法は色々と

あり、千差万別である。例えば、観像の念仏、観想の念仏、礼拝、供養、五悔、六念等である。これらは、一つ一つ確実に実行して成就できれば、どの方法でも（極楽）浄土へ往生できるものである。

要解

唯持名一法。收機最広。下手最易。故釈迦慈尊。無問自説。特向大智舍利弗拈出。可謂方便中第一方便。了義中無上了義。円頓中最極円頓。

故云清珠投於濁水。濁水不得不清。仏号投於乱心。乱心不得不仏也。

だが唯一、執持名号の法門だけが（上は等覺菩薩から下は六道輪廻の衆生、ないし地獄の衆生まで）上、中、下ありとあらゆる根性の衆生を網羅し、摂引容受の範囲が最も広く、手をつけやすいのである。故に釈迦慈尊は誰に聞かれずとも自らこの法を特別に智慧第一の舍利弗に打ち明けたの

である。従つてこの經は正に方便法門中の第一の方便であり、了義經中の第一の了義經であり、円頓中の究極的円頓であると言えよう！故に云う、「明礬みょうばんを汚れた水に入れたなら、汚れた水は清らかに成らざるを得ない。（阿弥陀）仏号らんしんを乱心に入れたなら、その乱心は仏に成らざるを得ない」と。

要解 信願持名。以為一乘真因。四種淨土。以為一乘妙果。拳因則果必隨之。故以信願持名為經正宗。其四種淨土之相。詳在妙宗鈔。及梵網玄義。茲不具述。俟後釈依正文中。当略示耳。

従つて信願持名を以て（唯一無二ゆいいつむにの）一乘いちじょうともいうが、成仏の真因（真実の正因の意）とし、四種淨土を以て一乘成仏みょうかの妙果とするのである。因

を挙げればその場合必ず果が相隨うが如く、信願持名を以て当經の正宗分とするのである。この四種淨土の状相についての詳細な紹介は、『觀無量壽仏經疏妙宗鈔』と『梵網經玄義』にあるので、ここで具体的に紹介するのは控えておく。本文の依報と正報を解釈する文においては、改めて簡略に紹介をさせていただこうと考えている。

要解 第四明力用。此經以往生不退為力用。

第四は論用である。(論用とは本經の功德、力用を論ずることである)。
本經は「即得往生、住不退轉」(即ち往生を得、不退轉に住す)を以て力用とする。

要解 往生有四土。各論九品。且略明得生四土之相。

往生には四土があり、各々三輩九品に分け、論ずることが可能である。

先ず得生四土の状相について（その理論、方法と境地を）簡潔に説明しておく。

要解 若執持名号。未断見思。随其或散或定。於同居土分三輩九品。

もし名号を執持して、見思惑を制御できるようになったものの、完全に断滅するまでに至っていない場合、その人の定心と散心の境地に随い、凡聖同居土において更に三輩九品に分けることができる。

要解 若持至事一心不乱。見思任運先落。則生方便有余淨土。

もし名号を執持して、「事」の一心不乱の境地に至った場合は、見思惑は自ずから消え、その時は方便有余浄土ほうべんゆうよに往生する。

要解 若至理一心不乱。豁破無明一品。乃至四十一品。則生實報莊嚴淨土。

亦分証常寂光土。

もし名号を執持して「理」の一心不乱の境地に至った場合は、豁然かつぜんと無明惑みょうわくの一品を断破だんぱ、ないし四十一品を断破すれば、實報無障碍淨土じつぼうむしょうげに往生する。同時に、常寂光淨土の境地を部分的に証得することもできる。

要解 若無明断尽。則是上上實報。究竟寂光也。

もし無明惑を断尽だちじんした場合は、（上輩）上品上生じょうほんじょうせいの實報無障碍淨土に往

生ずる。その時は、究竟くきようの常寂光淨土を証得するのである。

要解 不退有四義。一念不退。破無明。顯仏性。徑生實報。分証寂光。

不退転には四つの意義が有る。一つは念ねん不退ふたいである。無明惑を破り、仏性が顯れ、實報無障礙淨土に往生する。同時に、常寂光淨土の境地を部分的に証得する。

要解 二行不退。見思既落。塵沙亦破。生方便土。進趨極果。

二つには行ぎょう不退ふたいである。見思惑を断ち、塵沙じんじや惑わくも破り、方便有余淨土に往生する。更には極果ごつかに突き進むのである。

要解 三位不退。帶業往生。在同居士。蓮華托質。永離退緣。

三つには位不退である。業を持ったままで往生を果たし、凡聖同居土において蓮の華に宿り、化生する。退転の縁から永遠に離れるのである。

要解 四畢竟不退。不論至心散心。有心無心。或解不解。但弥陀名号。或六方仏名。此經名字。一經於耳。仮使千万劫後。畢竟因斯度脱。如聞塗毒鼓。遠近皆喪。食少金剛。決定不消也。

四つには畢竟不退である。至心、散心、有心、無心、理解できるできないを問わず、ただ弥陀の名号、或いは六方諸仏の名号、当經の経題が一旦耳に入りさえすれば、仮に百千万劫の時を経た後でも畢竟この因縁により度脱の境地に至るのである。これがどういふことかは、毒鼓を聞くような

ものである。毒鼓とは毒を塗った太鼓のことで、その太鼓を打つことにより、その音を聞いた人々は、遠近を問わず、皆聞く気がなかったとしても必ず死んでしまう。この譬えは相手が聞く意思を持たなくても、一旦聞かされたならばそれが結縁、下種となることを意味する。このことはまた、金剛を食べるようなものである。金剛は食べられたとしても当然消化できないので、同じく結縁、下種となるからである。

要解 復次只帶業生同居淨。証位不退者。皆与補処俱。亦皆一生必補仏位。

また業を持ったまま凡聖同居淨土に往生し、位不退を証得したものである限りは皆、一生補処の等覺菩薩たちと俱会一処を果たすことができる。当然、以前の仏が入滅した後、ただ一生のみで、必ず「仏の位」を継ぐこ

とになるのである。

要解 夫上善一处。是生同居。即已横生上三土。一生補仏。是位不退。即已円証三不退。

そもそも「諸上善人俱会一处」が、何を意味するのだが、同居土どうごどに往生しながら、同時に同居土を飛び越えて、上位の三土を自由自在に行き来でき、それらの場所に往生する事と同じなのである。一生補仏処とは、位不退でありながら、同時に「念行位の三不退」を円満に証得したことを意味するのである。

要解 如斯力用。乃千経万論所未曾有。較彼頓悟正因。僅為出塵階漸。生

生不退。始可期於仏階者。不可同日語矣。宗教之士。如何勿思。

このような力用は、千經万論において未曾有のことなのである。禪宗における頓悟の正因と比較しても、頓悟はただ出塵漸修するための一段階に過ぎないのである。「理」は頓悟であるけれども、「事」は実際の修行をもつて徐々に迷いを除く必要がある。生生と不退転を必要とし初めて、仏の階位（諸上善人の意）を証得することが期待できるのである。従つて兩者を同じに扱うことはできないのである。教宗と禪宗のものはよくよく考へる必要があるのではないだろうか？

要解

第五教相。此大乘菩薩藏攝。又是無問自說。徹底大慈之所加持。能

令末法多障有情。依斯徑登不退。故当來經法滅尽。特留此經住世百年。広

度含識。阿伽陀藥。万病總持。絶待円融。不可思議。華嚴奧藏。法華秘髓。一切諸仏之心要。菩薩万行之司南。皆不出於此矣。欲広嘆述。窮劫莫尽。智者自当知之。

第五は教相判釈きょうそうはんじやくである。(教相判釈とは本經の内容の浅深と形式を判定し、解釈することである)本經は大乗經の中の菩薩乘ぼさつじやうに分類することができ、(十二に分類される經典の形式から言えば)「無問自說むもんじせつの經」(誰も問わないのに自ら説かれた)である。これは釈迦世尊の徹底した大いなる慈悲の心によるご加持の結果なのである。末法まつぽうの時代において煩惱ぼんのうが多く、業障ごうじやうの重い有情衆生うじやうじゆうじやうを、当經の教義(信願持名、一心不乱)を抛り所とし、三不退転さんふたいてんの捷徑しやうけいに登らせることができるのである。故に釈迦世尊は末法の經道滅尽きやうどうめつじんの時、特別に当經だけは百年残り、広く衆生を濟度すると仰つた

のである。従つて当經は、万病に効くといわれる阿伽陀藥あかだやくのようなものであり、總持そうじの法門であり、円融無碍えんゆうむげで不可思議なものである。『華嚴經』の奥義おうぎ『法華經』の秘髓ひずい、一切諸仏の心要、そして菩薩万行ぼんざんまんにぎょうの指針、皆當經から外れるものではない。更に詳しく述べようと劫の時を究めても、述べ尽くすことはできないものである。智慧のある人は自ら進んで知ろうとするべきである。

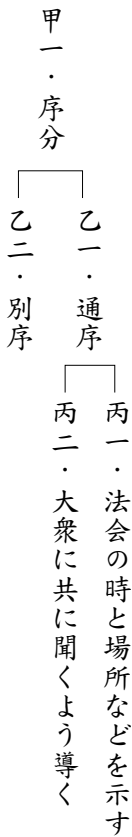
要解

入文分三。初序分。二正宗分。三流通分。此三名初善中善後善。序如首。五官具存。正宗如身。臟腑無關。流通如手足。運行不滯。故智者釈法華。初一品皆為序。後十一品半皆為流通。又一時迹本二門。各分三段。則法師等五品。皆為迹門流通。蓋序必提一經之綱。流通則法施不壅。關係

非小。後人不達。見經文稍涉義理。便判入正宗。致序及流通。僅存故套。安所称初語亦善。後語亦善也哉。

当經文は三つの大きな段落に分けることができ、初めは序分じよぶん、二番目は正宗分、三番目は流通分りゅうぶんである。この三つは、それぞれ「初善しよぜん、中善ちゆうぜん、後善ごぜん」と名付けられている。(善とは、重要の意味である。)序分は人間の頭部のようなもので、五官ごかんが具わっている。正宗分は胴体どうたいのようなもので五臓六腑ごろうぶが完全無欠である。流通分は手足のようなもので、血が流れ通い、動作が自然で、停滞することはないのである。故に智者大師ちしやは『法華經ほけきよう』に注釈を付ける際、初めの一品を全て序分とし、後ろの十一品半を全て流通分と見なしたのである。また一時期、同『法華經』を本迹二門ほんじやくにもんに分けることもあった。本門ほんもんと迹門しやくもんは各々三段落に分かれている。則ち「法師品ほつしほん」

など五品を皆迹門の流通分と見なしたのである。通常は、序分において必ず一經の綱領を提示するものである。流通分においては則ち、法の流布や伝持が滞ることなく、広く行きわたるような内容となっている。従つて序分も流通分も正宗分と同様、非常に重要なので軽視することはできない。後人は通達でないため、經文にちよつとした仏理ぶつりがあると、それを直ちに正宗分と見なしてしまいがちである。結果、序分と流通分はただの常套句じょうたうくとなつてしまふのである。そんな受け止め方でどうして序分を「初善」、流通分を「後善」と言うことができようか？



丙一・法会の時と場所などを示す

経 如是我聞。一時仏在舍衛国。祇樹給孤独園。

要解 如是。標信順。我聞。標師承。一時。標機感。仏。標教主。舍衛等。

標説経処也。

「如是」とは何か？信ずることと素直に従うことを表す。「我聞」とは何か？お釈迦様の伝授を受け伝えることを表す。「一時」とは何か？機縁と感応道の時を表すことである。仏とは何か？宇宙と人生の真相を教える教師、教主の意味でここではお釈迦様のことを指す。「舍衛国祇樹給孤独園」とはお経を説かれる場所の意味である。

要解 実相妙理。古今不變名如。依実相理。念仏求生浄土。決定無非曰是。

「如是」中の「如」とは、「是」とは、それぞれ何を意味するのか？実相妙理（そうみょうり）、古今東西不變のことを「如」と名づける。宇宙、人生の実相の道理に依拠（いきよ）し、念仏して極楽浄土への往生を求めるということは決定（けつじょう）（絶対に、の意）していて間違いない。これが「是」の意味である。

要解 実相非我非無我。阿難不壞仮名。故仍称我。耳根発耳識。親聆円音。

如空印空名聞。

「実相は実に我にも非ず、無我にも非ず」だが、（仮の名称がなければ色々と交流が不便なので）アーナンダ（阿難）は世間の習慣に従い、其の常識を壊そうとはせず、相変わらず自分のことを「我」と呼んでいるので

ある。(耳に音が聞こえると言うのは世間では「聞」と言うので)アーナ
ンダは同様にその常識に従い、自分が自らの耳で聞いたお釈迦様の真心か
ら流れ出てきた教えを「聞」と言っている。真心から自然と出てきたもの
を真心で自然に受け止めるものなので、言う側も聴く側も心が清らかなま
まで何一つとらわれていない空の状態、これこそが「聞」の真の意味である。

要解 時無実法。以師資道合。説聴周足名一時。

時は定かなものではなく、抽象的且つ相対的なものである。お釈迦様が
導師として仏法を伝授したい時は実に生徒たちがそれを欲しがっている時
であり、正に以心伝心と相乗効果が生まれる時である。教える側は終始一
貫して漏れることなく、円満に講義を行うことができるのと同様に、受け

る側も遺憾なく最初から最後まで授業を満喫することができる。このような状態のことを「一時」と名付ける。

要解

自覚。覚他。覚行円満。人天大師名仏。

自覚じかく、覚他かくた、覚行窮満かくぎょうまんな人のことを人天大師と言うし、仏とも言う。

要解

舍衛。此云閻物。中印度大国之名。波斯匿王所都也。匿王太子名祇

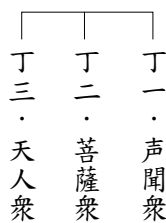
陀。此云戦勝。匿王大臣名須達多。此云給孤独。給孤独長者布金買太子園。

供仏及僧。祇陀感嘆。施余未布少地。故並名祇樹給孤独園也。

「舍衛」は梵語で漢文に訳すと、文化水準と物産ともに豊富な場所という意味である。古代インド中部にある大きな国の都の名前で、その王はプ

ラセーナジット（漢訳：波斯匿王^{はしのおくわう}）という。王子の名前は祇陀^{ぎだ}（ジェータのこと）である。祇陀は戦勝と言う意味である。王の大臣の中に須達^{しゅだつ}という者がおり、心が慈悲深く、あまり恵まれてない孤独なものを助けていたので、給孤独^{ぎつこどく}長者^{ちやうじや}と呼ばれていた。長者はお釈迦様と僧侶に説法の為の寺院を寄付しようと思い、見つかった祇陀太子の園林を買おうとした。けれども太子は「必要な土地の表面を金貨^{きんか}で敷き詰めたら、譲ってやろう」と言われた。そこで、長者が実際に金貨を敷き詰め始めた為、太子は驚き、感動し、自らも参加したいと願われた。しかし断られた為、土地は譲渡するが樹木は自分の物として寄付したいと言われた。長者がそれに同意したので、この僧園は両者の名を冠して祇樹給孤独園と呼ばれるようになった。（所有権は両者の名義のままであった）。

丙二・大衆に共に聞くよう導く



要解

声聞居首者。出世相故。常隨從故。佛法頼僧傳故。菩薩居中者。相

不定故。不常隨故。表中道義故。天人列後者。世間相故。凡聖品雜故。外護職故。

参加者の中で、声聞衆しやうもんの名前が一番先に挙げられている理由としては、出家の様相ようそうを呈しており、御仏と離れることなく常隨じやうずいしているからである。又もつとも重要な理由として、佛法の一番頼りになる伝承者とされているからである。菩薩衆の名前は何故中央に配置されているのだろうか？一つには決まった様相がないからである。菩薩衆の中には出家者もいれば在家

の者もいる。二つには世尊の代わりに各地で仏法を広げなければならず、常に世尊のそばにいるわけではないからである。三つには中央の意味を取り、仏法は中道ちゆうどうである主旨を表す。天人衆の名前が一番後ろにあるのは、完全に世俗的な姿で表れているからである。在家信者ざいけしんじやの中には本当の菩薩もいれば、真の初心者である凡人もいるので、いわゆる共存状態である。在家信者の役割は俗人でありながら、権力や財力をもって外側から仏の教えを保護し、種々の障害を除いて僧尼の修行を助けることであり、これがいわゆる外護げごである。

丁一・声聞衆

- 戊一・参加者の分類を明かし、その数を示す
- 戊二・参加者の位を表し、その徳を賛嘆する
- 戊三・上首の名を列挙する

戊一・参加者の分類を明かし、その数を示す

經 与大比丘僧。千二百五十人俱。

要解 大比丘。受具足戒出家人也。

大比丘とは出家して具足戒を受けた男子のことを指すものである。

要解 比丘梵語。含三義。一乞士。一鉢資身。無所蓄藏。專求出要。二破惡。

正慧觀察。破煩惱惡。不墮愛見。三怖魔。発心受戒。羯磨成就。魔即怖也。

比丘は梵語であり、意味は三つある。一つには乞士の意味であり、施主に食を乞い、肉体を維持しご飯鉢一つと、質素な衣類三枚以外は蓄えもなければ財産もない状態を表す。もつぱら六道輪廻からの脱却の理論とそ

の手立てを要かなめとして追求するものである。二つには悪を打ち破るといふ意味である。正しい智慧を用いて観察し煩惱という悪を退治し、「愛」と「見けん」の二種の煩惱の海に墮ちないようにすることである。（愛とは事物に対する愛着の情で、好き嫌いが生じ、貪欲とんよくと瞋いかりにまで発展するものである。見とは偏った見方から我見がけん・邪見じやけんなどを発生させてしまうことである）。（正しい智慧で観察する為には四念住しねんじゆうから学ばなければならぬ）。

三つには魔王まおうがおじけづくことを意味する。魔王は、悟りを得ようと発起ほつきし、戒壇かいだんで具足戒を受け、真の出家人になろうとするものを見る時、自分の管轄下かんかつかの者が又一人減ることに恐怖するのである。（ここでいう大比丘とは、小乗しょうじょう仏教における比丘ではなく、実際には諸仏、大菩薩が小乗仏教の比丘に姿を変え、この世に現れたものである。この現象のことを仏語で

は示現しげんという。）

要解

僧者。具云僧伽。此翻和合衆。同証無為解脫。名理和。身同住。口無諍。意同悅。見同解。戒同修。利同均。名事和也。

僧そうという者は僧伽そうぎやの略語であり、「和合衆わごうしゆ」という意味である。「和合衆」とは道理の面でも事相じそうの面でも気が合う者同士の集まりのことをいう。道理上どうりじよう皆同じく無為解脫むいげだつ、つまり無上菩提むじやうぼだいを最終目標と定めているものである。事相上じそうじようでは教団内皆仲良く、敬い合うという和合の六つの原則がある。いわゆる仏語でいう六和敬ろくわけいである。修行する者皆が同じ合宿生活の中で身心を修め、慈悲の言葉を語り合い、口論や口喧嘩をせず、仏法に触れて感ずる喜び、いわゆる法悦ほうえつ若しくは法喜ほうきを心の中で分かち合い、互い

に正しい見方（宇宙観、人生観）を持って、同じ戒律を守り、会得したものは互いに分かち合うことなどである。

要解

千二百五十名者。三迦葉師資共千人。身子目連師資二百人。耶舎子等五十人。皆仏成道。先得度脱。感仏深恩。常随従也。

千二百五十名の常随衆じょうずいしゅうはどこから来ているのかということに関しては以下の通りである。迦葉かしょう三兄弟が率いたそれぞれの教団、教祖きょうそ及びその弟子らを合わせて千名。舎利弗しゃりほつと目連もくれんがそれぞれ率いた教団、教祖及びその信者らを合わせて二百名。更に耶舎やしや及び彼が率いた五十名の若者も比丘となっていた為、上記人数の総計は千二百五十名に達した。（実際には千二百五十五名であるが、端数はすうを省いた為に、千二百五十名となっている

のである。皆お釈迦様に学び、修行を重ねた結果、全員が悟りの境地に達し、いち早く解脱することができたので「いわゆる証果のこと」、心より深い恩を感じ、それに報いなければならぬと発起し、仏のそばを離れることなく常随衆となつたのである。

戊二・参加者の位を表し、その徳を賛嘆する

經

皆是かいぜ大阿羅漢だいかん。

衆所しゆしよ知識しき。

要解

阿羅漢亦含三義。一 一應供。即乞士果。二 殺賊。即破惡果。三 無生。

即怖魔果。復有慧解脱。俱解脱。無疑解脱。三種不同。今是無疑解脱。故名大。又本是法身大士。示作声聞。証此淨土不思議法。故名大也。

阿羅漢あらかんという称号にも三つの意味がある。一つには悟りを得て、尊敬と供養を受けるに相応しい聖者のことで、漢文では応供おうぐという言葉で表されておおり、比丘即ち乞士こしを一旦卒業し終えたという意味である。二つには煩惱のことを賊ぞくと比喻し、その賊を殺すということから殺賊せつぞくと名づけておおり、それは即ち煩惱を打ち破るという意味である。三つには六道輪廻を超越して迷いの世界に生まれることなく、不生不滅ふしょうふめつの境地に達し、いわゆる魔王が怖がる果実かじつを獲得している状態という意味である。また、同じ阿羅漢と言つても、悟りの度合いにより異なる三つの次元に分かれている。それぞれ「慧解脱えげだつ」、「俱解脱ぐげだつ」と「無疑解脱むぎげだつ」という。ここでいう解脱とは無疑解脱のことを意味しており、その為に「大」という文字を冠しているのである。又、お釈迦様の講義の参加者ら本来の身分は既に「法身大士ほうしんだいし」に

なっているものたちばかりである。にも関わらず、小乗仏教の阿羅漢（しやう声聞もん）の身分を装よそわってこの世に現れるのである。お釈迦様が教える「持名念じみやうねん仏ぶつ」という摩訶不思議な浄土法門を、身を持って実践し成就したことを衆生に証明するのが目的である。そうすることでお釈迦様の教えを流布することを手助けしている為、大の名が付いているのである。

要解 從仏轉輪。 広利人天。 故為衆所知識。

皆お釈迦様に追隨し、仏の教えをより多くの「三界六道さんがいりくどう」の衆生に知ってもらい、役に立ててもらおうと、姿形を変え衆生の中に混じって、教育を手伝っている。故にその名は広く衆生に知られ親しまれているのである。

戊三・上首の名を列举する

經 長老舍利弗。摩訶目犍連。摩訶迦葉。摩訶迦旃延。摩

訶俱絺羅。離婆多。周利槃陀迦。難陀。阿難陀。羅睺羅。

憍梵波提。寶頭盧頻羅墮。迦留陀夷。摩訶劫賓那。薄拘

羅。阿菟樓駄。如是等諸大弟子。

要解 德蠟俱尊。故名長老。身子尊者声聞衆中。智慧第一。目連尊者神通

第一。飲光尊者身有金光。伝仏心印為初祖。頭陀行第一。文飾尊者婆羅門種。論議第一。大膝尊者答問第一。星宿尊者無倒乱第一。繼道尊者因根鈍僅持一偈。弁才無尽。義持第一。喜尊者仏之親弟。儀容第一。慶喜尊者仏之堂弟。復為侍者。多聞第一。覆障尊者仏之太子。密行第一。牛伺尊者宿

世惡口。感此余報。受天供養第一。不動尊者久住世間。応末世供。福田第一。黒光尊者為仏使者。教化第一。房宿尊者知星宿第一。善容尊者壽命第一。無貧尊者亦仏堂弟。天眼第一。此等常隨衆。本法身大士。示作声聞。為影響衆。今聞浄土摂受功德。得第一義悉檀之益。増道損生。自浄仏土。復名当機衆矣。

道德、智慧、能力及出家受戒してからの年数いわゆる仏語でいう戒蠟が尊敬に値するので、全員に長老と名付けているのである。（舍利弗は梵語で、「身子」という意味なので「身子尊者」とも呼ばれている。）「身子尊者」は小乗声聞衆の中では智慧第一と称されている。目連尊者は神通第一といわれている。飲光尊者は（一般的に親しまれている摩訶迦葉のことであり、）体中が（智慧の）金光を放っており、文字や言葉によらず、（阿

吽うんの呼吸にも似て）以心伝心、禪の法門の奥義を世尊から相承された為、
禪宗教の初代教祖となった。飲光尊者は頭陀行ずだぎょうにおいては第一とされている。
文飾尊者ぶんしやくは（摩訶迦旃延まかせんねんのことであり）婆羅門家ばらもんの出身であり、よく
対論や哲学的論議をされていることから「論議第一」と称されている。大
膝尊者ひざは（摩訶俱絺羅尊者まかくぢらのことであり、膝が一般より大きいことから大
膝と名付けられている）、（全ての学問を習得するまで爪を切らないという
誓いを立てたので）問答第一もんどうと称されている。星宿尊者せいしゆくは（離婆多尊者りはたの
ことであり、両親が室宿むつしほしに祈って生まれたことから、星宿と名づけられた）
無倒乱第一むとうらんと尊敬されている。（無倒乱とは迷いから完全に離れ、悟りを
開き、心乱れることなく転倒しない状態のことである）。繼道尊者けいどうは（周
利槃陀伽りはんたかのことであり、周利槃陀伽は非常に物覚えの悪い、自分の名すら

覚えられない、いわゆる勉強のできないお方であつた。最初は頭の切れ
 が悪いお方だつたが、お釈迦様が教えてくださつた僅かな（『塵をはらい、
 垢をのぞく』という）一句を唱え続け、ついには悟りを開き、尽きること
 のない弁論の才能を得る結果となり、義持第一と称賛されるに至つた。喜
 尊者は（難陀のことであり）お釈迦様の実の弟で、儀容第一である。慶喜
 尊者は（アーナンダのことであり）お釈迦様の従弟で、ブツダの側に入滅
 するまでの長い間随侍されたので、多聞第一の称号を与えられている。覆
 障尊者は（羅睺羅のことであり、ブツダが出家前に妻ヤシヨーダラーとの
 間に生まれた）太子である。（お釈迦様の教育を受けた後は自らの非に気
 づき、それ以降は決して奢ることなく修行に専念し、戒を守り、御釈迦様
 の教えを怠ることがなかつたので）密行第一と称された。牛相尊者は（憍

梵波提ぼんぱだいのことであり、尊者は）前世で聖者に対し無礼な言葉を発したことからその報いとして、（一般大衆の供養を受けることができず）天人らのみの供養しか受けることができなかつたので、「受天供養第一」と称されている。（当時の経緯としては彼が前世において、ある年配の比丘が経文を唱えるのを聞き、その声が牛のようだと嘲笑した。年配の比丘は彼に言った。「私はすでに阿羅漢を証得しており、貴方が私に無礼なことをすれば、将来必ず報いがある」と。それを聞いて彼は驚き、すぐに懺悔したが、やはり次の転生で畜生道に堕ち、以来五百世の間牛であつた。人間道に戻つた後も、牛の習性が残っており食事の際は、反芻はんすうし、食べた後も再び食物を口中に出し嚙んでいた。神通のない一般大衆の前では小馬鹿こばかにされるに違いなく、天人らの供養を受けよと世尊より命令があつた。）不動

尊者は（寶頭盧頗羅墮のことであり、僧侶仲間に軽々しく神通を示現するので、ブツダにやめるよう叱責された上、罰として涅槃に入ることは許されなかった。）末永く世間に住み、仏滅後の衆生を救済し、末世の供養に感応して衆生に幸福を与えるので福田第一と称されている。（尊者は今もこの世に住んでいる）。黒光尊者は（迦留陀夷のことであり）お釈迦様の使者で、教化に長けており教育家第一と称された。房宿尊者は（摩訶劫寶那のことであり、両親が房宿に祈って生まれたので、こう命名された）お釈迦様の弟子の中で特に天文に精通されていたので知星宿第一と呼ばれている。善容尊者は（薄拘羅のことであり、）世尊の弟子の中で（病氣知らずだったことから、無病第一、また当時は百六十歳余り）最も長く生きていたので長寿第一と称されている。無貧尊者も（阿菟樓駄のことであり）

お釈迦様の従弟で天眼第一と称される。これら常隨衆はすでに法身大士になつてゐるものたちばかりであるが、小乗仏教の声聞（阿羅漢）の身分を装い、この世に現れる目的として「影響衆」となりお釈迦様の教化をお助けする為である。これまで挙げてきた尊者達は、皆その資質に関係なく、お釈迦様が教える「持名念仏」という摩訶不思議な浄土法門に専念し、猛烈に精進した功德として、全員漏れることなく究極の御利益を得ることができたのである。（その究極の御利益とは梵語では阿耨多羅三藐三菩提といい、漢訳すると無上正等正覚、つまりは生死の迷いとあらゆる煩惱を取り払い、苦を滅し、一切を平等に正しく見ることが出来る境地のことである）。尊者らは「持名念仏」の浄土法門を真心から信じ、真心から願掛けし、真心から真面目に実行した功德として、究極の解脱（道）に限りな

く近づき、生死からは限りなく遠ざかることができるのである。そして自らが無明な暗闇を打ち破ることに、無碍の仏性光明が顕現するのである。言い換えれば自分自身の心が汚れなく清らかであれば、自身の置かれる環境も変わるという意味で、所謂「自淨仏土」のことである。又、これら尊者達は皆、「信願持名」の淨土法門を身を持って実践し、成就したことを衆生に証明したので、当機衆とも呼ばれている。(持名念仏の法門は正しく万人向けの殊勝な法門なのである)。

丁二・菩薩衆

經 並諸菩薩摩訶薩。文殊師利法王子。阿逸多菩薩。乾陀

訶提菩薩。常精進菩薩。与如是等諸大菩薩。

要解

菩薩摩訶薩。此云大道心成就有情。乃悲智双運。自他兼利之稱。仏為法王。文殊紹仏家業。名法王子。菩薩衆中。智慧第一。非勇猛実智。不能証解浄土法門。故居初。弥勒当來成仏。現居等覺。以究竟嚴浄仏国為要務。故次列。不休息者。広劫修行不暫停故。常精進者。自利利他無疲倦故。此等深位菩薩。必皆求生浄土。以不離見仏。不離間法。不離親近供養衆僧。乃能速疾円満菩提故。

(菩薩は梵語で菩提薩埵ぼだいざつたの略語であり、悟りを開いた自利と利他を兼ね備えた有情うじょうの衆生という意味である。摩訶薩まかさつも同じく梵語で摩訶菩提薩埵まほぼだいざつたの略語である。摩訶とは大・多・勝の意味があり、菩薩の中にも位が五十一ほどあるので菩薩に摩訶をつけると上位である等覺菩薩のことを指す。菩薩と摩訶薩を合わせて菩薩摩訶薩といい、大乘仏教においては全て

の修行者を含むという意味になる。) 菩薩摩訶薩とは既に悟りを開いており、自利のみでなく利他の心を持ち、眞の智慧と能力を用いて、慈悲深く衆生のことを教化する有情衆生のことである。仏は一切の法において大自在を得られたお方なので(喩えて)法王と呼ばれているが、文殊菩薩は仏の、衆生を教化するという事業いわば家業を受け継ぐ立場のお方なので、法の王子と喩えられている。菩薩衆の中で文殊菩薩は智慧第一と称賛されており、代表として一番初めにその名が挙げられている。文殊菩薩のような勇猛たる実智が無ければ信願念仏の浄土法門を深く信じ証得することはできないのである。故に代表として一番初めにその名が挙げられている。弥勒菩薩は(阿逸多菩薩のことであり、弥勒は姓で、慈悲という意味で、阿逸多は名字である。)(お釈迦様の次に)遠い未来のこの世において、仏と

なることが約束された菩薩である。現在は等覺菩薩の位で清らかな心で仏国土を莊嚴しょうげんすることを要務とされている為、文殊菩薩の次に紹介されているのである。不休息菩薩ふきゅうそくぼさつは（乾陀訶提菩薩けんたかだいぼさつのことであり）、何故不休息の名を与えられたかというと、永遠に（曠劫こうこつ）休むことなく修行を続けられているからである。常精進菩薩じょうしやうじんぼさつは（文字通り常に精進する菩薩のことである。）なぜ常精進と名付けられたかというと、自利利他（自らの悟りの為に修行し努力することと、他の人の救済に尽くすこと）の修行において全くお疲れにならないからである。これら菩薩は既に位の高い等覺菩薩になっているが、何故一様に極樂淨土への往生を求めめるのか？それには極樂淨土に行くことにより、二つの御利益を得ることができるといふ理由がある。一つには絶えず仏と共にいられること。二つには仏の説法を絶えず聞くこ

とができるということ。三つには絶えず諸上善人と親しむことができ、彼らを供養することができることである。以上三つの御利益が得られ、絶えず仏、説法、僧から離れることのない場所とは極楽浄土しかないのである。そこへ往生すれば他のどの場所よりもいち早く且つ円満な御利益を得ることができ、（言い換えれば阿耨多羅三藐三菩提）、漢文でいう無上正等正覚の境地に達することができるのである。

丁三・天人衆

經 及**積提桓因**等無量諸天大衆俱。

要解 積提桓因。此云能為主。即忉利天王。等者。下等四王。上等夜摩。

兜率。化樂。他化。色。無色。無量諸天也。大衆俱。謂十方天人八部修羅。

人非人等無不与会。無非淨土法門所攝之機也。通序竟。

釈提恒因（帝釈天）は力量・技能・腕前の三つを兼ね備えた王様という意味で、（欲界六天中の下から二番目にあたる）忉利天の天主のことを指す。等というのは忉利天の下に位置する四天王天、その上にある夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天等欲界六天以外に、更にその上にある色界天と無色界天のことも含んでいる。これら天人の数は正に無量なのである。大衆俱というのは、皆がお釈迦様の説法に集まってきたという意味である。ここでいう大衆とは（我々が住む娑婆世界の天人だけではなく）十方天人、天竜八部衆、人間、及び三悪道の衆生ら全て該当する。淨土法門に適さない衆生というのは一人も存在しないのである。以上で（一切經に通じている序分、所謂）通序を終了する。

乙二・別序（発起序）

要解

浄土妙門。不可思議。無人能問。仏自唱依正名字為発起。又仏智鑒機無謬。見此大衆応聞浄土妙門而獲四益。故不俟問。便自発起。如梵網下卷自唱位号云。我今盧舎那等。智者判作発起序。例可知也。

浄土の妙門は信じ難いほど、また不思議なほどに優れている為に、（當時）誰一人としてそれに対し質問できるものがいなかった。にも関わらずお釈迦様は、（衆生が成仏する為に必要な機縁きえんがすでに熟していると判断され）人に聞かれずとも自ら極楽浄土と阿彌陀仏の称号を皆に明かされた。これが本経発起の経緯である。またお釈迦様は円満な智慧をお持ちなので、機縁に対する観察力と判断力に狂いが生ずることなど万に一つもないので

ある。従つてこの娑婆世界の大眾をご覧になり、一部の衆生が成仏の為の機縁が熟していると判断されたので、浄土の高妙な法門をご教授なさった。その妙法を知ることによって衆生らは四つの御利益を獲得することができるようになる。故にお釈迦様は大眾に聞かれるのを待たずして自発的に説法を行われたのである。（四つの御利益とは仏様が衆生を教え導く四種の方法のことで、世界悉檀、為人悉檀、対治悉檀、第一義悉檀の四つがある。）（私が）下記（段落）の経文を發起序と判別したのには（独創ではなく、過去にも似たような）前例があったからである。それは（隋の）智者大師（智顛）が梵網経の下巻において、盧舎那仏は自らご自分の称号を皆に明かされた「我今盧舎那…等」、の段落を發起序と判別されたこととほぼ同様である。

經 爾時に 仏じ 告ぶつ 長老ごう 舍利ろう 弗しゃ。 從はつ 是り 西方ほつ。 過じゆう 十まん 萬のく 億ぶつ 仏ど 土。 有う 世せ

界かい 名み 曰わつ 極ごく 樂らく。 其ご 土ど 有う 仏ぶつ。 号ごう 阿あ 彌み 陀だ。 今こん 現げん 在ざい 說せつ 法ぽう。

要解 淨土法門。三根普攝。絶待円融。不可思議。円収円超一切法門。甚

深難信。故特告大智慧者。非第一智慧。不能直下無疑也。

淨土の法門は上根、中根、下根と、異なる素質、能力（仏語でいう機根）の衆生を満遍なく摂受する法門である。また相對の無い、円融で、不可思議な法門でもある。この法門は一切の他の法門を円満に網羅するだけでなく、更にそれらを超越するものなのである。道理が甚だ深い為、信じ難いものと受け止められることさえある。故に特に大智の力を持つ者にのみ教授されるのである。何故ならば、眞の智慧第一の者でなければ一切を

疑わず、全面的に聞き入れることができなからである。

要解

西方者。横互直西。標示現処也。十万億者。千万日億。今積億至十万也。仏土者。三千大千世界。通為一仏所化。且以此土言之。一須弥山。東西南北各一洲。同一日月所照。一鉄围山所繞。名一四天下。千四天下名小千世界。千小千名中千世界。千中千名大千世界。過如此仏土十万億之西。是極樂世界也。

西方せいほうというのは、阿弥陀仏が示現じげんされる極樂世界の方位と場所を指し示すもので、（我々が住む娑婆世界よりも）遙か彼方かなた西方にあるという意味である。十万億土というのは、（娑婆世界から）極樂浄土までの距離を表すものである。（当時のインドでは）一千万は一億といい、一億の十万倍

は十万億と表した。仏土ぶつどというのは、一尊いつそんの仏様が教化を施す国土という意味で、その範囲は（一つないし複数の）三千大千世界にまで及ぶものとされる。先ず我々が住む娑婆世界で例を挙げるならば、須弥山しゆみせんを娑婆世界の中心とし、その東西南北に各一大州ずつ存在し、等しく太陽に照らされ、月の恩恵を受けている。更にその周りに鉄圍山てつゐせんがあり、この世界を一つの単位世界と呼ぶ。一つの単位世界を千個集めて小千世界しょうせんと呼び、小千世界を千個集めて中千世界ちゆうせんと呼び、更に中千世界を千個集めると大千世界だいせんと呼ぶことになる。（このように、「三千大千世界さんぜんだいせん」は実に「大千世界」と等しい概念で、千の三乗個の世界が集まった空間のことを指すのである。）我々の娑婆世界から西方に向かつて、仏土十万億個を通過すれば、極樂世界に到達することができるのである。

要解 問。何故極樂在西方。答。此非善問。仮使極樂在東。汝又問何故在東。豈非戲論。況自十一萬億仏土視之。又在東矣。何足致疑。

何故極樂浄土は西方なのか？という質問が存在するが、その答えは質問自体が無益且つ無意味であるといえる。仮に極樂浄土が東方にあると言ったら貴方は同じように何故東方なのかと聞くに違いない。こういったやり取りは戲論であろう。況してや十一萬億仏土の側から見れば、極樂浄土は当然東方とうほうにあり、疑う必要などないのである。

要解 有世界名曰極樂。序依報国土之名也。豎約三際以并時劫。横約十方以定疆隅。故称世界。極樂者。梵語須摩提。亦云安養。安樂。清泰等。乃

永離衆苦第一安隱之謂。如下広釈。

とある彼方かなたにある世界、名を極樂という。これは依報えほうである国土の名を意味している。縦は（現世、過去世、未來世の）三世があるので時間を表し、横は十方があるので空間を表す。時空を合わせて世界と呼ぶ。極樂は梵語では須摩提しゆまだいといい、（漢訳では）安養あんよう、安樂、清泰せいたい等ともいう。永遠に衆苦しゆくから離れ、安穩あんおんの日々が訪れるという意味である。以下に詳しく解説する。

要解 然仏土有四。各分淨穢。凡聖同居土。五濁重者穢。五濁輕者淨。

仏土は四つの環境に分かれており、それぞれ淨穢じようたいの程度が異なる。凡聖ぼんしょう同居土どうじど（の衆生）で言えば、五濁ごじよくの度合いが高いほど穢けがれ、軽いほど清淨

であるとされる。

要解

方便有余土。析空拙度証入者穢。体空巧度証入者淨。

方便有余土（の衆生）で言えば、析空観しやくくうかんという分析法を用いて、執着を無くし、方便有余土を証得した者より、体空観たいくうかんという直接的な体現方で直ちに方便有余土を証得した者の方が巧妙で清淨であるといえる。言い換えれば析空観は体空観に比べ劣っており、穢れているとされる。

要解

実報無障碍土。次第三観証入者穢。一心三観証入者淨。

実報無障碍土じつぽうむしょうげど（の衆生）で言えば、次第三観しだいさんかんの方法で実報無障碍土を証得した者より、（一念のうちに空・仮・中が円融する）一心三観いっしんさんかんという直

接的な方法で直ちに実報無障碍土を証得した者の方が清浄である。

要解 常寂光土。分証者穢。究竟満証者浄。

常寂光土じようじやくこうどで言えば、（真実の部分のみ証得する）分証者ぶんしんしやうは穢であり、究竟くききやう（完全なる悟り）で円満に清浄な法身（真実そのまま全て）を証得する者が清浄である。

要解 今云極楽世界。正指同居浄土。亦即横具上三浄土也。

今でいう極楽世界は正に同居土のことを指して言っているのである。何故極楽と言うのだろうか？そこには紛れもない理由があるのである。（それは他方のどの世界でも凡聖同居土の衆生は上位三浄土の勝報「待遇」を

享受することができないが）唯一極樂世界の凡聖同居土だけが等しく上位三浄土の勝報を享受することができるからである。

要解

有仏号阿弥陀。序正報教主之名也。翻譯如下広釈。仏有三身。各論單複。法身單。指所証理性。報身單。指能証功德智慧。化身單。指所現相好色像。法身複者。自性清浄法身。離垢妙極法身。報身複者。自受用報身。他受用報身。化身複者。示生化身。応現化身。又仏界化身。随類化身。

極樂世界には仏がおいでになり、その称号は阿弥陀であるという経文の内容については、正報の教主の名を説明しているものである。以下に詳しく解釈する。仏（ここでは阿弥陀仏を指す）には三つの身が備わっている。一つには法身（哲学でいう宇宙生命の本体のこと）、二つには報身、三つ

には応身おうじんである。三身さんじんの本質を見極めるにはそれぞれ単複たんぶくの角度から見る必要があるとされている。単法身たんぽうしんというのは仏が証得した真如しんにょ仏性ぶつじょうの境界を指す。単報身たんほうじんというのは真如しんにょ仏性ぶつじょうを証得する為に備えなければならぬ功德智慧くんとくちゐのことを指す。単応身たんおうじんというのは仏として衆生を救う為、人びとの性質に応じて、この世に様々な姿で現れ、色々と手段を巡らせて人々を導く姿のことを指す。複法身ふくぽうしんというのは二重にじゆうという意味で一つが自性じじょう清浄じじょう法身ぽうしんで、もう一つがありとあらゆる無明煩惱むみやうぼんぬを断ち尽くす妙極みょうごく法身ぽうしんである。複報身ふくほうじんというのは一つが自受用報身じじゆうほうじんで、もう一つが他受用報身たじゆうほうじんである。複応身ふくおうじんというのは（お釈迦様のようにこの世に出生される）「示生しじょう化身けしん」と、（必要に応じて随時ずいじ応化おうげしたり、消失したりする）「応現おうげん化身けしん」がある。また仏界ぶつがいにおいて（例えば阿彌陀仏とお釈迦様がそれぞれ極樂世

界と娑婆世界に応身仏として）仏の身分、容姿のみで示現じげんされる、仏界応身もいれば、仏以下の他の身分で随類ずいるいおちどう応同の方法で応身されることもある。

要解 雖弁単複三身。実非一非三。而三而一。不縦横。不並別。離過絶非。不可思議。

以上のように三身を単複の角度からそれぞれ見てきたが、その実三身とは一つでもなければ三つでもないのである。それは三即一であり、一即三なのである。性質と道理（縦のこと）のみでもない、表面事相（横のこと）のみでもない、縦横一つを全体として円融に捉え、並べるでもなく、差別をせず、分別、執着という過ちから離れ、間違いを断ちさえすれば真実に

深く通達し、明瞭且つ不可思議な境地へ到達する、という意味なのである。

要解 今云阿彌陀仏。正指同居土中示生化身。仍復即報即法也。

今でいう阿彌陀仏とは、同居土どうごどの中において「示生応身仏」としておいでになる、という意味を指す。応身とはいえ（他の世界の応身とは違って、寿命等があまりにも長い為に）同時に報身でもあるし法身でもあるのである。

要解 復次世界及仏皆言有者。具四義。的標実境。令欣求故。誠語指示。

令專一故。簡非乾城陽焰。非權現曲示。非緣影虚妄。非保真偏但。破魔邪權小故。円彰性具。令深証故。

また、はつきりと（極楽）世界は存在する、そこに阿弥陀仏がおいでになる、（世界悉檀、為人悉檀、対治悉檀、第一義悉檀の）四つの御利益が具わっている、といった疑いようなない真実の境地を敢えて表明した理由は衆生に喜んでそこに往生（移住）してもらう為である。（釈迦仏、阿弥陀仏及び十方諸仏達の）ご開示は全て誠実なものであり、その目的は只一つ、衆生に専ら浄土の念仏法門を「信、願、行」してもらうためである。西方極楽浄土と阿弥陀仏は真の境地であり、乾闥婆城（蜃気楼）でもなければ陽炎でもない。（李長者が主張されている）仮の施設でもなければ六塵の縁影や虚妄でもない。（小乗仏教が証得する）有余涅槃の境地でもなければ（藏教の）偏った真理でもなく、（別教の中道のみにとらわれる）「但中の理」でもない。（何故拙僧がこれら数多くの例を逐一挙げてまで分析

していうのかと言えば、衆生に上述のような様々な誤った、または偏った見解、究極でない見解を取り除いてもraitたいが故に他ならない。西方極樂浄土の依正莊嚴（物質環境、自然環境と人事環境の真善美慧）が本来自性に具わっているものであると、円満に顕彰されるのである。（清らかな心を修めることによつて、「心浄ければ則ち仏土浄し」という深い境地を証得させることが、このご開示の目的なのである。

要解 今現在説法者。簡上依正二有。非過去已滅。未来未成。正応発願往生。親觀聽法。速成正覚也。

（阿彌陀仏が）今尚説法なほせつぽうなさつていると言われるのは、上述の依報と正報が紛れもなく存在している、という事実を強調しているのである。阿彌

陀仏はすでに御入滅にゆうめつなさった過去かこ仏ぶつでもなければ、未来みらい仏ぶつでもなく、正に今この現在におわす仏なのである。故に衆生は阿弥陀仏がおいでになる極樂世界へ往生し、（阿弥陀）仏が説かれる法をそのお側で拜聴はいちやうし、速やかに無上正等正覺むじやうじやうじやうの境地を証得する誓願せいがんを立てるべきなのである。

要解

復次二有現在。勸信序也。世界名極樂。勸願序也。仏号阿弥陀。勸持名妙行序也。復次阿弥序仏。説法序法。現在海会序僧。仏法僧同一実相。序体。從此起信願行。序宗。信願行成。必得往生見仏聞法。序用。唯一仏界為所緣境。不雜余事。序教相也。言略意周矣。初序分竟。

また、一つには極樂世界、二つには阿弥陀仏が存在している、と現在（と
いう時間）を敢えて強調しているのには衆生に清らかな信心を起こさせる

という目的がある。極楽世界という名は釈迦仏が衆生に対し、苦難に満ちた世界を断捨離し、極楽の世界へ生まれ変わること発願するようお勧めになった、という意味なのである。仏の名号である阿彌陀は、釈迦仏が衆生に阿彌陀仏の名号を信受し、かたく執持するという妙行を勧められた、という意味なのである。また、阿彌陀というのは仏を意味しているのであり、説法というのは法を説く、を意味しており、蓮池海会とは阿彌陀仏の説法大会に参列されている諸僧を意味している。仏、法、僧その全てが真心（真如仏性）の現れであり、正にこれこそが（宇宙、生命の）実相であり、本体である。この（仏・法・僧に代表される）一体三宝を拠り所とし、「信・願・行」を起こさなければならぬ、というのが本經の宗旨である。

「真心より信じ、切願し、ただひらすら阿彌陀仏の称号を唱える（一向専

念ねんの意）ことが、西方極樂浄土へ往生する為の必須条件なのである。この三つの条件を成就すれば必ずや往生することが可能になり、（阿弥陀仏や諸しよ）仏に拜謁はいえつすることができ、そのお側で説法を拜聴はいちやうできるのである。これが真心の作用・受用じゆようなのである。意識するのは阿弥陀仏のみ、他一切の雑念がない。これが浄土法門教学の様相ようそうなのである。言葉こそ簡略であるが、その意味は限りなく深く、且つ円満で欠ける処などないのである。序の冒頭部分はこのにて終了する。

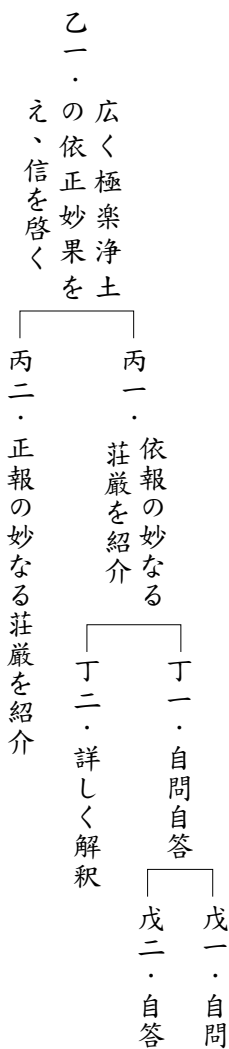
甲二・正宗分

- 乙一・ 広く極樂浄土の依正妙果を讃え、信を啓く
- 乙二・ 衆生に往生を求めるときと特別に勸化し、発願させる
- 乙三・ 行者に執持名号を以て行いを立てることを正しく示す

要解 信願持名。一經要旨。信願為慧行。持名為行行。得生与否。全由信願之有無。品位高下。全由持名之深淺。故慧行為前導。行行為正修。如目足並運也。

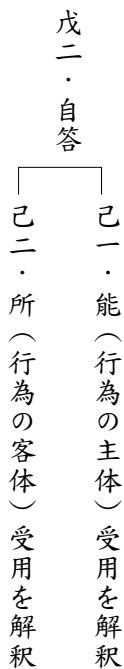
信願持名しんがんぢみやうは本經の要旨であるといえる。信願というのは真心より極樂世界と阿彌陀仏の存在を信じ、そこへの往生を切願するという意味で、これは正に智慧に満ち溢れた行いであり、つまり「慧行」なのである。持名とは福德ふくとくを得る行い、という意味であり、つまり「行行」のことである。極樂世界へ往生できるか否かは、全て信願の有無うむに由り決定される。往生を遂げた後の品位ごうびの高下は、全て持名の深淺しんせんに由って決定されるものなのである。故に大智に満ち溢れた信願の行いが原動力となつて、一向專念阿彌陀仏という本業が成就するのである。それはあたかも目と足のような関係

のものであり、その両方が同時に作用してはじめて成し遂げられるものなのである。



戊一・自問

經
舍利弗。彼土何故名為極樂。



己一・能（行為の主体）受用を解釈

經 其国衆生。無有衆苦但受諸樂。故名極樂。

要解 衆生是能受用人。等覺以還皆可名。今且約人民言。以下下例上上也。

（ここでいう）衆生とは（無情衆生ではなく精神的、物質的ありとあらゆるものを）享受きやうじゆできる人間に限定していつているもので、等覺菩薩とうがくを始めそれより下位のものたちのことは、全て衆生と呼ぶことができる。ここでいう人民とは極樂世界の下位に当たる凡聖同居土ぼんしやうどうじゆどに往生したもののたちのことを指し、下位のものですら衆苦を離脱しているのだから、その上の位に位置するものたちなどは言うまでもない。

要解

娑婆苦樂雜。其実苦是苦苦。遍身心故。樂是壞苦。不久住故。非苦非樂是行苦。性遷流故。彼土永離三苦。不同此土对苦之樂。乃名極樂。

娑婆世界とは苦樂入り混じる世界のことである。その事実に基づいて言え、苦というのは苦苦のことである。(生、老、病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五蘊盛の八苦に代表される様々な苦痛を苦と感ずることを指す。)それ故に精神と肉体とが上述のような八苦の悩みに逼迫し、悩乱するのである。樂というのは壞苦のことであり、樂境壞滅のことである。人間にとって好ましいと感ずる対象が、次々と壞されてゆく時に感ずる苦痛のことである。(心静かな時は)苦も樂も感じないことがあるが、それは行苦というものにあたる。(行苦とは読んで字の如く、性質というものは常に移り変わるもので、苦樂のない状態を保とうと思っても永遠に保つ

ことができないことを意味する。)ところが西方極樂淨土は苦苦、壞苦、行苦の三種の苦を永遠に離脱することができるので、我々の住む娑婆世界とは全く異なるものなのである。娑婆世界においては、苦と樂とは相對する存在であるのに対し、極樂世界とは相對するものがない、正に究極の樂の境地であるということが出来る。故に極樂と名付けられているのである。

要解 一往分別。同居五濁輕。無分段八苦。但受不病不老。自在遊行。天

食天衣。諸善聚會等樂。

(次は十方世界、とりわけ我々が住む娑婆世界の四土との比較を通して)極樂四土の概況を解釈する。(皆同じ同居土と称しているが)極樂の同居土は五濁ごじよくが極めて軽いといえる。(何故極樂の同居土にまだ五濁が存在す

るのかという疑問が残るが、それは同居土に往生を遂げた元凡人らは見思けんじ惑わくを一時的に制御することができるとの、完全に絶つには至っていないからである。また、極樂の同居土には分段輪廻ぶんだんりんねと八苦はつくが皆無なので、病氣や老いが存在しない。更には時空を自在に行き来することができる。(その行動範囲は尽虚空遍法界じんこくうへんほうがいまでであり、過去も未来も自由自在に行き来することが可能である。そればかりか)衣食も随念即至ずいねんそくし、随念消失ずいねんしょうしつである。同居土に往生した元凡人たちはこのように諸上善の菩薩たちと一処ひとところに集まり、様々な楽しみを享受することができるのである。

要解 方便体観巧。無沈空滞寂之苦。但受遊戯神通等樂。

極樂の方便土に往生した菩薩たちは体空観たいくうかんという直接的な体現法で直ち

にその境地を証得したので実に巧妙であると言える。(ところが、娑婆世界のしょうじょうしゅうじゃ小乘聖者が見思惑を断滅し証得した方便土とは、円満な涅槃までにはまだかなりの距離があり、その途中にある休憩所にも似た境地に過ぎない。にも関わらず、それが終点だと勘違いし、上には求めるべき菩提が、下には救うべき衆生がもういないと、修行を一旦中断してしまう、「沈空ちんくう」の難に陥った境界なのである。)極楽方便土の菩薩たちは上述のような、空の境地に留まり、前進しない沈空滞寂ちんくうたいじやくの苦境を味わわずに済むのである。のみならず宇宙万有の「有」の事相じそうにとらわれず、同時に宇宙生命の本体である「空」の本質にもとらわれない、その両方を享受しながらその両方に偏らない、遊戯神通ゆげじんつうを楽しんでいるのである。

要解 実報心觀円。無隔別不融之苦。但受無碍不思議樂。

西方実報無障碍土に往生した大菩薩たちは一念のうちに空・仮・中が円融する、一心三觀という直接的な方法で直ちに理無碍、事無碍、理事無碍、事事無碍といった妨げの存在しない四無碍の境地を同時に証得できるので、（他の世界で四諦觀と次第三觀の方法で実報土を証得した菩薩たちと違って）滞りや妨げといった苦に惑わされることがない。自由無碍が故に（我々の世間でいう苦樂の樂とは違った我々には全く考えの及ばない）不思議な樂しみを享受することができるのである。

要解 寂光究竟等。無法身滲漏。真常流注之苦。但受称性円満究竟樂。

極樂の常寂光土とは完全なる悟りの境地であり、円満、且つ清淨法身

（真実そのまま全て）を体现する如来の境地のことである。（他の世界の常寂光土に存在する）「法身のひび割れ」や「真常流注しんじょうるちゆう」のような苦しみは皆無なのである。故に常寂光土では真如本性と相応する円満で究竟くきようなる楽しみを享受することができるのである。

要解 然同居衆生。以持名善根福德同仏故。円浄四土。円受諸樂也。

しかし（極樂の）同居土へ（業を持ったまま）往生した衆生は、信・願・持名することにより、（阿彌陀仏をはじめとする諸仏の善根ぜんこんと福德を全部自分の中に取り組むことが可能なので）善根と福德が諸仏と同じ次元になる為、諸苦を断ち切り、同居土に留まるのみならず、四土における究竟で円満なる諸樂を一通り享受することができるのである。

要解 復次極樂最勝。不在上三土。而在同居。良以上之。則十方同居。遜其殊特。下又可与此土較量。所以凡夫優入而從容。橫超而度越。仏説苦樂。意在於此。

また、極樂世界において最も優れているのは上位三土ではなく、正にこの同居土なのである。同居土と上位の方便土、実報土、寂光土という縦の関係から比較しても、その殊勝しゆしやうで奇特な面においては、他の十方世界は極樂世界には遠く及ばない。横の関係である同居土同士とも、（とりわけ）我々が住む娑婆世界の同居土とも（繋がりを持って）較量くらりやうすることもできるのである。従つて極樂浄土への往生の法門は（煩惱にまみれているはずの）凡人ぼんじんにとつて、普段から信願、精進念仏し、最後の最後になり真心よ

り信じ、切願し、一心念仏しさえすれば、極樂浄土に往生できる程に容易たやすい法門なのである。（通常では長い時間をかけ一定の段階を踏む必要がある。先ず見思惑を断ち切り、三界六道の生死を超越しなければならぬ、という縦の法門が存在するが）この信願持名の法門は煩惱を持つものが生死の苦海くかいを渡りきり、六道輪廻を一気に飛び越え、突如として仏の悟りへと導かれるのである。釈迦仏は衆苦皆無、只衆樂のみを受ける、と説かれる意図が正にここにあるのである。

己二・所（行為の客体）受用を解釈

經 又舍利弗。極樂国土。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。皆

是四宝周匝圍繞。是故彼国名為極樂。

要解 七重。表七科道品。四宝。表常樂我淨四德。周匝圍繞者。仏菩薩等

無量住処也。皆四宝則自功德深。周匝繞則他賢聖遍。此極樂真因緣也。

七重ななえとは、（釈迦仏が教える成仏法である）七科しちこ三十七道品さんじゅうしちどうほんのことを表し、（三十七道品とは三十七の修行項目のことで、大、小乗仏教全ての教えを含んでいる為、円満の意を表す。）四宝しほうとは、自性に元々具わっている「常じょう、樂らく、我が、淨じょう」の四種類の本質を意味し、四徳しとくとも言われている。（同様に円満の意を表している）。極樂浄土へ往生したものの住居の周りを重々に囲んでいるのは（阿弥陀）仏と菩薩たちの住居で、その数は無量である。四宝が全て顕著に現れたということは何を意味するかというと、（念仏者は信願持名することにより、阿弥陀仏と諸仏しよぶつの善根ぜんこんと福德を全部自分の中に取り組むことに成功したので、）自分の功德が大きいということである。

欄楯らんじゆん等で重々に囲んであるのは仏と菩薩方の住居じゆうきよなので、諸仏と菩薩の数も無量である。極樂浄土へ往生したものの住居の周りを重々に囲んでいることは阿彌陀仏と諸上善人たちがあらゆる空間に存在している、という意味である。これが極樂と名付けられる真の因縁なのである。

要解 此等莊嚴。同居浄土是増上善業所感。亦円五品觀所感。以縁生勝妙五塵為体。

これら莊嚴なる居住環境を感得かんとくできたことには、それぞれ因縁がある。同居土でいえば、（信願持名という）至善しぜんと呼ばれる善業ぜんごうを修めたことが一つの因縁となっている。また円教えんきょうにおいては五品觀行ごほんかんぎょうを修め、その功德を全て極樂浄土へ往生する為に回向えこうしたことが因縁となっている。上述の

因縁により同居土が生まれたのである。（因縁があまりにも至善の為に）感得した居住環境も勝妙なる五塵の境地なのである。

要解 方便浄土是即空觀智所感。亦相似三觀所感。以妙真諦無漏五塵為體。

方便土でいえば、即空觀（または体空觀）という直接的な体現法を修めたことが因縁の一つとなっている。また（円教においては一念のうちに空・仮・中が円融する、一心三觀という直接的な方法を修行し、見思、塵沙の二惑を断ち）悟り（仏）に相似する六根清浄の位を証得し、その功德を全て極楽浄土へ往生する為に回向したことが因縁の一つとなっているのである。上述の因縁により方便土が生まれたのである。（見思、塵沙の二惑を断ち切り、漏泄する不浄なものが尽きていた事により）感得した居住環

境は妙なる真諦しんたいで無漏むろの五塵の境地なのである。

要解

実報浄土是妙仮観智所感。亦分証三観所感。以妙俗諦無尽五塵為体。

実報土でいえば、妙なる仮観げかん（色不異空しきふいこくう、空不異色くうふいしき、色即是空しきそくぜくう、空即是色くうそくぜしき）、仮なる存在こそ妙なる存在、「仮有即妙有けうそくみやう」という方法を修めたのが一つの因縁となっている。また（円教においては一念のうちに空・仮・中が円融する、一心三観という直接的な方法を修行し、見思、塵沙の二惑を断ち、四十二品ある無明惑のうち、最後である元品の無明だけを残した、他の全ての迷いを滅し）仏性を分々に表していく位を証得され、その功德を全て極楽浄土へ往生する為に回向したのがもう一つの因縁になっている。上述の因縁により実報土が生まれたのである。（あまりにも妙なる仮

有の為に）感得した居住環境は妙なる（無量の随類化身の）俗諦で受用が無尽蔵の五塵の境地なのである。

要解 常寂光土是即中觀智所感。亦究竟三觀所感。以妙中諦称性五塵為体。

寂光土でいえば、即中觀そくちゆうがんという方法を修めたのが一つの因縁となつてゐる。また（円教においては一念のうちに空・仮・中が円融する、一心三觀という直接的な方法を修行し、見思惑、塵沙惑、他の全ての無明惑を断尽した）円教究極の最高位を証得された境地といえる。上述の因縁により寂光土が生まれたのである。寂光土は妙なる中諦ちゆうたいで自性に相応する五塵を体とするものである。

要解 欲令易解。作此分別。実四土莊嚴。無非因緣所生法。無不即空假中。

所以極樂同居淨境。真俗円融。不可限量。下皆倣此。

上述のように、極樂世界を解り易く理解して頂く為に、（同居土、方便土、実報土、寂光土の）四土に分けてそれぞれを解釈した。しかしこれら四土の莊嚴なる居住環境は、実を言えば因縁なくしては生まれないものである。四土とも即空・即假・即中でないものはないのである。従つて極樂の同居土は非常に清浄で、また真俗円融（四土とも円融無碍の意）であり、（即空・即假・即中との渾然一体の）程度は計り知れない。以下も同様である。

要解 問。寂光惟理性。何得有此莊嚴。答。一一莊嚴全体理性。一一理性

具足莊嚴。方是諸仏究竟依果。若寂光不具勝妙五塵。何異偏真法性。

寂光土は真如本性の理のみを表しており、実在の浄土ではないが、何故この様な莊嚴があるのかと疑問を抱くものもいるが、その答えは、以下の通りである。同居土、方便土、実報土の莊嚴さは全て事相であり、それらの事相は真如本性の理り体たいより変現へんげんされたものである。それら一つ一つの理体には充分なる莊嚴（事相）さが具わっている。これこそ正に諸仏が証得した究極の依果えかなのである。もしも、寂光土に勝妙なる五塵が具わっていなければ、（小乗仏教の阿羅漢が証得した）有余涅槃と何ら違いがないのではなからうか？

丁二・詳しく解釈

戊一・個別に所受を解釈

己一・生処を解釈

己二・まとめて仏の力を示す

戊二・能受、所受を合わせて解釈

己一・生処を解釈

經

又舍利弗。極樂国土有七宝池。八功德水。充滿其中。

池底純以金沙布地。四辺階道。金。銀。瑠璃。玻璃合成。

上有楼阁。亦以金。銀。瑠璃。玻璃。砮磲。赤珠。瑪瑙而

嚴飾之。池中蓮華。大如車輪。青色青光。黄色黄光。赤色

赤光。白色白光。微妙香潔。

要解

上明住处。今明生处。宝池金银等所成。不同此方土石也。

以上は（釈迦仏が）極楽世界の居住環境を（我々娑婆世界の住民に）説いて下さったものである。經文の以下の箇所は極楽世界に往生した際の生しよ処じよについてのおくだりである。七宝しつぽうの池というものが存在し、それは金銀等七つの宝でできている。娑婆世界が土や石でできているのとは（全く）異なっているのである。

要解

八功德者。一澄清。異此方渾濁。二清冷。異寒熱。三甘美。異鹹淡劣味。四輕軟。異沈重。五潤沢。異宿腐退色。六安和。異急暴。七除飢渴。異生冷。八長養諸根。異損壞諸根。及沴戾增病没溺等也。

（また）八功德水はちくどくすいというものが極楽世界には存在する。一に澄淨ちやうじやうで、（澄んで清らかなの意）娑婆世界の水のように混濁こんだくしたり汚濁することがない。

二に清涼せいりょうであるが熱くも冷たくもなく、常に適温である。三に甘く美味であり、娑婆世界の塩辛さ（海）、味気無さ（川）、不味さとは異なっている。四に軽く柔らかい。（下から上へ逆流も浮遊も可能なので）娑婆世界の水のような重さがないのである。五に豊潤ほうじゆん（潤沢）である。娑婆世界の水のように変質することがなく、腐蝕ふしよくしたり、色退せたりすることがない。（極樂世界では、更に水に物を入れると色が一層鮮やかになり、金属であれば光沢が一層増すのである。）六には穏やかに和している（安和の意。）波や時化しけ、瀑布ぼくふといったものが存在しない。七に飢えと渴きを一度に解消できるといった特徴がある。それは生でもなければ、冷たくもないので（喉や腹を壊すこともない）。八に身も心も養生でき、育むはぐくことも可能である。娑婆世界のように、心身を傷つけたり、疾病をもたらしたり、

人間等を溺れさせたりといった弊害がない。

要解

充滿其中。異枯竭汎濫。底純金沙。異污泥。階道四宝。異磚石。陛級名階。坦途名道。重屋為樓。岑樓名閣。七宝樓閣。異此方土木丹青也。

樓閣是住处。及法会处。但得宝池蓮胞開敷。便可登四岸。入法会。見仏聞法也。

七宝の池には常に八功德水が満々と湛えられ、一定の水位を保っており、娑婆世界にある枯渴、汎濫といったものはない。池の底には金の砂が敷き詰められており、娑婆世界の汚泥とは異なっている。階段と道路は（金、銀、瑠璃、玻璃の）四宝でできている。娑婆世界の煉瓦や石等と異なっている。階段とは高低差のある場所へ移動する為の構造物のことであり、平

らな道を道路という。二階建て以上の建築物は楼と呼び、（一階建てもを含めて）屋根の先端が鋭く尖っているものが閣である。楼閣は全て七宝（金、銀、瑠璃、玻璃、碑磔、瑪瑙、赤珠）でできており、娑婆世界の土や木材や丹青とは異なる。楼閣は住居でもあり、説法を行う場所でもある。極楽世界に往生したものは、皆七宝の池にある蓮の花の蕾の中で花が咲くまで修行を続け、蓮の花が咲く頃には、（実報土の境地を証得し、）自力で四土を自由に行き来でき、阿弥陀仏の報身に拜謁がかない、阿弥陀仏のお側で説法を拜聴できる。（これが花開見仏悟無生の境地なのである。）

要解

華輪者。輪王金輪大四十里。且拳最小者言。若拋觀經及無量寿會。大小実不可量。由同居浄土身相不等故也。青色名優鉢羅。黄色名拘勿頭。

赤色名鉢頭摩。白色名芬陀利。由生身有光。故蓮胞亦有光。然極樂蓮華。光色無量。此亦略言耳。微妙香潔。略嘆蓮華四德。質而非形曰微。無碍曰妙。非形則非塵。故潔也。蓮胞如此。生身可知。

（七宝の池には、車輪のように大きな蓮華れんげが咲いている。）その蓮の蕾の直径は金輪王こんりんおうがお乗りになつてゐる輪宝の大きさで言うならば、最も小さいもので四十里（二十キロメートル）あるので、蕾の大きさも最低でもその位はあるのである。『観無量寿仏経』と（『大宝積経ほうしゃく』中の）「無量寿如来会」に記載されている経文に拠れば、その大きさは大小様々であるが、大きいものでは実に計り知れない程巨大なものもある。（何故大小様々なのかというと）同居浄土にある七宝の池の蓮華の中にいる衆生たちの、念仏の集中力の程度がそれぞれ異なつてゐるからである。青色は（梵語で）

優鉢羅華、黄色は拘勿頭華、赤色は鉢頭摩華、白色は芬陀利という。蓮華の中の本体（生身）が発光しているので、蕾も光を放っているのである。しかし極樂世界の蓮華は無量の光を持っているので、ここでは上記四色の紹介のみに留めておく。微妙香潔とは、蓮華に具わる四種の徳を略式で賛嘆する言葉である。蓮華は衆宝からできている質量、形状共にあるものだが、その大きさはそこにいる念仏者の心によって様々に変化し、一定の形ではないので「微」という。自在無碍（通行を妨げるものがない）なので「妙」という。（また香りを放つので「香」という。）化身なので粉塵などで汚れることもないので「潔」という。蕾の状態でもこれ程の莊嚴さを具えているので、そこに住んでいる者達の身体、色、莊嚴さに至っては想像に難しくない。

己二・まとめて仏の力を示す

經 舍利弗。極樂国土。成就如是功德莊嚴。

要解

明上住処生処種種莊嚴。皆是阿彌陀仏大願大行称性功德之所成就。

故能遍嚴四種淨土。普攝十方三世一切凡聖令往生也。

以上が極樂世界における衆生達の居住環境と生処環境の様々な莊嚴さについてのおくだりである。これらの環境は全て阿彌陀仏が大いなる誓願を立てになり、大いなる修行を続けられ、ついに真如本性に相応する功德の御加持の結果より成就されたものなのである。従って普遍的、（且つ平等に同居土から寂光土までの）四土を莊嚴にすることができ、また、普遍的（且つ平等）に十方三世、（下は三惡道の衆生、上は四聖の衆生まで）一

切の凡聖ぼんしやうを摂受しやうじゆされ、極樂世界へ往生させることがおできになったのである。

要解

復次仏以大願作衆生多善根之因。以大行作衆生多福德之縁。令信願持名者。念念成就如是功德。而皆是已成。非今非当。

また、阿彌陀仏は自らの大いなる誓願を衆生の多善根たぜんこんの因とされ、自らの大いなる修行を衆生の多福德たふくとくの縁とされた為、信願持名の者達に念々に「如是」の功德を成就させることができるのである。更に言うならば極樂世界の依報莊嚴は阿彌陀仏のお手により既に完成されたものであり、今創っている最中でもなければ、将来創造するものでもないのである。

要解

此則以阿弥種種莊嚴作增上本質。帶起衆生自心種種莊嚴。全仏即生。

全他即自。故曰成就如是功德莊嚴。

これは釈迦仏が、阿弥陀仏の示現なされた様々な依正莊嚴を以て衆生の増上の本質とし、衆生自身の中の仏性に本来具わっている様々な莊嚴を喚起させるのを目的としたものなのである。極樂世界、阿弥陀仏がお示しになっている様々な依正莊嚴とは、我々凡人の中の仏性にも本来具わっている様々な莊嚴そのものであり、これが正に真相なのである。阿弥陀仏、極樂世界とは全て自らの心より顕現したもので、全ての仏は即ち衆生である。全ての他は即ち自分自身である。故に「如是」によせ功德、「如是」莊嚴を成就できるとおっしゃっているのである。

戊二・能受、所受を
合わせて解釈

- 己一・五根と五塵を解釈
し受用を明かす
- 己二・耳根と声塵を解し受用を明かす
- 庚一・正常の聞法の径路を明かす
- 庚二・小まとめ

庚一・正常の聞法の径路を明かす

經 又舍利弗。彼仏国土。常作天楽。黄金為地。昼夜六

時。雨天曼陀羅華。其土衆生。常以清旦。各以衣祴。盛

衆妙華。供養他方十萬億仏。即以食時。還到本国。飯食

經行。

要解 楽是声塵。地是色塵。華是色香二塵。食是味塵。盛華散華經行是触

塵。衆生五根对五塵可知。

(天)樂は(五塵中の)声塵を表す。地は(道路が黄金よりできていることから)色塵を表す。(曼陀羅)華は、色塵と香塵の二塵を表す。食は味塵を表す。花を花籠けこに盛り、散華さんげし、経行きょうぎょうす、とは触塵を表す。(このように、極楽世界にも五塵が存在するが、住民は皆心が清らかな為、影響されることは全くない。)ところが、娑婆世界の住民となると、(眼、耳、鼻、舌、皮膚の)五根がそれぞれの五塵を感受する時、どう影響されるかは想像に難しくない。

要解

常作者。即六時也。黄金為地者。七宝所蔽地界。体是黄金也。日分初中後。名昼三時。夜分初中後。名夜三時。故云昼夜六時。然彼土依正各有光明。不仮日月。安分昼夜。且順此方仮説分際耳。

常作じょうざくとは、六時ろくじを表す。(一日中中断することがないことを意味する)。
 黄金の地をなすとは、道路と道路の間は全て七宝で飾られ、地面に敷き詰
 められているのが黄金おうこんという意味である。昼は晨朝じんじょう、日中にっぢゅう、日没にちもつの三つに
 分けられ、昼三時ひるさんじという。夜は初夜しよや、中夜ちゅうや、後夜こうやに分けられ、夜三時よるさんじとい
 う。夜昼よるひる合わせて六時という。しかし(実を言うならば、)極樂世界の住
 民も物も全て自ら発光しているので、(娑婆世界のように)太陽や月は存
 在しないのである。夜昼と表現しているのは、娑婆世界の住民の常識と分
 別に従っているだけなのである。

要解

曼陀羅。此云適意。又云白華。衣祴。是盛華器。衆妙華。明非曼陀
 羅一種。応如妙經四華。表四因位。供養他方仏。表真因会趨極果。果徳無

不遍也。且拋娑婆言十萬億仏。意顯生極樂已。還供釈迦弥勒。皆不難耳。
若阿弥神力所加。何遠不到哉。

曼陀羅華とはこちらでは適意、（思いのままと）、いう意味で、白華とも呼ばれている。衣え械こくとは花を盛る容器のことである。（現在では花籠はなかごと呼ぶ）。衆妙華というのは、曼陀羅華のような花のみでなく、各自の目の前で思いのままに無量の花が変現するという意味である。『妙法蓮華經』の中でも四種類の花のみ紹介されているが、（実は菩薩になる為の修行の段階である四十の階位）四因位を表しているのと同じ意味である。他の世界の御仏を供養するということは、尽じん虚こ空くう遍へん法ほう界かい無量無辺の御仏のお側で説法を聞き、その世界の住民らと縁結びするということになるので、このような殊勝な因縁があるからこそ、どの世界よりもいち早く成仏でき、円満

で究極の仏果ぶつを得られるのである。故に成仏した後はその功德が尽虚空遍法界のあらゆる場所に行き渡る。(ところで、尽虚空遍法界、無量無辺の他の仏土へ瞬時に行き来できるのに、何故釈迦仏は無量無辺と表現せず)意図的に十億土の御仏のみをおっしゃたのか？(それは釈迦仏が娑婆世界出身の住民のことを配慮して下さったことである。)何故ならば娑婆世界から極楽世界まで距離にして十億の仏国土がある為である。極楽世界に往生した衆生らが(生まれ故郷の)娑婆世界へ戻り、釈迦仏と弥勒仏を供養しようと思えば、それは瞬時にでき、決して難しいことではないと釈迦仏が特別におっしゃっているのである。その実、これらは全て阿彌陀仏の本願威神いじんの功德の御加持がある為で、尽虚空遍法界の如何に遠いところであろうとも行けない場所などないのである。

要解 食時。即清旦。故云即以。明其神足不可思議。不離彼土。常遍十方。不仮逾時回還也。

(朝) 食時とは、清旦しやうたんのことで、(清々しい夜明けの意)。(極樂浄土の住民は、毎朝に、花を持って無量無辺の他の仏土へ御仏を供養し、朝食時に自分の国土に戻ってくる)故に「即以そくい」という。極樂世界の住民に具わる能力は想像を絶する程奇妙で、衆生に本来具わっている(神足通、天耳通、他心通、宿命通、天眼通、漏尽みろうじん通等)六種の神通力じんずうりきが(極樂浄土へ往生さえすれば)円満に回復できるので、実に不可思議である。極樂浄土から一步も離れずとも、自由自在に変化し分身可能で、同時に十方世界、無量無辺諸仏の国土へ行き来できる。決して遅れて帰ってくるなどないのである。

要解 此文顯極樂一声。一塵。一刹那。乃至跨步彈指。悉与十方三宝貫徹無碍。

このくだりは、（極樂世界のありとあらゆるものや現象が、）天樂一つにせよ、（五塵の中の如何なる）一塵にせよ、一刹那にせよ、ないし、一挙手一投足しゅいつとうそく或いは一彈指いつたんしにせよ、それらは全て十方世界の三宝さんぼうと終始一貫して繋がっており、妨げなど一切ないことを明確に示している。

要解 又顯在娑婆則濁重惡障。与極樂不隔而隔。生極樂則功德甚深。与娑婆隔而不隔也。

また、娑婆世界は衆生の身しん、口く、意いの三つが常に十惡業じゅつあくごうをつくる為、心身と生活環境共にひどく汚染されている。本来娑婆世界と極樂浄土の間に

は何一つ妨げがないのに、これらの悪業の為にさも妨げがあるかのように錯覚してしまうことを明確に示している。極楽浄土へ往生した衆生の場合はその真逆である。衆生ら各々の功德が非常に深いだけでなく、阿弥陀仏の本願威神の功德の御加持が加わる為、娑婆世界との間に一見妨げがあるように見えても、実際妨げなど何一つなく、自由無碍なのである。

要解 飯食経行者。念食食至。不仮安排。食畢鉢去。不勞拳拭。但経行金地。華樂娛樂。任運進修而已。

「飯食経行」ぼんじききょうぎょうとは、（極楽浄土へ往生し間もない衆生たちはまだ凡人だった頃の癖が残っている為）食事を取りたいと思えば、目前に現れるので、支度や準備など一切必要ないことである。食事を終えると皿やお椀わん等が自

然に消えるので食器を洗ったり、掃除したりすることもない。黄金の道を散策したり、花を觀賞したり、天樂を聴いたり、仏法を修めたりしてあるがまま、（正に遊戯神通の境地）なのである。

庚二・小まとめ

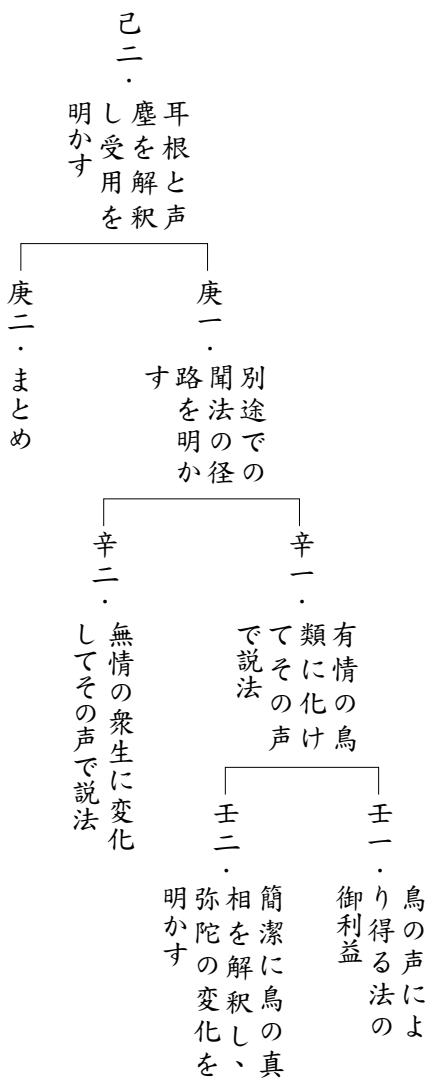
經 舍利弗。極樂国土。成就如是功德莊嚴。

己二・耳根と声塵を解釈し受用を明かす

要解 以此方耳根最利。故別就法音広明。其**実極樂攝法界機**。五塵一一円妙。出生一切法門也。

こちら娑婆世界の衆生の根機で言えば、（五根が五塵を感受する際）耳から聞く方法が最も悟りやすい為、（釈迦仏は）特に（天樂を一例に挙げ、）

極樂世界における法音について詳細且つ広範にわたり教えて下さっている。しかし、実のところ極樂世界においては、十方世界の全ての衆生らの根機を摂受することができ、また極樂の五塵とも円融で妙なるものである為、そこからありとあらゆる法門が生まれてくるのである。



壬一・鳥の声により得る法の御利益

經 復次舍利弗。彼国常有種種奇妙雜色之鳥。白鶴。孔雀。

雀。鸚鵡。舍利。迦陵頻伽。共命之鳥。是諸衆鳥。晝夜

六時。出和雅音。其音演暢五根。五力。七菩提分。八聖道

分。如是等法。其土衆生。聞是音已。皆悉念仏念法念佛。

要解 種種奇妙雜色。言多且美也。下略出六種。舍利。旧云鷺鷥。琦禪師

云是春鷺。或然。迦陵頻伽。此云妙音。未出殼時。音超衆鳥。共命。一身

兩頭。識別報同。此二種西域雪山等處有之。皆寄此間愛賞者言其似而已。

六時出音。則知淨土不以鳥棲為夜。良以蓮華托生之身。本無昏睡。不仮夜

臥也。

「種種奇妙雑色」とは、（鳥の）種類が多く非常に美しいという意味である。以下に簡略して六種の名前のみ紹介されている。「舍利」とは、昔は鷺鷥しゅうろうといい、楚石梵琦そせきばんき禪ぜんの師が言うには春鷺しゅんろうのことであるらしいが定かではない。迦陵嚩伽かりょうびんがとは、漢訳では妙音鳥のことで、卵の殻の中にいる時よりさえすることができ、その声は他のどの衆鳥よりも美しいとされている。胴体一つに対し双頭そうとうの鳥である。双頭であるので、その魂は別々でありながら体はそれを共有しているのである。この二種の鳥は西域せいぎの雪山（ヒマラヤ山脈）等に生息しているらしい。これら様々な鳥は阿弥陀仏が娑婆世界を含む十方世界の衆生の好みに合わせてお作りになったもので、その美しさは実に我々娑婆世界の住民には想像がつかない程である。四六時中途切れることなく美しい声でさえずっている。これはどういうことかとい

うと、極楽浄土では娑婆世界のように鳥が寝るのは夜であるとは決まっていない。何故なら、極楽の住民は皆蓮の花から化身として生まれてくるので元々睡眠などなく、当然夜寝る必要がないからである。

要解 五根等者。三十七道品也。所謂四念処。一身念処。二受念処。三心

念処。四法念処。

「五根」等とは、三十七道品さんじゅうしちどうほんのことである。（三十七道品とは、悟りを得る為の修行方法である。）（その中の一つである）四念住法しねんじゅうぼうとは、一に身念住、二に受念住、三に心念住、四に法念住である。

要解 四正勤。一已生惡法令断。二未生惡法不令生。三未生善法令生。四

已生善法令增長。

四正勤（四正斷法）とは、一に、すでに生じた悪を断とうと勤めることである。二に、まだ生じていない悪を新しく生じさせないように勤めることである。三に、まだ生じない善を生じさせるように勤めることである。四に、すでに生じた善を増幅ぞうぶくするよう勤めることである。

要解

四如意足。一欲如意足。二精進如意足。三心如意足。四思惟如意足。

四如意足しにょいそくとは、一に欲如意足、二に精進如意足、三に心如意足、四に思惟ゆい如意足の四つのことである。

要解

五根者。信正道及助道法名信根。行正道及諸助道善法。勤求不息。

名精進根。念正道及諸助道善法。更無他念。名念根。攝心在正道及諸助道善法中。相應不散。名定根。為正道及諸助道善法。觀於苦等四諦。名慧根。

「五根」とは、信根、精進根、念根、定根、慧根の五つのことである。

正業及び助業を信ずることを信根という。正業及び諸助業善法を休むことなく精進し行うことを精進根という。正業及び諸助業善法を心に念じ、一切の他の雑念のないことを念根という。如何なる時、場所においても心を正業及び諸助業善法に集中し、そこから決して離れることのない状態のことを定根という。正業及び助業等全ての境地において、世間と出世間における苦諦、集諦、滅諦、道諦これら四諦を真実の智慧で（鏡に映し出されているように）觀照できることを慧根という。

要解

五力者。信根増長。能破疑惑。破諸邪信。及破煩惱。名信力。精進根増長。破種種身心懈怠。成辦出世大事。名精進力。念根増長。破諸邪念。成就一切出世正念功德。名念力。定根増長。能破乱想。発諸事理禪定。名定力。慧根増長。能遮通別諸惑。発真無漏。名慧力。

「五力」とは、信力、精進力、念力、定力、慧力の五つのことである。信根は増大すると、疑いや迷い、諸々ある邪な信仰、煩惱を断つことができ、こういった際には信力という。精進根は増大すると、心身に起きる様々な懈怠を破り、出世間における大事を成就させることができるので、こういった際、精進力という。念根は増大すると、諸々ある邪念を破り、出世間における一切の正念功德（信願持名）を成就させることができるので、こういった際に念力という。定根は増大すると、（貪り、瞋り、愚痴、傲

慢まん、疑ぎう等）諸煩惱を絶ち、四六時中如何なる物質的、人事的環境においても（「それらの外的影響をうけることなく、心の内は、常に一心不乱」である）禅定の状態を保つことができるので、こういつた際、定力という。慧根は増大すると、見思惑けんじわく、塵砂惑じんじゃわく、無明惑むみょうわくといった諸惑を絶つことができ、真まの無漏智むろちが現れる。こういつた際には慧力という。

要解

七菩提分。亦名七覺分。智慧觀諸法時。善能簡別真偽。不謬取諸虛偽法。名択法覺分。精進修諸道法時。善能覺了。不謬行於無益苦行。常勤心在真法中行。名精進覺分。若心得法喜。善能覺了此喜。不依顛倒之法而喜。住真法喜。名喜覺分。若断除諸見煩惱之時。善能覺了。除諸虚偽。不損真正善根。名除覺分。若捨所見念著境時。善能覺了所捨之境虚偽不実。

永不追憶。名捨覺分。若發諸禪定之時。善能覺了諸禪虛假。不生愛見妄想。名定覺分。若修出世道時。善能覺了。常使定慧均平。或心沈沒。当念用拏法精進喜三覺分以察起之。或心浮動。当念用除捨定三覺分以摠持之。調和適中。名念覺分。

七菩提分は、七覺支ともいう。(真實の)智慧で(世間、出世間)諸法を(鏡のように)觀照する際、よく真偽を見抜き、誤って諸々の虚偽の法を取らないことを拏法覺支ちやくぼうかくしという。諸々の正道法を精進し修める際よく悟り、誤って無益な苦行くぎやうを修めることなく、絶えず真の法(純正の意)に没頭し勤めることを精進覺支という。心に法喜ぼうきの気持ちきもちが湧き出た際には、よく平常心と精進の心を保ち、段階的に得た成就に安住することなく、究極的な法喜に向かつて最後まで精進を怠らないことを喜覺支という。見思

惑を絶つた際、諸々の虚偽が取り除かれても、（貪らない、怒らない、愚痴らない、精進せよといった真正なる善根が取り除かれたわけではないことをよくわきまえ）その善根を損なうことなく絶えず精進することを軽安覚支（除覚支）という。外的環境において、見たもの、気にかかるもの、貪著する諸々の境界、其の境界の中の対象が、例え人間でも、物でも、名聞利養でも、それらを全て放下（執着しない、気にかけない意味）した際、その放下した諸々が実際には実体を伴わない夢幻に過ぎないことをよく見透かし、永遠に何の未練も後悔もないことを捨覚支という。諸々の禪定においてその境界が現れた際、その境界の中の境遇が全て実体の無い、仮のものであることをよく見抜き、貪愛や妄想の心が生じないことを定覚支という。出世間の道を修める際、定慧（禪定と智慧の意）の均衡を保つこと

の重要性をよく認識し、昏沈こんじん（眠くなる意味）を克服する手立てとして心に常に択法、精進、喜等の三覚を用い念じ、掉挙じょうこ（雑念が多く落ち着かない意味）を克服する手立てとして心に常に除、捨、定等の三法を用い念じ、均衡を保ち調和することを念覚支という。

要解

八聖道分。亦名八正道分。修無漏行觀。見四諦分明。名正見。以無漏心相応思惟。動發覺知籌量。為令增長入大涅槃。名正思惟。以無漏慧除四邪命。摂諸口業。住一切正語中。名正語。以無漏慧除身一切邪業。住清淨正身業中。名正業。以無漏慧通除三業中五種邪命。住清淨正命中。名正命。以無漏慧相応勤精進修涅槃道。名正精進。以無漏慧相応念正道及助道法。名正念。以無漏慧相応入定。名正定。

八聖道分は、八正道ともいう。無漏の行観（真如本性に完全に相応する観行）を修め、苦、集、滅、道の四諦を正しく見極めることを「正見」という。無漏の心（真心、または誠の心、深い心の意）を以て、聞思修の慧（一即三、三即一の意）と相応し、阿頼耶識、末那識、意識、他の五識と合わせた八識を大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智といった諸仏菩薩が備えている四智に轉換し増大させ、大涅槃（円満で且つ究極の悟りの意）の境地に入ることを「正思惟」という。無漏の慧（四智の意）を以て四邪命食（不当な手段で得た四種の食）を取り除き、（妄語、二枚舌、悪口、綺語といった）諸口業から離れ、ただひたすら正語の中に住することを「正語」という。無漏の慧（清らかな心の意）を以て、（殺生、窃盜、邪淫といった）身体が作る凡ゆる邪業を取り除き、清浄なる正身の

業に住することを「正業しやうぎやう」という。無漏の慧を以て、（身口意の）三業の中に
ある五種の邪命を全て取り除き、清浄なる正命の中に住することを正命みやう
という。無漏の慧に相応し、ただひたすら勤勉に涅槃（生死、煩惱を滅
する意）への道を精進し修めることを「正精進しやうしやうじん」という。無漏の慧に相
し、正業及び助業の法を念ずることを正念という。無漏の慧に相応し、禪
定に入しやうじやうることを正定という。

要解 此等道品。依生滅四諦而修。即藏教道品。依無生四諦而修。即通教
道品。依無量四諦而修。即別教道品。依無作四諦而修。即円教道品。

（以上三十七の修行項目を紹介した。）これらの項目において、（宇宙に
は物、事が存在し、それぞれ生滅の現象を持っている。それは何故かとい

う)生滅の四諦の理論と捉え方に依拠し、修行をするのが三藏教(さんざうきよう)(藏教)の項目である。(これに対し、宇宙、生命の性質と実体は虚空そのものであるという)無生の四諦の理論と捉え方に依拠し、修行をするのが通教(つうぎょう)の項目である。(苦には無量の相があり、十法界における果報もまた無量で、解脱の方法も無量であることから)無量の四諦の理論と捉え方に依拠し、修行をするのが別教(べつぎょう)の項目である。(四諦は全て真如本性から顕現された妙相にすぎず、真相には作為も、無作為も存在しないことから)無作為の四諦の理論と捉え方に依拠し、修行をするのが円教の項目である。

要解

藏道品名半字法門。浄土濁輕。似不必用。為小種先熟者或暫用之。

通道品名大乘初門。三乘共稟。同居浄土多説之。別道品名独菩薩法。同居

方便淨土多説之。円道品名無上仏法。有利根者。於四淨土皆得聞也。

蔵教ぞうきょうの法門は（小乗根機こんきのものを対象に施す教育であり、円満ではない為）「半字教はんじきょう」と名付けられている。極楽淨土において、衆生の五濁（往生して間もないものには娑婆世界の癖が残っている）は軽い為、蔵教の法門を用いる必要はないように思われるが、小乗根機こんきのものが信願持名し極楽淨土へ往生しても、その習性が依然残っている為、一時的に必要とされることがあるかも知れない。通教の法門は大乗の初門と名づけられ、（声聞、縁覚、菩薩の）三乗に共通する、学習しなければならぬ必修科目である。極楽淨土の同居土においては、（業を持ったまま往生した衆生が多い為、）よく説かれている法門である。別教の法門は大乗の「界外かいがい独菩薩どくぼさつの法」と名づけられ、菩薩にのみ課せられた専修科目である。極楽淨土の同居土と

方便土においてよく説かれている法門である。円教の法門は無上の法と名づけられ、（仏道修行の素質、能力のすぐれたもの）上根じょうこんのものは、極楽浄土の四土の、どの土に往生しても全て円教の法門を聞くことができる。

要解

如是等法者。等前念処正勤如意足。等余四摂六度十力無畏無量法門也。三十七品。收法雖尽。而機縁不等。作種種開合名義不同。隨所欲聞。

無不演暢。故令聞者念三宝。発菩提心。伏滅煩惱也。

（釈迦仏のおっしゃる）「如是等法」とは、「如是」は五根、五力、七菩提分、八聖道分のことであり、「等」とは、前文ですでに紹介した四念処、四正勤、四如意足のことで、その他四摂ししよく、六度じゅうりき、十力しじゆりき、四無畏しむい等を含め、無量の法門を意味している。三十七道品は（釈迦仏が四十九年間お説

きになった全ての法、ないし十方世界無量無辺諸仏菩薩が説かれている）
全ての法を収めているが、衆生にはそれぞれ様々な根機と縁があり、皆条
件が異なる為、（極樂浄土の阿弥陀仏の）説法はその都度機縁に応じ、諸々
の法を一法に纏めて説かれたり、一法を諸々の法へ展開し説かれたりして
臨機応変に様々な対応を見せている。聞き手の好みと要望に合わせ随類応
同し、あらゆる法が説かれるので、聞き手が歓喜しない法などないほどで
ある。故にその法を聞いたものたちに（仏、法、僧または覺、正、浄の）
三宝を念じさせ、菩提の心（真正なる智慧の意）を起こさせ、煩惱を制御
ないし断滅させるのである。

要解

灼見慈威不可思議。故念仏。法喜入心。法味充足。故念法。同聞共

稟。一心修証。故念僧。

眼前がんぜんで、明確めいかくに阿彌陀仏の慈しみと威嚴いげんを体験し、その不可思議さ故に念仏する。真正なる仏法を心得、その喜びから心が法味ほうみに満ちあふれる、故に法を念ずる。阿彌陀仏のお側で共に説法を聞き、ご教示を賜り、一心に修行し悟りを得る、故に僧（諸上善人の意）を念ずるのである。

要解 能念即三觀。所念三宝。有別相。一体。及四教意義。三諦權實之不

同。如上料簡道品。応知。

能念のうねんの真心は即ち一心三觀のことである。（これは極樂浄土に往生した衆生らがそこで修行を重ね証得した成果である。一心三觀とは、宇宙、生命の真相をその本体、表面に呈している現象、日常生活の中での受用の仕

方等、三つの角度から同時に観察するものである。本体は空で、現象が仮の有である為、日常生活において空と有の両方に囚われることなく中道を用い、清らかな心で自由自在に享受することができる境地のことを意味している。）所念（しよねん念ずる対象の意）の三宝には、観察の角度によりそれぞれ別相、一体、四教、三諦、権実三宝等の違いがあるが、本体またはその性質から観れば一体なのである。例えば事相の角度から観れば、「仏・法・僧」別々の相があるが、本体から観れば、三宝が覚、正、浄の三昧一体なのである。空、仮、中といった三諦で言えば、名称が同じでも、四教における深浅の程度が違う為、方便の教え（権教）もあれば、実の教え（実教）もある。その違いは前文で紹介した道品の中の蔵、通、別、円四教の違いと同じ道理である。それを知っておくべきなのである。

壬二・簡潔に鳥の真相を解釈し、弥陀の変化を明かす

經 舍利弗。汝勿謂此鳥。實是罪報所生。所以者何。彼仏

国土。無三惡道。舍利弗。其仏国土。尚無惡道之名。何況

有實。是諸衆鳥。皆是阿彌陀仏欲令法音宣流。變化所作。

要解

徵釈可知。問。白鶴等非惡道名耶。答。既非罪報。則一一名字。皆
 註如来究竟功德。所謂究竟白鶴等。無非性德美稱。豈惡名哉。

經文の中で、世尊せそんが自問自答の形で既に解釈を下さっているの
 分かりだと思ふが、(時として)鶴くじやく(孔雀、オウム、舍利、迦陵嚩伽…)等
 等は三惡道の一つである畜生道の鳥の名称ではないか、という疑問が起こ

る事がある。しかし、これらの鳥は悪業を造った為に、その報いとして畜生道に生まれた本物の鳥ではない、というのが実の答えである。極楽世界においては、どんな名称であろうとも、その一つ一つが、全て阿弥陀如来（衆生の自性如来の意）の究極で円満なる御功德を解釈し、賛嘆する為に付けられたものだからである。いわゆる究極の白鶴などといった名称は、自性に具わる徳能の美称びしやうに過ぎず、何故邪悪な名称であると見なすことが出来ようか？

要解

問。化作衆鳥何義。答。有四悉檀因縁。凡情喜此諸鳥。順情而化。

令歡喜故。鳥尚說法。令聞生善故。不於鳥起下劣想。对治分別心故。鳥即弥陀。令悟法身平等。無不具無不造故。

阿彌陀仏が衆鳥しゅうちように變化へんげする意義は何故か？その答えは、四悉檀の因縁にある。（一つには）凡情ぼんじようがこれら諸々の鳥らを好むので、彼らの好き嫌いに合わせると、歡喜して法を聞いてもらえるからである。（二つには）鳥達でさえ説法され、衆生を教育しているというのに、我々人間が頑張らずにしてどうするのだ、という懺悔の気持ちを起こさせ、滅罪めつざい生善しやうぜんさせることができずからである。（三つには）鳥だからと言って輕蔑、差別的な考えを起こすことなく、分別の心を正しく修めることができるからである。（四つには）鳥即ち阿彌陀仏、だからである。鳥の法身（真如本性）と阿彌陀仏のそれとは本質が全く同一で、平等であり、また不二でもあり、その法身は全てを具え、凡そ創造出来ないものなどない、という宇宙、生命の真相を衆生たちに悟らせることができるからである。

要解 此中顕微風樹網等音。及一切依正仮実。当体即是阿弥陀仏三身四徳。毫無差別也。

(鳥達のさえずりもそうだが)そよ風や並木の羅網の妙なる音、依報或いは正報、仮相或いは真実といったものは実のところ本体が同一である。即ち阿弥陀仏に具わる(法身、報身、応身といった)三身と(常、楽、我、浄の)四徳そのものであり、何ら差異がない、という意味合いが明らかに含まれているものである。

辛二・無情の衆生に変化してその声で説法

経
舍利弗。彼仏国土。微風吹動諸宝行樹。及宝羅網。出

微妙音。譬如百千種樂同時俱作。聞是音者。自然皆生念
仏念法念僧之心。

要解 情与無情。同宣妙法。四教道品。無量法門。同時演説。随類各解。
能令聞者念三宝也。

このように（鳥達に代表される）有情の衆生と（風、並木、羅網、音等に代表される）無情の衆生は（極樂浄土で）それぞれ同時に妙法を伝え広められている。その内容は（蔵、通、別、円の）四教や（三十七）道品、或いは無量無辺の法門等である。これらの教えは同時に演説が行われ、各々の聞き手の好みと理解の程度に従い、自由自在に変化できる。故に聞く者達の心の中で絶えず仏、法、僧または覺、正、浄の三宝を念じさせること

が可能になる。

要解

念三宝是從悉檀獲益。凡夫創聞。大踊遍身。是歡喜益。与三宝氣分交接。必能發菩提心。是生善益。由此伏滅煩惱。是破惡益。証悟一体三宝。是入理益也。初別明竟。

衆生が三宝を念ずることにより、四悉檀ししつだんより御利益があるのである。凡人がこれまで味わえなかつた法の醍醐味だいごみを聞くたびに新味が湧き、表現出来ぬほどに御利益がある場合には歡喜と感動のあまり、手舞足踏しゆぶそくとうする。これが歡喜の御利益を得た時の様子である。心の中は念念覺、正、淨であり、仏、法、僧の一体三宝に相應すれば、必ずや菩提心を發することができる。これは善法を生じさせる為の御利益によるものである。それにより煩惱を

制御ないし断滅できるようになる。これが悪法を破る為に得た御利益である。自ら宇宙、生命の真相が覺、正、淨の一体三宝そのものであることを体験し、証得する。これが究極の成仏の御利益なのである。上記二つのくだりは、有情と無情の衆生が皆の為に妙法を説かれていることを紹介するものである。次の經文のくだりは小括である。

庚二・まとめ

經 舍利弗。其仏国土。成就如是功德莊嚴。

要解 重重結示。令深信一切莊嚴。皆導師願行所成。種智所現。皆吾人淨業所感。唯識所變。仏心生心。互為影質。如衆灯明。各遍似一。全理成事。全事即理。全性起修。全修在性。亦可深長思矣。

度重なるこれらの小括の御開示だが、ここでは、世尊は衆生達に一切の莊嚴を深信するようお説きになっている。全ての莊嚴は導師である阿弥陀仏の願行がんぎょうにより成就されたものであり、仏の完全無欠な智慧の一切種智いっさいしゅちにより顕現されたものである。それは同時に我々凡夫じょうふうが淨業じやうごうを修め感じ取った境地であり、唯識ゆいしき所變しよへんの境地である。阿弥陀仏の心と衆生達の心は感応道交し、互いに本質の境地と影像の境地のような関係である。それは沢山の灯りの関係のようであり、各々光を満遍なく放っているが全体で見ればあたかも一つの光のように見えるのである。(阿弥陀仏と衆生らの)全ての心性(理体の意)が一つとなって極樂淨土の依正莊嚴の事相を成就したので、あらゆる依正莊嚴の事相は即ち理体であるということである。自性はもともと円満無欠な為、自性を根本として修行すれば、自ずと全てを修

めることになる。また全ての修行は決して自性を離れることはない。(自性に具わる清らかな心、平等の心、慈悲の心を取り戻すのである。) 良く良く深思され、迷いから早く悟って頂きたいのである。

要解 奈何離此淨土。別譚唯心淨土。甘墮鼠即鳥空之誚也哉。初依報妙竟。

信願持名の淨土法門を慎ましく真面目に実行すれば、今世で必ず極楽淨土の境地を証得出来るにも関わらず、何故か多くの人々がそれを十分に信じることをせず、最重要視しない。逆にこの法門から離れ、それとは別に「唯心の淨土」を論ずるのである。この状況は例えて言うならネズミが声を出し、空を飛ぶ鳥が声を出しても単に笑われる結果を招くようなものである。「仮有」に執着し、「真空」に執着しても現実問題の解決には何ら

意義がないことを表している。残念ながら皆がそんな墮落した境地に甘んじているのである。以上ここまでが極樂浄土の依報環境の紹介に当たる。

丙二・
正報の妙なる
莊嚴を紹介

丁一・弥陀名号を解釈

戊一・自問

戊二・自答

丁二・主と伴を別々に解釈

戊一・自問

經

舍利弗。於汝意云何。彼仏何故号阿弥陀。

要解

此經的示持名妙行。故特徴釈名号。欲人深信万徳洪名不可思議。一

心執持。無復疑貳也。

本經は釈迦仏が的確に持名念仏という妙行を我々に指し示して下さった

もので、釈迦仏が特別に阿彌陀仏の名号が持っている意味をここで解釈をして下さったのである。(何故解釈する意義があるのかと言えば)人々にこの万徳の洪名(大いなる名)が持っている不可思議な力を深く信じてもらい、一心に執り持ち、二度と疑うことがないようにさせることが目的なのである。

戊二・自答

- 己一・無量光明を解釈
- 己二・無量壽命を解釈

要解 阿彌陀。正翻無量。本不可説。本師以光壽二義。收尽一切無量。光則横遍十方。壽則豎窮三際。横豎交徹。即法界体。举此体作彌陀身土。亦即举此体作彌陀名号。是故彌陀名号。即衆生本覺理性。持名。即始覺合本。

始本不二。生仏不二。故一念相應一念仏。念念相應念念仏也。

阿弥陀とは（梵語で）、正確に漢訳すれば無量である。もともと言葉にして表せるものではないが、本師ほんし釈迦仏が無量の中から光と寿の二つのみを代表として選び抜き、それを以て全ての無量を収め尽くされているのである。横から見れば、光明は十方世界を遍照へんじょうしている。（空間の意を表すと同時に真の智慧を意味する。）縦から見れば、寿は過去、現在、未来の三世と繋がっている。（時間を表す。）この縦、横二つが円融えんじゆう交徹したものが即ち法界（宇宙の意）の本体なのである。この法界の本体を挙げて阿弥陀仏の身と極楽浄土とするということが、即ちこの法界の本体を挙げて阿弥陀仏の名号とすることと同じ意味になるのである。それ故にこの阿弥陀仏の名号は、即ち衆生に本来具わっている真如本性と法界の本体そのも

のであるといえる。（言い換えれば、法界の全体が阿彌陀仏であり、諸仏如来であり、全ての衆生であり、我々自身である為、阿彌陀仏を称えることは、即ち法界全体を称えることとなり、全ての諸仏如来を称えることとなり、我々自身の真如本性を称えることになるのである。）（阿彌陀仏を称えるという念頭が心に浮かぶことが始覚である。本覚とは、衆生に本来具わっている真如本性のことである）執持名号とは、即ち始覚が本覚に合一し、始本不二の覚になり、（迷いから悟った為）凡仏不二となったものである。（何時でもどこにいても心は常に阿彌陀仏を離れるなく、我が法界と合一し、諸仏如来と合一し、全ての衆生と合一している）故に一念相應一念仏、念々相應念々仏なのである。

己一・無量光明を解釈

經 舍利弗。彼仏光明無量。照十方国。無所障碍。是故号

為阿弥陀。

要解 心性寂而常照。故為光明。今徹証心性無量之体。故光明無量也。

心性が静寂でありながら、鏡のように常に燦々と光明を放ち（ボンヤリとしているのではなく）、物事の本質、実相等全てを照見し明瞭している為、智慧の光明が具わっているのである。今の阿弥陀仏は既に心性に具わっている無量の本体を徹底的に証得なされたので、光明が無量なのである。

要解 諸仏皆徹心性。皆照十方。皆可名無量光。而因中願力不同。隨因緣

立別名。彌陀為法藏比丘。發四十八願。有光明恒照十方之願。今果成如願也。

同様に、全ての諸仏も皆心性の本体を徹底的に証得なさっており、各々の光明も無量で十方世界を照らしている為、理論上は、全ての諸仏に無量光仏と名付けてもよいと思われる。しかしながら各々方の成仏される前の願力が異なる為、成仏なさった後の名号は、各自の因縁によって新たに名付けられることになったのである。阿彌陀仏は成仏される前に法藏ほうぞう比丘びくの御身分であつた。その法藏比丘でおられた時に四十八の誓願を發せられた。その中には光明遍照十方世界の願もあつた。仏となられた今はこの願いも叶えられ、阿彌陀仏の光明が十方世界に行きわたっているのである。

要解

法身光明無分際。報身光明稱真性。此則仏仏道同。応身光明有照一由旬者。十百千由旬者。一世界十百千世界者。唯阿彌普照。故別名無量光。然三身不一不異。為令衆生得四益故。作此分別耳。

(仏には法身ほっしん、報身ほうじん、応身おうじんと一体三身がある。)法身仏は真如本性即ち法界の本体であり、もともと無量の光明を具えている為、もちろん分別も無ければ辺際へんさいも無い。報身仏は成仏された後の自受用身じじゆうしんであり、真如本性と完全に相応している為、光明は無量である。これについては全ての仏が皆同じである。ところが応身仏の光明は各々異なる為千差万別である。一いち由旬ゆじゆん(現在の二十キロメートルぐらい)を照らす仏もおいでになれば、十、百、千由旬を照らす仏もいらっしやる。一個の大千世界を照らす仏もおいでになれば、十、百、千の大千世界を照らす仏もいらっしやる。しか

し、阿彌陀仏が成仏される前に起こされた誓願だけは唯一結ばれた縁が諸仏と違い、尽虚空遍法界である為、その光明も虚空法界を遍照することができるのである。それ故に阿彌陀仏の別名が無量光仏なのである。しかしながら本来であれば三身が不一不異、（三即一、一即三）の為、分けていうものではないが、衆生に（歡喜、善を増長、悪を破り、第一義といった）四悉檀の御利益を得てもらふ為、このように分けて別々に説明を行われたのである。

要解 当知無障礙。約人民言。由衆生与仏縁深。故仏光到处。一切世間無不円見也。

また仏の光明は何ものにも妨げられない無碍の光明である。妨げとは

我々衆生に対して言っているものであることを知っておくべきである。衆生は阿弥陀仏と縁が深いが故に、仏の光明が至る所では、（太陽の闇を破るが如く）衆生の無明の闇は照破され、一切の世間の真相が白日の下に晒されるのである。

己二・無量壽命を解釈

經 又舍利弗。彼仏壽命。及其人民。無量無辺阿僧祇劫。

故名阿弥陀。

要解 心性照而常寂。故為壽命。今徹証心性無量之体。故壽命無量也。

心性は（鏡のように）常に（燦々と）光明を放ち、物事の本質、実相等全てを照見し、明瞭にしながらも、静寂不動の為、壽命が具わっているの

である。今現在の阿彌陀仏は既に心性に具わっている無量の本体を徹底的に証得なさっている為、（阿彌陀仏の）寿命が無量なのである。

要解

法身寿命無始無終。報身寿命有始無終。此亦仏道同。皆可名無量壽。応身随願隨機。延促不等。法蔵願王。有仏及人寿命皆無量之願。今果成如願。別名無量壽也。

法身（仏）の寿命は無始無終であり、報身（仏）の寿命は有始無終である。これについても全ての仏が皆同じである為、（理論上は）全ての諸仏に無量壽仏と名付けてもよいと思われる。ところが応身（仏）の寿命は成仏される前の願いと衆生の機縁により、各々異なる為一定ではない。法蔵願王が発せられた四十八の誓願の中に自分が成仏した後の寿命と極楽浄土

へ往生したもののたちの寿命が皆無量になるように、との願いもあつた。仏となられた今ではこの願いも実現され、それ故に阿弥陀仏の別名が無量寿仏になつたのである。

要解

阿僧祇。無辺。無量。皆算数名。実有量之無量。然三身不一不異。

応身亦可即是無量之無量矣。

阿僧祇あそうぎも、無量も無辺も全て数学の計量単位である。(数字が確かに想像がつかないほど大きい)実際のところ、有量の無量なのである。しかしながら三身が不一不異、(三即一、一即三)の為、応身も寿命が無量の無量である。

要解 及者。並也。人民。指等覺以還。謂仏寿命並其人民寿命。皆無量等也。

及びというのは、並びにという意味である。人民とは、等覺菩薩以内のものを指している。阿彌陀仏及び極樂淨土の人民達の寿命は皆無量であるという意味である。

要解 当知光寿名号。皆本衆生建立。以生仏平等。能令持名者。光明寿命同仏無異也。

光明と寿命という全ての名号は、皆もともと衆生を教化する為に必要とされ造られたものである。凡仏皆平等ほんぶつな為、持名念仏の者達にも、光明と寿命は仏と差異なく同じにさせることができるのである。このことについて

ては知っておくべきである。

要解 復次由無量光義。故衆生生極樂即生十方。見阿弥陀仏即見十方諸仏。
能自度即普利一切。

また、無量の光明に意義がある為、衆生が極樂浄土に往生するということは即ち、十方世界に往生するということにもなるのである。阿弥陀仏に拝謁するということは、即ち十方世界の御仏に拝謁することにもなるのである。(極樂浄土ならではの一即一切、一切即一の境地である。)自らが信願持名により極樂浄土へ往生できるとなれば、これは即ち普遍的に一切の衆生の御利益になるといふことなのである。

要解 由無量壽義。故極樂人民。即是一生補處。皆定此生成仏。不至異生。

無量の壽命に意義がある為、極樂の人民は即ち一生補處（補欠仏の意）の地位を確保することができ、皆必ず現世げんせにて成仏し、来世まで待たずに済むのである。

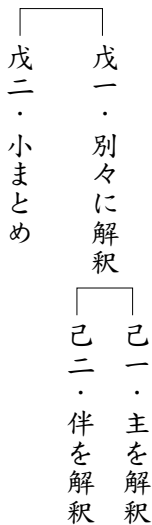
要解 当知離却現前一念無量光壽之心。何処有阿彌陀仏名号。而離却阿彌

陀仏名号。何由徹証現前一念無量光壽之心。願深思之。願深思之。

（阿彌陀仏が徹底して無量の光壽の真如本性を証得なされたので、阿彌陀仏の称号を名付けられた。言い換えれば阿彌陀仏は真如本性また無量の光壽の称号なのである。）従って真如本性を離れば、阿彌陀仏の名号は存在しなくなるのである。では阿彌陀仏の名号を離れば、どのようにし

て徹底し無量の光寿の真如本性を証得できるのであろうか。（何故なら名号と真如本性は一体であり、名号即ち真如本性、真如本性即ち名号だからである。）これについてはよく知っておくべきであり、より深く考えるよう願ひ、一層深く考えるよう願う。

丁二・主と伴を別々に解釈



己一・主を解釈

（ここでも、別序の中で今現在説法をなさっていることを解釈する）

經

舍利弗。

阿弥陀仏成仏以来。

於今十劫。

要解

此明極樂世界教主成就也。

ここでは、（釈迦仏は）極楽世界の教主きょうしゅである阿彌陀仏の、（十劫じゅうこくという短い期間にてお収めになった無量無辺の）成就を（我々に）明らかにして下さっている。

要解

然法身無成無不成。不応論劫。報身因円果満名成。応身為物示生名成。皆可論劫。又法身因修徳顕。亦可論成論劫。報身別無新得。応身如月印川。亦無成不成。不応論劫。

しかしながら（本質から言えば、）法身（仏）には（真如本性の本体そのものであるので）成就も不成就も無い為、劫ごうという時間を論ずるべきではない。報身（仏）は因いん円ねん果か満まんにより報われた御身分の為、成就なさったと言える。応身（仏）は他受用たじゆうの御身分で、衆生を救済する為に様々な姿

を示現されるので、成就されていると言える。従つて報身仏と応身仏に対しては、全て劫という時間で論ずることが可能である。また、（修行し、証果しよつかを得る角度から言えば、法身は確かに誰でももともと持っているものである。だが煩惱により妨げられており）無明の惑を一品ずつ断ち、法身の本体が一分ずつ顕現されることにより、成就も時間も論ずることが可能になる。報身とは、（真如本性、即ち法身にもともと具わる無量の智慧また無量の徳能なので）新たに他から得るものではない。応身とは川に映る月のようなもので、（架空のものであるので）成就も不成就もなく、時間を論ずるべきではない。

要解

但諸仏成道。各有本迹。本地並不可測。且約極樂示成之迹而言。即

是三身一切成。亦是非成非不成而論成也。

だが諸仏が成道を遂げられるには、それぞれ本迹ほんじやく（本地ほんじと垂迹すいじやくの意）というものがある。（本地とは、一番最初の成仏証果のことをいい、垂迹とは、本地の仏が衆生済度の為に応現していることをいう。）（全ての諸仏の）本地に関しては、計り知ることができない。だが、極樂浄土において示現（応身の意）し、成仏なされた阿彌陀仏の垂迹で言えば、即ち三身が一成らば一切成る、と論ずることが可能である。（しかし本質または理体の角度から言えば）成就も不成就も論ずるようなものではないが、成就を論じているのである。

要解

又仏壽無量。今僅十劫。則現在說法。時正未央。普勸三世衆生速求

往生。同仏壽命。一生成辦也。又下文無數声聞菩薩及与補処。皆十劫所成就。正顯十方三世往生不退者。多且易也。

また、阿弥陀仏の壽命が無量であるのに対し、今日までは（極楽世界が成就された日から）僅か十劫しか経過してない。今現在も（阿弥陀仏が）説法をなさっているということが何を意味するかは、時期的に説法がまだ終わっておらず、正に丁度良い時期と言える。（過去、現在、未来の）三世の衆生達皆に対し、いち早く極楽浄土への往生を求め、阿弥陀仏と同じ壽命を持ち、一生のみで成仏得道を成し遂げるようお勧めしたいのである。また、後文こうぶんには、無数の声聞、菩薩及び一生補処は、皆この十劫の間に成就なさった、というくだりがある。このことは正に、十方三世じっぼうさんぜより極楽浄土へ往生し不退ふたいてん転となるものが多く且つ、いかに容易であることを彰顯しょうげん

しているのである。

己二・伴を解釈

經 又舍利弗。彼仏有無量無辺声聞弟子。皆阿羅漢。非是
算數之所能知。諸菩薩衆。亦復如是。

要解

他方定性二乗。不得生彼。若先習小行。臨終回向菩提。發大誓願者。

生彼国已。仏順機説法。令断見思。故名羅漢。如別教七住断見思之類。非
実声聞也。蓋蔵通二教。不聞他方仏名。今聞弥陀名号。信願往生。総属別
円二教所摂機矣。

他方世界の定性の二乗の者は（大乘教及び他方世界、無量無辺の諸仏、
ないし極楽世界、阿彌陀仏の存在を認めない為）極楽世界へ往生すること

ができない。それまでは小乗教のみを学んでいたとしても、臨終の際、自らが修めた善根の功徳を菩提の完成の為にふり向け、更には極樂世界への往生を求める、という大いなる誓願を発せられるならば、極樂世界への往生が可能となる。極樂へ往生した後、仏はそのもの達の根機に合わせて説法をなさり、見思惑けんじわくが断てるよう導いて下さる。(極樂世界以外の他方世界では見思惑を絶った小乗教の方々のことを阿羅漢と呼ぶので)故に(その名残で)羅漢と名づける。(別教の第七住位の菩薩も同じく見思惑を絶った方々なので)ここでいう「羅漢」は、立場的に別教の第七住位の菩薩方と同じような類になる為、實際の小乗教の声聞ではないのである。大抵の場合は、(小乗の)藏教と(大乘の始教である)通教は、他方世界の仏名に触れることはない。今日阿弥陀仏の名号を聞き、それを信じ願ひ、極

樂淨土への往生を求める者達の根機は、(藏教と通教のそれではなく)別教若しくは円教が摂受する対象に必要な根機となっている。

戊二・小まとめ

經 舍利弗。彼仏国土。成就如是功德莊嚴。

要解 仏及声聞菩薩。並是弥陀因中願行所成。亦是果上一成一切成。是則
仏菩薩声聞。各各非自非他。自他不二。故云成就如是功德莊嚴。能令信願
持名者。念念亦如是成就也。初広陳彼土依正妙果以啓信竟。

阿弥陀仏の正報莊嚴と(十方世界より極樂淨土へ往生を遂げられた無量
無辺の)声聞、菩薩方の正報莊嚴は、全て(阿弥陀仏が成仏される前に)
因位にて発せられた(四十八の)大いなる誓願と大いなる行いにより成就

されたものである。と同時にそれは果位かゐにおいては「一成ひとらば一切成る」の境地でもある。（阿弥陀仏が既に成仏なさっているのです、四十八の誓願が全て実現されている、という意味である。）そうになると、（性質と事相の二つの角度からそれぞれ観察すると、その性質は、阿弥陀仏の真如本性も、菩薩方の真如本性も、声聞方のそれも全て一体不二なので、非他ひた（他人ではない）であると言える。ところが事相の角度から見ると、阿弥陀仏が真如本性を証得なさっておられるのに対し、菩薩方と声聞方は部分的とはいえず未だ円満には至っておられないので、阿弥陀仏は阿弥陀仏、菩薩は菩薩、声聞は声聞とそれぞれが異なっており、非自ひじ（自分ではない）と言うこともできる。従つて）阿弥陀仏、菩薩、声聞方は、それぞれ非自非他であり、また自他不二なのである。故にお釈迦仏は「如是によぜ」功德、「如是」莊嚴を

成就することができ、とおっしゃっているのである。これにより信願持名の者達にも念念にて同様に如是の功德莊嚴を成就させられるのである。正宗分の冒頭にて極樂世界の依報と正報の妙果みょうかについて広く陳説した。その目的は正に「信」の啓発に他ならない。以上をもって極樂世界の依報と正報莊嚴の解説を終了する。

乙二・衆生に往生を求めべきと
特別に勸化し発願させる

丙一・無上の因縁を開示
丙二・極樂浄土は殊勝である
ので特にお勧めする

要解 浄土殊勝。謂帶業往生。横出三界。同居横具四土。開顯四教法輪。

衆生円浄四土。円見三身。円証三不退。人民皆一生成仏。如是等勝異超絶。
全在此二科点示。須諦研之。

極樂浄土の神妙且つ殊勝なる点は、いわゆる（一に、）業を持ったままでも三界六道を一気に飛び越え、極樂世界へと往生できるところにある。（二に、）同居土に往生しても、それはまた同時に上位の方便土、実報土、寂光土の三土に往生することにもなる点である。（三に、）極樂世界では蔵、通、別、円に代表される全ての經教、凡ゆる法門をいつでもどこでも衆生の好みに合わせて聞くことができる。（四に、）衆生は円満に清らかな四土を証得でき、円満に一体三身を体得でき、円満に位行念の三不退を証得できる。（五に、）人民（衆生のこと）は皆一生のみにて（一生には極樂世界に往生するとすぐに、という意味もある）成仏できる。上述における（極樂浄土の）神妙、超常且つ超絶な点については全て以下の二箇所のおくだりにて一つ一つ明確に示されているので、よくよく研究し、しつか

りと理解して頂くことを切に望むものである。

丙一・無上の因縁を開示

經 又舍利弗。極樂国土。衆生。生者。皆是阿鞞跋致。其中
多有一生補處。其數甚多。非是算數所能知之。但可以無量
無辺阿僧祇説。

要解 阿鞞跋致。此云不退。一位不退。入聖流。不墮凡地。二行不退。恒
度生。不墮二乘地。三念不退。心心流入薩婆若海。

阿鞞跋致とは（梵語で）、漢訳で不退転のことである。一に、（すでに修
得した仏道の位を退失しない）位不退。聖人の仲間入りを果たすことがで
き、凡位に二度と落ちることはない。二に、行不退。（菩薩行を退失しな

いの意) (小乗の声聞、縁覚の自利行に對し、) 一切の衆生を恒久的に救済し続ける。小乗の位に落ちない。三に、念不退。心心寂滅して自然に薩婆若海に流入する。(心心が寂滅して如来果位に具わる一切種智に相應するの意)。

要解

若約此土藏初果。通見地。別初住。円初信。名位不退。通菩薩。別十行。円十信。名行不退。別初地。円初住。名念不退。

娑婆世界での修行の状況を参考にして言うならば、藏教の初果(即ち須陀洹)、通教の見地(見惑を断尽し四諦の理を見る意)、別教の初住位の菩薩そして円教の初信位の菩薩方は、位不退と名付けられている。通教の菩薩、別教の十行位の菩薩そして円教の十信位の菩薩方は、行不退と名付け

られている。別教の初地位の菩薩、円教の初住位の菩薩方は、念不退と名付けられている。

要解 今浄土五逆十惡十念成就帶業往生居下下品者。皆得三不退。

現在では、十惡五逆じゅうあくごぎやくの重罪を背負っているにも関わらず、（臨終の際に善知識ぜんちしきに出遇い、その教えを信じ）十念成就して、業を持ったまま極楽浄土に下下品げげほんの位で往生した者も、皆三不退轉の位を証得できている。

要解 然拋教道。若是凡夫。則非初果等。若是二乘。則非菩薩等。若是異生。則非同生性等。又念不退。非復異生。行不退。非僅見道。位不退。非是人民。躡等則成大妄。進步則捨故稱。

しかしながら、（釈迦仏がお説きになつた通常の）教えまたは修行の階位に基づいて考えると、凡人であれば、通常初果しよかを含めそれ以上の聖人ではないはずである。また二乗の者であれば、通常菩薩を含めそれ以上の位ではないはずである。異生いしやう（別教の三賢位さんけんいの菩薩を指し、見性けんしやうしてないの意）の位であれば、通常は見性された円教の初住しよじゆうを含めそれ以上の位ではないはずなのである。（仏語では見性されたものを同生性という）また、（同じ道理で）念不退転のものは、（通常は円教の初住、別教の初地しよじを含めそれ以上の位の方々なので、）異生の位に再び落ちることはない。行不退転の菩薩方は、決して見道を得たばかりの須陀洹しよたわんではない。位不退転といふのは、（少なくとも見道を得たばかりとはいへ小乗教の聖人の為）決して凡人ではない。（このように見ていくと修行には階位や順序があり、通

常は、それを飛び越えて進むものではないことがわかる。〕飛び越えて進むということ自体ありえないのである。また、とある上位の境地を証得していないにもかかわらず、それを証得しているというのは、大きな嘘になる。（一つ一つの階位にはそれぞれに相応する呼称があり）一つ階位が上がるごとに、古い呼び名を捨て新しい階位の呼び名となる。

要解 唯極樂同居。一切俱非。一切俱是。

しかし唯一極樂の同居土だけは（特殊で奇妙であり、真に）常識に当てはまらないのである。（何故なら、極樂の同居土に往生を遂げられたものは見思惑さえも絶つてない凡人である。故に、凡人と呼んでもよい。けれど凡人でありながら三不退転を証得できている。）つまり、一切は非であ

るとともに是でもある。

要解 十方仏土無此名相。無此階位。無此法門。非心性之極致。持名之奇勲。弥陀之大願。何以有此。

十方仏土にはこのような現象は存在しないし、このような階位は有り得ず、またこのような法門自体ないのである。真如本性の極致きよくち、持名念仏の不可思議な功勲こうくん、または阿弥陀仏の大いなる誓願の威神功德の御加持がなければ、どうしてこのような成就があるだろうか？

要解 一生補処者。只一生補仏位。如弥勒観音等。極楽人民普皆一生成仏。

人人必実証補処。故其中多有此等上善。不可数知也。

一生補処とは、ただ一生のみで補欠の仏の位を証得できることである。例えば弥勒菩薩や観音菩薩方がそうである。(弥勒菩薩は我々娑婆世界の補欠の仏であり、観音菩薩は極樂世界の補欠の仏である。)極樂世界の人は普遍的に皆一生のみで仏となり、必ず補処を実証される。故に、(經文の中に)其の中にはこのような上善(等覺菩薩の意)の人々が多く含まれており、その数は計り知れない、という表現がある。

要解 復次釈迦一代時教。惟華嚴明一生円満。而一生円満之因。則末後普賢行願品中。十大願王導歸安養。且以此勸進華嚴海衆。

また釈迦世尊一代の教えにおいては、(浄土三部經を除いて)唯一『華嚴經』だけが、一生のみで円満を証得できる教えなのである。一生のみで

円満を証得できる因といえ、即ち『華嚴經』の最後の「普賢行願品」に説かれる普賢菩薩が、十の大いなる誓願を發せられ、極樂世界への往生をお導きになっていることが正にそれである。そしてこの誓願をもとに華嚴けだう世界においてになる大海のような無量無辺の諸菩薩に極樂淨土への往生を目指すよう勧められているのである。

要解 嗟乎。凡夫例登補處。奇唱極談。不可測度。華嚴所稟。却在此經。

而天下古今。信少疑多。辭繁義蝕。余唯有剖心瀝血而已。

ああ！（十悪五逆の重罪を背負っている）凡人が一生のみで補欠仏の位を証得できるとは、これは本当に奇特的な提唱であり、極妙な論談であり、（凡人どころか、等覺菩薩でさえ）計り知ることができない境地である。

『華嚴經』に説かれてゐる釈迦仏の趣旨が正にこの『佛說阿彌陀經』にあるのである。しかし内外ないがい、古今東西ここんとうざい、信ずるものは少なく疑うものは多い。修有り証有りの大徳でさえも（李通玄りつうげん長者を含む大徳。『華嚴合論』）を含む彼らの著作及び論述の中で浄土を疑うような言辭げんじが残るほどである。拙僧せつそうはどうしようもなくただただ椎心泣血ついきんきゅうけつするのみである。

丙二・極樂浄土は殊勝であるので特にお勧めする

經 舍利弗。衆生聞者。应当發願。願生彼国。所以者何。
 得与如是諸上善人。俱会一处。

要解

前羅漢菩薩。但可云善人。唯補処居因位之極。故云上。其数甚多。

故云諸。

前述した阿羅漢や菩薩方のことを善人と呼ぶことはできる。ただ補処菩薩だけが菩薩の因位を極められた立場におられる為、上善と呼ばれている。その数が甚だ多い為に諸と付け加えられているのである。

要解

俱会一处。猶言凡聖同居。尋常由実聖過去有漏業。権聖大慈悲願。

故凡夫得与聖人同居。至実聖灰身。権聖機尽。便升沈碩異。苦樂懸殊。乃暫同。非究竟同也。又天壤之間。見聞者少。幸獲見聞。親近步趨者少。

俱会一处とは、変わらず凡聖同居土のことをいう。(極樂世界以外の他方世界では)通常であれば凡人は聖人方にお会い出来る機会は二通りしかない。一つは、(例えば須陀洹のような小乗の初果の聖人で)聖人となつ

ているものの、過去の有漏業がまだ残っている為、凡聖同居土に残り修行を続けなければならぬ場合である。もう一つは、(文殊、普賢、観音と
 いった位の高い)等覺菩薩方が権仮方便ごんけ ほうべんと大慈大悲の誓願を以て凡聖同居土に示現し、衆生を救済される場合である。しかし小乗の聖人が灰身滅智けしんめつち
 (小乗の理想とされる涅槃の境地)となるか、または仮の身分の菩薩方の縁が尽きる時、いずれも上昇し消えて行くのに対し、残された我々凡人は
 相変わらず下の方へと墮落する。故に両者の間の最終的な結果は大きく異なっており、苦樂の差も大きく懸け離れているのである。従つて凡聖同居
 と言えども、ほんの少しの間の同居に過ぎず、究極的な同居ではないのである。また天地の間において、聖人方にお会いしたり、その教えを聞いた
 りする者は少ない。幸運にも聖人にお会いできたり、その教えを聞いたり

できても、親しくお側で教えていただけの者は更に稀なのである。

要解 又仏世聖人縦多。如珍如瑞。不能遍滿国土。如衆星微塵。又居雖同。而所作所辦。則迥不同。

また、仏の在世中は、（例えば、釈迦仏の時代は）聖人が比較的多かったとはいえ、たくさん星が空いっぱいにあるようでもなく、無数の塵が大地に充満するようでもなく、依然として珍ちん宝ぼうと祥しやう瑞ずいのように少なかった為、国の全土へ遍満することができなかつたのである。また聖人方と凡人らでは居住地が同じでも、それぞれすること、為すことが全く異なつていた為である。

要解 今同以無漏不思議業。感生俱会一处。為師友。如壘如篋。同尽無明。
同登妙覺。

現在では、諸上善の方々と同じく無漏の不思議な業（信願持名の意）を以て俱会一处の勝果を感じ得ることができ、諸上善の方々と師友（先生として尊敬するほどの友人の意）の関係を築き、兄弟のように仲睦まじく、（原文では壘けん篋ちやう相和すという比喻であつた）共に無明を断ち尽くし、共に妙覺の果位（成仏の意）を証得できるのである。

要解 是則下凡衆生於念不退中。超尽四十一因位。若謂是凡夫。却不歷異生。必補仏職。与觀音勢至無別。若謂是一生補处。却可名凡夫。不可名等覺菩薩。此皆教網所不能収。刹網所不能例。

前述の事実に基づいて言うならば、（十悪五逆じゅうあくごぎやくの重罪を犯した）下品の悪凡夫が念不退転の中に於いて（通常、菩薩修行の階梯において法身の位を証得されて成仏されるまで必須とされる）四十一の因位を全て一気に飛び越えたことを意味することになる。（まだ煩惱を断っていない為）凡夫ということもできるが、来世または後世を経歷することなく今世のみで必ず仏の補欠の位を証得でき、観音菩薩と勢至菩薩と殆ど変わらなくなるのである。（三不退転の位を証得している為）一生補処と呼ぶこともできる。（しかし、往生したばかりであるか、または往生してから日がまだ浅く煩惱を持っている為に）凡夫と呼んでもよいが、等覺菩薩とはやはりまだ言えないのである。これらのことは（釈迦仏が説かれた）一切の經教きょうきょうの中において特に記載されておらず、十方の仏刹ぶつせつに同じような事例が存在しない。

要解 当知吾人大事因縁。同居一閔。最難透脱。唯極樂同居。超出十方同居之外。了此。方能深信弥陀願力。信仏力。方能深信名号功德。信持名。方能深信吾人心性本不可思議也。

ところで我々凡人は、この世に生まれてきた最も大事な因縁が何であるのか、知っておくべきである。(それは正に生死輪廻しようじりんねから脱出し、無上の菩提を証得することに他ならない。)しかし現実には、同居土の六道輪廻という最も突破しにくい閔所せきしよが存在する。唯一極樂世界の同居土だけが(殊勝で奇妙な面においては)遙かに十方世界のそれを超越しているのである。この事実を知って初めて阿彌陀仏の本願力ほんがんりきを深く信じることができ。阿彌陀仏の本願力を深信して初めて名号の功德の不思議を深信することができ。持名念仏の功德を深信して初めて我々の心性の元々の不思議

を深信することができるのである。

要解 具此深信。方能發於大願。文中应当二字。即指深信。深信發願。即

無上菩提。合此信願。的為淨土指南。由此而執持名号。乃為正行。

このような深信を具えて初めて大いなる誓願（極樂世界への往生の意）を發せられる。經文の中の「应当」（すべきであることの意）という二字が即ち深信を指すのである。深信し發願することが即ち無上の菩提心なのである。深信することと發願することが合わさったものこそが、紛れもない極樂淨土への往生の指南なのである。そこから名号を執り持ち、ようやく正行（正しい修行の意）といえる。

要解 若信願堅固。臨終十念一念。亦決得生。若無信願。縱將名号持至風吹不入。雨打不湿。如銀牆鉄壁相似。亦無得生之理。修淨業者。不可不知也。大本阿彌陀經。亦以發菩提願為要。正与此同。

信願が堅固けんこであれば、臨終の十念ないし一念でも必ず極樂淨土へ往生できる。信願が無い、（または堅固でないならば）、阿彌陀仏の名号をいくら上手に唱えることができても、その純熟と綿密の精度が仮に「風吹けども入らず、雨が降れども濡れず、銅牆鉄壁どうしょうてつぺきの如し」であっても、極樂淨土へ往生できる道理は無いのである。淨業を修める者であるならば、知らないでは決してすまされないものである。大本の阿彌陀經（即ち『無量壽經』）も、菩提心を発せられることを要とされている。その道理とは正に本經の内容そのものなのである。

乙三・行者に執持名号を以て行いを立てることを正しく示す

丙一・無上の因果を開示
丙二・重ねてお勧めする

丙一・無上の因果を開示

經

舍利弗。不可以少善根福德因緣。得生彼国。舍利弗。

若有善男子。善女人。聞說阿彌陀仏。執持名号。若一日。

若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心

不乱。其人臨命終時。阿彌陀仏与諸聖衆。現在其前。是

人終時。心不顛倒。即得往生阿彌陀仏極樂国土。

要解

菩提正道名善根。即親因。種種助道施戒禪等名福德。即助緣。声聞

緣覺菩提善根少。人天有漏福業福德少。皆不可生淨土。唯以信願執持名号。

則一一声悉具多善根福德。散心称名。福善亦不可量。況一心不乱哉。

(菩提とは梵語で悟りの意味を表し、自らに本来具わっている「仏となりうる性質」「仏性」を発見し、悟りを開き、仏となることを意味するものである。正道とは真如本性のことであり、両者を合わせた)菩提の正道は、善根と名づけられ、それは即ち(一生成仏の)親因となる。これを補助する種々の行い、例えば布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若といった六波羅蜜等は福德と名づけられ、それは即ち助縁となる。声聞と縁覚といった二乗教のものは菩提の善根が少なく、人間道と天道のものは有漏の福業なので福德が少ない為、何れも極樂浄土へ往生することができない。唯一、信願執持名号だけが、一つ一つの仏号にことごとく多くの善根と福德が具わっているのである。散乱した心のままでさえも、称名念仏するこ

とにより得られる福と善は計り知れない。況して一心不乱であれば尚の事である。

要解 故使感応道交。文成印壞。弥陀聖衆。不来而來。親垂接引。行人心識。不往而往。託質宝蓮也。

深信切願持名、一心不乱が故に阿弥陀仏達と感応かんおう道交どうこうするのである。蠟ろう印いんに泥を塗り加熱すると、蠟印が壊れて印字が泥に焼き付けられるようなものである。極樂浄土への往生が達成できるのは、正に印字が泥に焼き付けられるようなものであり、娑婆世界を離脱することができるのは実に蠟印が溶けてなくなるようなものだからである。阿弥陀仏自ら諸菩薩を従え、来られずともおいでになり、人間世界に降臨こうりんされ、念仏者を極樂浄土に迎

え、引接されるのである。その念仏者の神識じんしき（俗で言う魂のこと）は行か
ずとも行き、極樂浄土の蓮華に託される。（後に蓮から化生として生まれ
てくるのである。）（来られずともおいでになり、行かずとも行きの境地を
理解するには、本質と事相の二つの角度から同時に観察する必要がある。
本質から見れば、阿彌陀仏も諸菩薩も極樂浄土も衆生の自性そのものによ
り、変現されるものであり、自性を離れていない為、来ること、行くこと
を言うことができず、来られず、行かずと表現している。しかし事相から
見れば、確かに来ることも行くこともあるのでおいでになり、行き、と言
えるのである。）

要解

善男女者。不論出家在家。貴賤老少。六趣四生。但聞仏名。即多劫

善根成熟。五逆十惡皆名善也。阿弥陀仏是万徳洪名。以名召徳。罄無不尽。故即以執持名号為正行。不必更涉觀想參究等行。至簡易。至直捷也。

善男子、善女人とは、出家在家を問わず、貴賤老若を問わず（天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道、胎生、卵生、湿生、化生といつた）六道四生も問わず、ただ阿弥陀仏の名号を聞くだけで多劫の善根が成熟したことを意味する。たとえ十惡五逆のものであつても（臨終の際に善知識に出遇い、その教えを深信し切願持名念仏すれば）皆善男子若しくは善女人と名付けることができるのである。阿弥陀仏は万徳の洪名である。阿弥陀仏の名号を称念することにより、阿弥陀仏が証得なさつてゐる真如本性と衆生に本来具わつてゐるそれとが感応道交し、ひいては真如本性に具わる徳能を引き出すことができるのである。またその徳能は言葉では言

い表せないほど無尽なものである。故に執持名号を正しい修行、正行とし、その他、例えばかんそう観想やさんきゆう参究（さんぜん参禅の意）等を付け加えたりすることは一切必要ない。（真に）簡易なることこの上なく、直截なること極まりないものなのである。

要解 聞而信。信而願。乃肯執持。不信不願。与不聞等。雖為遠因。不名

聞慧。

聞いてすぐに深信し、深信してすぐに切願し、そうして漸く名号を執持することができる。深信せず、切願せずでは名号を聞いていないにも等しいのである。（いつかは成仏の）えんいん遠因にはなるが、もんえ聞慧とは言えない。

要解 執持則念念憶仏名号。故是思慧。然有事持理持。

執持とは、念念に仏の名号を憶念おくねんして暫くも忘れないことであり、故に思慧なのである。ところで執持するには事相から執持する「事持」と理体から執持する「理持」の二つがある。

要解 事持者。信有西方阿弥陀仏。而未達是心作仏。是心是仏。但以決志願求生故。如子憶母。無時暫忘。

事持とは、「心こそが仏であり、心こそが仏を作る」、即ち「是心作仏、是心是仏」の理に達してはいないものの、西方に阿弥陀仏がおいでになることを信じ、断固たる志をもって往生を願求がんきゅうすることである。それは子の母を憶う心にも似て、片時も忘れることのない状態なのである。

要解

理持者。信西方阿彌陀仏。是我心具。是我心造。即以自心所具所造洪名。為繫心之境。令不暫忘也。

理持とは、「西方の阿彌陀仏は我が心具にして心造なり」を信じ、自身の心に具わる、自身の心が造る洪名を以て心を繋ぐ対象となし、少しの間も忘れないことである。

要解

一日至七日者。克期辦事也。利根一日即不乱。鈍根七日方不乱。中根二三四五六日不定。又利根能七日不乱。鈍根僅一日不乱。中根六五四三二日不定。

一日ないし七日とは期日を決め、その期日内に一心不乱の境地に達することができる。利根りこんのものは一昼夜で一心不乱の境地に至ることができる。

鈍根どんこんのものなら七昼夜必要である。中根ちゅうこんのものは二から六昼夜まで不定である。また利根のものは一心不乱の状態を七昼夜保持することができる。鈍根のものは僅か一昼夜しか保持できない。中根のものは六から二昼夜まで不定である、という解釈もできる。

要解

一心亦二種。不論事持理持。持至伏除煩惱。乃至見思先尽。皆事一心。不論事持理持。持至心開見本性仏。皆理一心。事一心不為見思所乱。理一心不為二邊所乱。即修慧也。

一心についても事の一心と理の一心の二つがある。「事持」、「理持」を問わず執持し煩惱を制御でき、且つ絶つことができ、また見思惑の尽きる状態に至る数々の境地を、事の一心と言う。心が開かれ、真如本性の仏

を見られる状態に至る数々の境地を、理の一心と言う。事の一心は見思惑に乱されることはない。理の一心は「空」と「有」の「二辺」にへん（「相對」の意）を超越し、そのどちらにもとらわれない。これが即ち修慧である。

（何故かといえば、聞慧もんえ、思慧しえ、修慧しゅうえは同時に行われるものであり、三即一、一即三だからである。）

要解

不為見思乱。故感变化身仏及諸聖衆現前。心不復起娑婆界中三有顛

倒。往生同居方便二種極樂世界。不為二辺乱。故感受用身仏及諸聖衆現前。

心不復起生死涅槃二見顛倒。往生実報寂光二種極樂世界。

心が見思惑に乱されない為、阿弥陀仏の化身及び諸聖衆しようじゆがその人の前に現れるのを感得するのである。心が二度と娑婆世界の（欲界よくかい、色界しきかい、無色むしき

界かいといつた）三有さんゆうに惑かいわされることがない為、同居土と方便土の二種の極樂世界へ往生するのである。心が相對する「二辺」を超越し、そのどちらにもとらわれない為、阿彌陀仏の報身及び諸聖衆がその人の前に現れるのを感じるのである。心が二度と生死しやうじ涅槃ねはんの相對に惑かいわされることがない為、實報土と寂光土の二種の極樂世界へ往生するのである。

要解

当知執持名号。既簡易直捷。仍至頓至円。以念念即仏故。不勞觀想。不必參究。当下円明。無余無欠。上上根不能踰其梱。下下根亦能臻其域。其所感仏。所生土。往往勝進。亦不一概。可謂橫該八教。豎徹五時。所以徹底悲心。無問自説。且深嘆其難信也。

執持名号は簡易で直截的なものであるだけでなく至頓至円であるものと

知つておく必要がある。念念ねんねん即ち阿彌陀仏の為、觀想も必要なければ参究も必要ない。(執持名号は)その時その場で円明えんみょうであり、いささかの瑕疵かもない。(文殊、普賢のような)上機根中の上機根のものであつてもこの法門の境界を越えられない。(地獄、畜生道のような)下機根中の下機根のものであつてもこの法門の恩恵を受けることができる。各々が感じ取る阿彌陀仏と往生する同居土から寂光土までの四土の殊勝なる環境は、そのものの信願の深淺と一心の程度の違いにより一概ではない。この淨土念仏の法門は正に(釈迦仏が説かれた)五時八教ごじはつぎょうと呼ばれる全ての法門を包括し、あらゆる法門を統攝とうしやくするものなのである。しかしあまりにも奥深く、(仏以外に)発問するものがない為に、釈迦仏は徹底した悲心をもって誰一人として聞こうとするものがなくとも、自ら大衆にお説きになつたの

である。故にこの法を「難信の法」であると、深く嘆息たんそくなされたのである。

要解

問。「観經」專明作觀。何謂不勞觀想。答。此義即出『観經』。彼經因勝觀非凡夫心力所及。故於第十三別開劣像之觀。而障重者猶不能念彼仏。故於第十六大開称名之門。今經因末世障重者多。故專主第十六觀。当知人根雖鈍。而丈六八尺之像身。無量寿仏之名字。未嘗不心作心是。故觀劣者不勞勝觀。而称名者並不勞觀想也。

問い（一）：『観無量寿仏經』では明瞭に専ら「観想」が説かれていますが、何故「観想」は必要がないと主張されるのでしょうか？答え：「観想」は必要がない、という教えは正に『観無量寿仏經』から出ているのである。『観無量寿仏經』によれば、「勝観しょうかん」は、（例を挙げれば、阿弥陀

仏の虚空一面に満ちわたるほどの巨大なお姿を見奉ることは、凡夫の心力が及ぶものではなく、それ故に第十三種の觀法において別途で一丈六尺または八尺の小さな阿彌陀仏の像がおいでになると想い描くがよい、と開示なさったのである。しかし業障が重いものはそれでも阿彌陀仏の像がおいでになると想い描く事ができない為、それ故に第十六種の法において大いなる称名念仏しょうみやうねんぶつの法門を御開示なさったのである。当『阿彌陀經』は末法の世において業障が重いものが多い為、専ら第十六種の法を主張なさつているのである。けれども人間の根機は鈍いとは言え、一丈六尺または八尺の仏像及び阿彌陀仏、即ち無量寿仏の名号が今でも一度として「我が心具にして心造なり」でなかつたことはいないということを知っておくべきなのである。故に一丈六尺または八尺の小さな阿彌陀仏の像を觀想するものは

「勝観^{しょうかん}」する必要がなく、称名念仏するものは「観想」する必要がないのである。

要解

問。天奇毒峰諸祖。皆主参念仏者是誰。何謂不必参究。答。此義即出天奇諸祖。前祖因念仏人不契釈迦徹底悲心。故傍不甘。直下詰問。一猛提醒。何止長夜復旦。我輩至今日。猶不肯死心念仏。苦欲執敲門瓦子。向屋裡打親生爺娘。則於諸祖成惡逆。非善順也。

問い（二）：天奇^{てんき}、毒峰^{どくほう}禪宗諸祖師は御二方とも「念仏者は誰」（念仏者とはいかなるものか？）と主張されていますが、何故「参究」は必要ない、と言われるのですか？ 答え：「参究」は必要ない、という教えは正に天奇諸祖師から出ているものである。前諸祖師は念仏者が釈迦仏の徹底し

た悲心を理解しておらず、その悲心と契けい合ごうしないのを傍で黙もくつて見ていら
れなかった。そこで単刀直入に念仏者を詰問し猛もう然ぜんと手掛かりを与え、注
意を喚起し豁かつ然ぜん大悟たいごさせようとしたのである。どうして無む明みょう長夜ちやうやが明け
るだけに留とどまろうか。(暗あんに転てん迷めい開悟かいごせずとも一直線に極樂浄土へ往生す
ることができるとを指しているのである。)残念なことに私たちは今に
至いたつても尚、心を落おち着ちかせ他の事など考えずに念仏しようとしていない。
この事は以下のように喩たとえることができる。昔は巨大な門を叩く時、辺り
に落ちてゐる瓦わを使つかつていた。門が開き中に入った後、本来ならばその瓦
を捨ててしまふだろう。ところがその瓦を捨てず、あろうことか家いへに
自分の実の両親に向かつて投げつける。こういった親不孝をしようとして
いることに気づかず、苦しんでゐるようなものである。これは仏門に

おいて何を意味するかというと、諸祖師に対し大逆無道だいぎやくむどうであり、諸祖師の教えに善く従うどころか逆らうも同然の事なのである。

要解

進問。此在肯心者則可。未肯者何得相応。曰。噫。正唯未肯。所以要你肯心相応。汝等正信未開。如生牛皮。不可屈折。当知有目者。固無日下燃灯之理。而無目者。亦何必於日中苦覓灯炬。大勢至法王子云。不仮方便。自得心開。此一行三昧中大火聚語也。敢有觸者。寧不被燒。

更なる問いかけ：これについては、この念仏法門に対し、心を落ち着かせ、一切の他の法門を放下ほうげすることができぬ者ならば問題ないでしょう。けれど、放下することができない者はどのようにして相応を得ることが出来るのでしょうか？ 答え：ああ、（一心専念のできる者に余計な事を言う

必要はないが）これは正にそれができない者たちの為に、諸祖師が苦心して用いた善巧方便である。その目的は貴方達に一心が得られるようにさせ、また自性に相応することができるようにならせることなのである。貴方達は（この念仏法門に対し）まだ正しい認識を持っておらず、言うならば生の牛皮のようなもので、折り曲げることができない。（使い物にならず成就できないことの意。）目のよい者は無論太陽の下で灯をともし必要がない。では何故目の悪い者は太陽の下で一所懸命に灯炬を探す必要があるのだろうか？このことについては知っておく必要がある。大勢至法王子のご開示によれば、「方便を借る必要なし、自ずから心開くことを得る」と。（現代語訳すると、参究や観想等、その他の一切の法門の助けは不要であり、信願持名念仏さえすれば、自ずから見性成仏の境地を得られる。）

これは一行三昧いちぎょうさんまい（または念仏三昧）において、大火聚だいかじゆ（ひだるまの意）を意味する言葉である。（この大火聚を現代語訳するならば、危険度が高いことを表す警告用語となる。）一心にして念仏せず、他の法門をおり混ぜて方便を借りようとすることは、自ら火だるまの中に飛び込むことと同じであり、それで都合よく火に焼かれずにすむものか、と言っているのである。

要解

問。臨終仏現。寧保非魔。答。修心人不作仏觀。而仏忽現。非本所期。故名魔事。念仏見仏。已是相應。況臨終非致魔時。何須疑慮。

問い（三）：臨終の際に現れる仏が、何故魔ではないと保証できるので
しょうか？答え：心を修める者（大半は参禅の人を指す）は日頃心に仏を

観想しないが、仏が突然現れるということが本来期待する通りのものでない為に、魔事と名付けるのである。ところが、念仏する者にとっては、その者の前に阿弥陀仏が現れるということがすでに相応しているのである。その上臨終の際は（阿弥陀仏が来迎らいごう引接いんじやくの本願を発したので）魔が邪魔することができない為、何故疑つて心配する必要があろうか？

要解

問。七日不乱。平時耶。臨終耶。答。平時也。問。七日不乱之後。復起惑造業。亦得生耶。答。果得一心不乱之人。無更起惑造業之事。問。大本十念。宝王一念。平時耶。臨終耶。答。十念通二時。晨朝十念属平時。十念得生。与観経十念称名同。属臨終時。一念則但約臨終時。問。十念一念並得生。何須七日。答。若無平時七日功夫。安有臨終十念一念。縦下下

品逆悪之人。並是夙因成熟。故感臨終遇善友。聞便信願。此事万中無一。豈可僥倖。淨土或問斥此最詳。今人不可不讀。

問い（四）：「七日七夜（なのかななや）、昼夜不斷で念仏を続け、一心不乱を得る」というのは、平時を指すものでしょうか？それとも臨終の際を指すものでしょうか？答え：平時である。問いかけ：七日七夜、一心不乱を得た後に再び見惑または思惑が起き、業を作ってしまったても臨終の際には往生できるのでしょうか？答え：真に「一心不乱」を得た者が、再び見惑または思惑が起き業を作ることなど有り得ない。問い（五）：『無量寿經』（俗にいう大本の『阿弥陀經』）には十念（じゅうねん）により極楽淨土に往生できると説かれ、『念仏三昧宝王論』には一念と説かれています。これは平時を指すものでしょうか？それとも臨終の時を指すものでしょうか？答え：「十念」は平

時にも臨終の時にも通じるものである。朝晩の十念とは平時のことである。「十念得生」については、『観無量寿仏経』に説かれている「十念称名」と同じで、臨終の時を指すものである。「一念」とは、ただ臨終の最後の一念を指すものである。問い（六）：「十念」でも「一念」でも往生できるのなら何故「七日七夜」必要なのでしょう？答え：平時における「七日七夜」の修行の積み重ね無くして、臨終の際に「十念一念」ができれば？たとえば下下品の五逆十悪の悪人であっても、宿世の善根、福德の因縁が成熟すれば、臨終の際に善知識に出遇うことを感得する。その善知識の教えを聞けば、すぐに深信し切願念仏する為、往生できるのである。このような事例は、（極楽浄土に往生した者の中でも）万人に一人もないであろう。従って僥倖など頼ることができようか？この件に関しては『浄土

或問』の中に最も詳しい説明があるので、今このご時世を生きる者たちは是非とも読む必要がある。

要解

問。西方去此十萬億土。何得即生。答。十萬億土。不出我現前一念心性之外。以心性本無外故。又杖自心之仏力接引。何難即生。如鏡中照數十層山水樓閣。層數宛然。実無遠近。一照俱了。見無先後。從是西方過十萬億仏土。有世界名曰極樂亦如是。其土有仏号阿彌陀。今現在説法亦如是。其人臨命終時。阿彌陀仏与諸聖衆現在其前。是人終時心不顛倒。即得往生阿彌陀仏極樂国土亦如是。当知字字皆海印三昧。大円鏡智之靈文也。

問い（七）：西方極樂世界はここ娑婆世界より西へ向かつて十萬億の仏国土こくどを過ぎた所にあると説かれています。どうして即生そくしょう（即時に生まれ変

わる意）が得られるのでしようか？ 答え：十萬億の仏国土は、自らの現前
 一念の心性の外にはない。（言い換えれば我現前一念の心性を離れるもの
 ではない。）何故かといえ、**「心外無法、法外無心」**（一切唯心造）だか
 らである。その上に**自性弥陀**の**仏力**を頼りに来迎引接するのだから、即時
 生まれ変わるのに何の難しいことがあるか？ これは、鏡とその鏡に映る
数重層の楼閣山水の**関係**のようなものである。層数は**宛然**としているが、
 実際は**遠近**がない。鏡に映る全ての映像は遠近の距離とは関係なく、一切
 同時に映るのである。（我々の心性はこの鏡と同じような特質を持っている
 る。）経文の中に「これより西方に向かつて十萬億の仏国土を過ぎた所に
 一つの世界があり、そこを極楽という」、の一節がある。これも（我現前
 の一念の心性を離れるものではない為）また同じことである。「そこに仏

様がおいでになる。名を、阿弥陀仏と称され、今正に法を説かれているも（我現前の一念の心性を離れるものではない為）また同じである。「臨終の際に阿弥陀仏は諸の聖衆とともに、その人の前に現れ、その人は終の時がきても心顛倒することなく、立ちどころに阿弥陀仏の極楽国土へと往生する」というのも（我現前の一念の心性を離れるものではない為）また同じなのである。（この阿弥陀経の中の）一文字一文字が皆「海印三昧」であり、「大円鏡智」なのである。これは非常に稀で貴重な経文であることを知っておく必要がある。

要解 問。持名判行行。則是助行。何名正行。答。依一心説信願行。非先後。

非定三。蓋無願行不名真信。無行信不名真願。無信願不名真行。今全由信

願持名。故信願行三。声声円具。所以名多善根福德因縁。觀經称仏名故。念念中除八十億劫生死之罪。此之謂也。若福善不多。安能除罪如此之大。

問い（八）：（「信願」は「慧行」であり）「持名」は「行行」であると判定するならば、「慧行」は「正行」となるので、通常「持名」は即ち「助行」の分類に入るはずですが、何故「正行」と名付けるのでしょうか？答え：一心の中には「信願行」が具わっている。どれが先でどれが後という関係でもなければ、互いの区別がはっきりと固定されているわけでもない。思うに「願と行」が無ければ真に信じるとは言えず、「行と信」が無ければ真に切願するとは言えない。（同様に）「信と願」が無ければ真に「行」（持名の意）と言うことはできないのである。（従つて）今現在、「信願行具足」となっている。「信願行」は三即一、一即三のため、その一声一

声の阿弥陀仏の名号の中に、真信・切願・篤行とつこうが円満に具わっている。故に「多善根・多福德・多因縁」と名付けるのである。『観無量寿仏経』の中に「仏名を称するが故に、念々の中において八十億劫の生死の罪を除く」の一節があるが、正にこの事を説かれているのである。若し福德と善根が多く含まれていなければ、どうしてこれだけの「万よろずの罪」を滅することができるだろうか？

要解 問。臨終猛切。能除多罪。平日至心称名。亦除罪否。答。如日出。

群闇消。称洪名。万罪滅。

問い（九）：臨終の際は念力が凄まじく、信願が懇切こんせつな為、多くの罪を滅することができるとは、平素はただ至心ししんをもって名号を称念すれば

ば罪を滅することはできるのでしようか？ 答え：日が昇れば暗闇が消えるのと同じ道理で、（一心不乱に）洪名を称念することができるのなら、万の罪を滅することもまた可能である。

要解

問。散心称名。亦除罪否。答。名号功德不可思議。寧不除罪。但不定往生。以悠悠散善。難敵無始積罪故。当知積罪假使有体相者。尽虚空界不能容受。雖百年昼夜弥陀十万。一一声滅八十億劫生死。然所滅罪如爪上土。未滅罪如大地土。唯念至一心不乱。則如健人突困而出。非復三軍能制耳。

問い（十）：散心念仏でも罪を滅することは可能でしょうか？ 答え：名号の功德は不可思議であるから、どうして罪を滅することができないこと

があるうか？但し、往生できるかどうかは定かではない。（臨終の際に一心になれるか否か次第、の意）（何故かといえば）悠悠とした散善さんぜんでは、無始より積み重ねてきた罪に太刀打ちできないからである。若しこれらの罪に形があり、体積で量ることができるとしたら、虚空界こくうかいが尽き果ても収容することなどできない。仮に一昼夜、阿弥陀仏の称号を十万声称えることができ、それが百年間続いたとする。経文の中には「一声一声は八十億劫の生死の罪を滅することができ」とある。それが全て出来たとしても、滅することのできる罪の数は「爪上そうじょうの土」のように微量で、まだ滅していない罪の数は大地の土の如く多いのである。（とても重要なことなので）この事は是非とも知っておく必要がある。唯一助かる方法が、一心不乱に至るまで念仏することである。これは、謂わば勇者ゆうしゃが（見思惑、塵砂惑、

無明惑からなる) 三軍の包圍網ほういもうを突破することに成功するのと同じ道理である。

要解

然称名便為成仏種子。如金剛終不可壞。仏世一老人求出家。五百聖衆皆謂無善根。仏言。此人無量劫前為虎逼。失声称南無仏。今此善根成熟。値我得道。非二乘道眼所知也。由此觀之。法華明過去仏所。散乱称名。皆已成仏。豈不信哉。

但し念仏しさえすれば成仏の種となり、この種は金剛の種のように終始壊れることはない。お釈迦様がまだご健在の頃の事である。ある老人が出家したいと申し出た。すでに聖人となっている世尊の五百の弟子達が老人を見て、この老人には善根がないと判断し歸らせた。しかしお戻りになっ

た仏は失望の色を隠せない老人に対し、貴方には善根があると仰った。そして皆にこう御開示なさった。実は無量劫の前にこの人は虎に追われ、突如「南無仏」と称えた。今はその善根が成熟しており、ちようど私は得道の最中である。これは（無量劫の前のことなので）二乗の聖人の眼力が及ぶものではない。この事例を見れば、『法華経』の中に明示されている過去の仏の時代において、散乱した心であっても念仏したものは「皆已に仏道を成ずる」（ゆくゆくは仏となる為の種がすでに撒かれている意）という経文に、納得せざるを得ないであろう。

要解

伏願縑素智愚。於此簡易直捷無上円頓法門。勿視為難而輒生退委。

勿視為易而漫不策勤。勿視為浅而妄致藐輕。勿視為深而弗敢承任。蓋所持

之名号。真実不可思議。能持之心性。亦真実不可思議。持一声。則一声不可思議。持十百千万無量無數声。声声皆不可思議也。

拙僧が、この簡易で直截的で、又無上の円頓えんどんの法門において縊素しそ（出家者と在家者の意）、智愚ちぐの皆に伏して願うことは以下の通りである。難し過ぎると想い、すぐに諦めることがないように。簡単過ぎると想い、散漫になり、精進しないことがないように。浅過ぎると想い、軽視することがないように。深過ぎると想い、納得しないことがないように。（この私が、一生成仏するなどありえないと思うことがないように。）思うに、所念しよねん（念ずる対象の意）の阿弥陀仏の名号は絶対の真理であり不可思議なものである。能念のうねん（念ずることが出来る主体の意）の心性（真心、または真如本性）もまた、絶対の真理であり不可思議だからである。故に持名念仏は一声で

あれば、即ちその一声が不可思議である。十声、百声、千声、万声、無量無数声であれば、その一声一声が全て不可思議なのである。

丙二・重ねてお勧めする

經

舍利弗。我見是利。故說此言。若有衆生聞是說者。心

當發願。生彼國土。

要解 我見者。仏眼所見究尽了也。是利者。横出五濁。円淨四土。直至不退位尽。是為不可思議功德之利也。

「我見」とは、釈迦仏が仏眼をもつて見るものなので究尽了である。

この御利益は、「横出五濁」（五濁悪世を飛び越えるの意）であり、「円淨四土」（最下位の同居土に往生しても上位三土と円融無障であることの

意) であり、「三不退転が尽き果てるに至るまで」(一生補処を証得する) のことである。これら全てが不可思議の功德の御利益なのである。

要解

復次是利。約命終時心不顛倒而言。蓋穢土自力修行。生死関頭。最難得力。無論頑修狂慧。麼羅無功。即悟門深遠。操履潜確之人。儻分毫習氣未除。未免随強偏墜。永明祖師所謂十人九蹉路。陰境若現前。瞥爾随他去。此誠可寒心者也。初果昧於出胎。菩薩昏於隔陰。者裡豈容強作主宰。僥倖顛預。

御利益はもう一つある。それは臨終の際、心が顛倒しないことについて説かれていることである。思うに穢土えどにおいて、(煩惱から抜けられない) 凡夫が自力のみで修行しても、いざ生死の分かれ目の時が来ると、六道輪

廻から脱出することは至難なことである。理論、方法等が分からず、盲目的に修練しているものであれ、表面上の理論、方法しか分からず実行が伴わない世智弁聡のものであれ、結局皆無功であるから、生死の輪廻から脱出することはできない。たとえ深遠なる悟りを開いた行解相應のものであっても、或いは持戒精嚴のものであっても、貪、瞋、痴、慢、疑に代表される煩惱をほんの僅かでも断ち切れていなければ、善悪の業において業力が強い方に牽引され流転輪廻を免れることはできない。このことについては永明延寿祖師が御開示なさった、下記の言葉の表わす境界が正にそれにあたる。その言葉とは「(禅あり浄土の念仏無しでは)十人中九人が道に蹉く。陰境が忽ち現前し、一瞥してそれに引きずられ、連れて行かれてしまふ。」というものである。真に寒心に堪えないものである。小乗の初果

の聖人は「胎道を出る」時に過去の記憶が消失する。大乘の菩薩（位の低い菩薩のこと）もまた然りである。生死の分かれ目の時、自分が自分でいられるだろうか？ 僥倖（げいこう）を頼り、安心していても大丈夫だと言えるだろうか？

要解 唯有信願持名。杖他力故。仏慈悲願。定不唐捐。弥陀聖衆。現前慰導。故得無倒。自在往生。仏見衆生臨終倒乱之苦。特為保任此事。所以殷勤再勸發願。以願能導行故也。

そういった際に唯一成就する方法が、「信願持名」なのである。他力に頼る故に、阿彌陀仏が発せられた（四十八の）慈悲なる願力が虚しくなることはない。阿彌陀（あみだ）聖衆（しょうじゆ）が臨終の人の前に現れ、慰め導く為に、その人は

心が顛倒せず自在に極楽浄土に往生する環境を得るのである。釈迦仏は、衆生が臨終の際に心が顛倒し、自分が自分でいられず苦しむのを見ていられなかったのである。故に敢えてこの事を保証され、老婆心より再度願掛けするようお勧めになったのである。願掛けすることにより、修行に導くことが可能になるからである。

要解 問。仏既心作心是。何不竟言自仏。而必以他仏為勝。何也。

問い：仏は「是心作仏、是心是仏」（この心が仏を作り、この心の外に仏はいないの意）であるので、最後に「自仏」とは仰らず、必ずや極楽浄土の阿弥陀仏に頼るようお勧めになるのは何故でしょうか？

要解 答。此之法門。全在了他即自。若諱言他仏。則是他見未忘。若偏重自仏。却成我見顛倒。

答え：この念仏法門は全て我々に「じ自たい他いち一如によ、じ自た他ふ不二に」の道理を明確に分からせる為にある。若し阿彌陀仏のことを自仏以外の他の仏と思ひ、言うのならば、即ち「他見」を忘れていないことになる。若し自仏を偏重するならば、我見執着となるので、それ故に全ての見解が顛倒することになる。

要解 又悉檀四益。後三益事不孤起。儻不從世界深發慶信。則欣厭二益尚不能生。何況悟入理仏。唯即事持達理持。所以弥陀聖衆現前。即是本性明顯。往生彼土。見仏聞法。即是成就慧身。不由他悟。

また四し悉しつ檀だんの四つの御利益に関して言えば、後の為人い悉しつ檀だん、対治たい悉しつ檀だんとして最後の第一だいいち義ぎ悉しつ檀だんはどれも一番最初の世界せかい悉しつ檀だんと深く関わり合っていると云える。若し世界せかい悉しつ檀だんより歓喜の心が生れず、深く仏法を信じようとする気持ちが起こらないならば、この穢土を厭離し、彼の浄土を欣求する二つの御利益を、当然得ることはできない。況してや真如の理仏に悟入ごにゅうすることなど不可能である。ただ「事持」から「理持」に到達したので、阿あ彌み陀だ聖しょう衆じゆが臨終の人の前に現れるのである。即ち「自性彌陀」がはつきりと現れることである。彼の浄土に往生し、見仏けんぶつ聞もん法ぼうするということは、即ち慧身（報身の意）を成就することである。自然と本性彌陀に悟入するので、他には由らないのである。

要解 法門深妙。破尽一切戲論。斬尽一切意見。唯馬鳴龍樹智者永明之流。

徹底担荷得去。其余世智弁聰。通儒禪客。尽思度量。愈推愈遠。又不若愚夫婦老实念佛者。為能潛通仏智。暗合道妙也。我見是利。故説此言。分明以仏眼仏音。印定此事。豈敢違抗。不善順入也哉。一正宗分竟。

この法門は実に深妙で、一切の戲論けろんを打ち負かし尽くし、一切の邪見けけんを斬り尽くすものである。馬鳴菩薩びみょうぼさつ、龍樹菩薩りゅうじゆぼさつ、智者大師、永明大師といった方達だけがこの事をよく理解し、この法門を徹底して担い、受け継ぐことができるのである。その他、世智よち弁聰べんそうの者や儒学者じゆがくしや、禪客等ぜんかく、皆が思いを尽し、推し量り、分別すればするほど、弁論すればするほど、益々真如本性から遠ざかってしまうのである。そうになると、ひたすら真面目に念佛する愚夫愚婦ぐふぐふにすら及ばなくなる。ただひたすらに真面目に念佛する愚夫

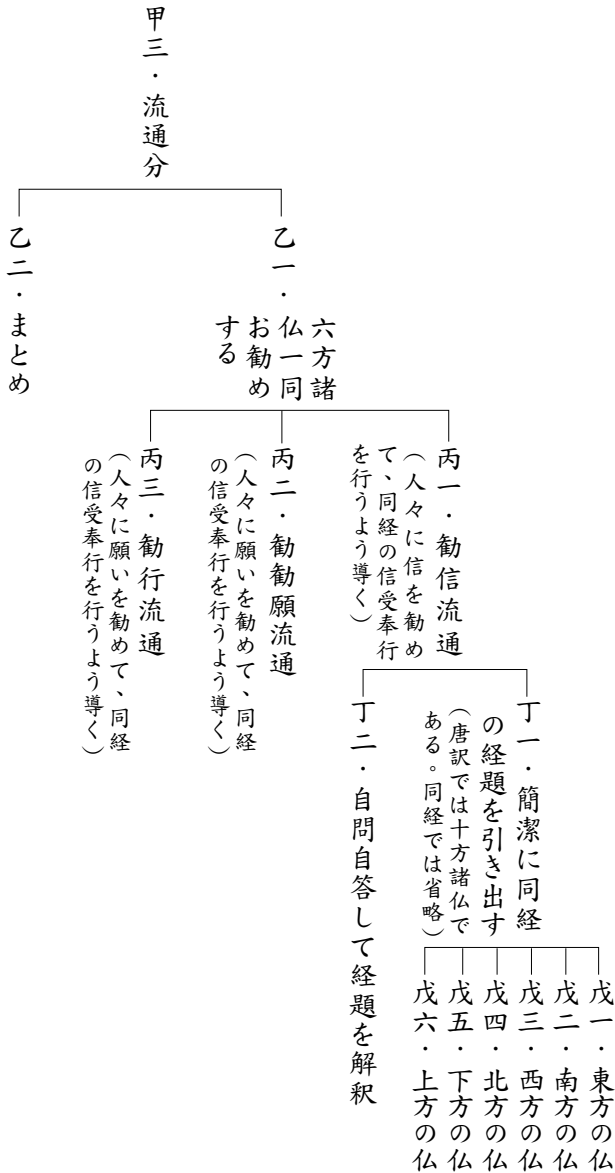
愚婦は、見事に完全円満なる仏の智慧、または深妙なる道と暗合するからである。「我見是利。故說此言」（この私がこれらの御利益を見たので、こうして説いているのである）この御言葉は、釈迦仏が明確に御自分の眼と声を以て衆生達にこの事を保証する、と仰っているものである。我々がどうして逆らうことなどできようか？これに逆らうというなら、仏の教えを遵守する良い弟子であるとは言えない。これをもって甲二の正宗分を終了する。

甲三・流通分

要解 信願持名一法。円收円超一切法門。豎与一切法門渾同。横与一切法門迥異。既無問自說。誰堪唱募流通。唯仏与仏。乃能究尽諸法実相。此經

唯仏境界。唯仏仏可與流通耳。

「信願持名」という法は、他の全ての法門を円満に包括し、円満に超越しているものである。当法門は縦においては、（浅深、次第があるので）他の全ての法門と同じであるが、横においては他の一切の法門と比べて、全く異なっていると言える。それ故に釈迦仏は敢えて人に聞かれずとも自ら説かれたのである。そしてこの教えを広く衆生に提唱し、勧め、そして流布するという重責を担うに相応しいのはどういったものなのか？それが可能なのは唯一諸仏のみである。諸仏だけが諸法しよほうじつ実相じつそうを究竟することができからである。本経は仏のみの境地である。それ故に、流布の実行とその責任を持つことができるのは諸仏のみなのである。



戊一・東方の仏

經

舍利弗。如我今者。讚嘆阿彌陀仏不可思議功德之利。

東方亦有阿閼鞞仏。須彌相仏。大須彌仏。須彌光仏。妙音

仏。如是等恒河沙數諸仏。各於其國。出広長舌相。遍覆

三千大千世界。說誠実言。汝等衆生。当信是稱賛不可思議

功德一切諸仏所護念經。

要解

不可思議。略有五意。一。横超三界。不俟斷惑。二。即西方横具四土。

非由漸証。三。但持名号。不仮禪觀諸方便。四。一七為期。不借多劫多生
 多年月。五。持一仏名。即為諸仏護念。不異持一切仏名。此皆導師大願行

之所成就。故曰阿弥陀仏不可思議功德之利。

不可思議とは、概して五つの意味合いがある。一つには「横出三界」である。三惑煩惱を断ち切るまで待たなくても大丈夫であることを指す。二つには「横具四土」である。西方極樂浄土へ往生すると同時に四土とも感得するという意味である。通途法門のように漸次（徐々に）に三惑煩惱を断じ、三身四土を次第に感得する必要がない。三つにはただ名号を執持（しゅうぢ）することを指し、参禅や観想など諸々の助行が必要ない。四つには、時間が短いことを指す。一区切り七日間という短い期限で成就できることである。多劫（たごう）、多生（たしょう）、多年月（たねんげつ）は必要ない。五つには、専ら阿弥陀仏の名号のみを持つことを指す。これにより諸仏に護念されることとなり、あらゆる仏名を一度に持つことと何ら違いはなくなるのである。これらは全て導師である

阿彌陀仏の大いなる誓願と大いなる行いによって成就されたものである。故に釈迦仏は「阿彌陀仏の不可思議な功德の御利益」と仰ったのである。

要解

又行人信願持名。全摂仏功德成自功德。故亦曰阿彌陀仏不可思議功德之利。下又曰諸仏不可思議功德。我不可思議功德。是諸仏釈迦。皆以阿彌為自也。

また念仏者は「信願持名」することにより、阿彌陀仏の功德を全て円満に自身の功德に変えることができる。故に再び「阿彌陀仏の不可思議な功德の御利益」と仰ったのである。次のくだりにおいても、釈迦仏はまた「諸仏の不可思議な功德、そして私の不可思議な功德」と仰っている。これは諸仏も釈迦仏も全て阿彌陀仏を自身とみなしている、という意味である。

要解

阿閼鞞。此云無動。仏有無量徳。応有無量名。隨機而立。或取因。或取果。或性。或相。或行願等。雖拳一隅。仍具四悉。随一名。顯所詮徳。劫壽説之。不能悉也。

阿閼鞞（あしやくび仏）とは、（梵語の音写であり）無動、不動と漢訳する。仏には無量の徳能があるため、無量の名号があってもおかしくない。（仏にはもともと名号がない。）名号は衆生の根機に拠って立てられたものなのである。因から立てられたものもあれば、果から立てられたものもある。本性から立てられたものもあれば、事相から立てられたものもある。また（普賢菩薩ふけんのように）行いから立てられたものもあれば、（地藏菩薩じぞうのように）誓願から立てられたものもある。無量の徳能の一つの例として、四

悉檀の四つの御利益が全て欠けることなく具わっていることが挙げられる。それぞれの名号には仏の徳能を表す無量の含意がんいがあり、その含意は劫が尽きてもその全てを言い表すことはできない。

要解

東方虚空不可尽。世界亦不可尽。世界不可尽。住世諸仏亦不可尽。

略挙恒河沙耳。

東方の虚空は尽き果てることなく、世界も尽き果てることがない。世界が尽き果てることがないならば、世に住する諸仏も尽き果てることはないのである。経文において釈迦仏は、世に住する諸仏が多いことを簡潔に恒河沙がしやのようである、としか挙げられていない。

要解 此等諸仏。各出広長舌勸信此經。而衆生猶不生信。頑冥極矣。常人

三世不妄語。舌能至鼻。藏果頭仏。三大僧祇劫不妄語。舌薄広長可覆面。
今証大乘淨土妙門。所以遍覆三千。表理誠稱真。事實非謬也。

これらの諸仏は皆広長舌相こうちようぜつそうを呈され、本經を信じるようお勧めになつて
いるのである。にも関わらず衆生は依然として信じようとしなない。頑迷極
まりないことである。凡人は三世にわたつて不妄語ふもうご（嘘をつかない）であ
れば、舌を伸ばすと鼻の先まで届くようになる。藏教の仏は三大僧祇さんだいそうぎにわ
たつて不妄語である為、舌が薄く、広く長く、伸ばすと顔一面を覆うこと
ができる。今、それぞれの世界の諸仏達（円教の仏）は大乘教において淨
土の「信願持名」の妙法を証明する為、皆広長舌相を呈され、その舌はそ
れぞれ三千大千世界を満遍なく覆っている。この事は、道理が誠で真理で

あり、事相もまた事実で嘘、偽りが無いことを表しているのである。

要解 標出経題。流通之本。什師順此方好略訳今題。巧合持名妙行。奘師

訳云称赞浄土仏撰受経。文有詳略。義無増減。

ここにおいて釈迦世尊は本経の経題を（『称赞不可思議功德一切諸仏所護念経』）と御開示下さった。これまでに流布している漢訳の版本には鳩摩羅什訳と玄奘訳の二種類がある。羅什大師は此方の好みに合わせて、上記の経題を簡略して現在の『仏説阿弥陀経』と意識された。正に執持名号という妙行にふさわしく、ほどよく一致したものとなっている。（のちの）玄奘大師は（逐語訳の方法を取り）『称赞浄土仏撰受経』と直訳された。この二つの翻訳文は、文字の表現に詳細と概略の違いがあるものの、

その意義において全く差異はないのである。

戊二・南方の仏

經 舍利弗。南方世界有日月灯仏。名聞光仏。大焰肩仏。

須弥灯仏。無量精進仏。如是等恒河沙数諸仏。各於其国。

出広長舌相。遍覆三千大千世界。説誠実言。汝等衆生。

当信是称赞不可思議功德一切諸仏所護念經。

戊三・西方の仏

經 舍利弗。西方世界有無量寿仏。無量相仏。無量幢仏。

大光仏。大明仏。宝相仏。浄光仏。如是等恒河沙数諸仏。

各於其国。出広長舌相。遍覆三千大千世界。説誠実言。汝

等衆生。当信是称賛不可思議功德一切諸仏所護念經。

要解 無量寿仏。与弥陀同名。十方各方面同名諸仏無量也。然即是導師亦

可。為度衆生。不妨轉賛釈迦如来所説。

(ここにおいて釈迦世尊は仰つてゐる) 無量寿仏と、阿弥陀仏とは同名である。十方各方面において同名の諸仏は皆無量なのである。当然導師である阿弥陀仏と見なすことも可能である。衆生済度の為に釈迦如来がお説きになつてゐるこの法門を、阿弥陀仏も称賛なさつてゐるのである。

戊四・北方の仏

經 舍利弗。北方世界有焰肩仏。最勝音仏。難沮仏。日生

仏。網明仏。如是等恒河沙数諸仏。各於其国。出広長舌

相。遍覆三千大千世界。説誠実言。汝等衆生。当信是称赞

不可思議功德一切諸仏所護念經。

戊五・下方の仏

經 舍利弗。下方世界有師子仏。名聞仏。名光仏。達磨

仏。法幢仏。持法仏。如是等恒河沙数諸仏。各於其国。出

広長舌相。遍覆三千大千世界。説誠実言。汝等衆生。当信

是稱贊不可思議功德一切諸仏所護念經。

要解 此界水輪金輪風輪之下。復有下界非非想天等。乃至重重無尽也。達摩。此云法。

（『華嚴經』によれば、我々が住んでいるこの娑婆世界は水輪、金輪、風輪、空輪より構成されている。）この水輪、金輪、風輪の下に、更に下界である非非想天など、乃至重重無尽の世界がある。（達摩仏の）達摩とは、「法」と漢訳する。（法とは、仏を師承し、衆生の軌範となることを表すものである。）

戊六・上方の仏

經 舍利弗。上方世界有梵音仏。宿王仏。香上仏。香光

仏。大焰肩仏。雜色宝華嚴身仏。沙羅樹王仏。宝華徳仏。

見一切義仏。如須弥山仏。如是等恒河沙数諸仏。各於其

国。出広長舌相。遍覆三千大千世界。説誠実言。汝等衆

生。当信是称赞不可思議功德一切諸仏所護念經。

要解 此界非非想天之上。復有上界風輪金輪及三界等。重重無尽也。

(この娑婆世界は欲界、色界、無色界の三界からなっており、無色界天の頂点は非非想天である。) この非非想天の上方に、更に風輪、金輪及び三界などからなる別の世界がある。(その世界の上にも更に別の世界があり) 正に重重無尽なのである。

要解 問。諸方必有淨土。何偏贊西方。答。此亦非善問。仮使贊阿闍仏国。汝又疑偏東方。展転戲論。

問い：諸方しよほうにも相違なく淨土があるのに、何故西方の極樂淨土ばかりが称賛されるのでしょうか？答え：これもまた無益且つ無意味な質問である。仮に阿闍あしやくび仏の淨土ばかり賞賛すれば、貴方は同じように何故東方淨土ばかり賞賛するのか、と聞くに違いない。こういったやり取りは戲論の繰り返しになるだけである。

要解 問。何不遍緣法界。

問い：何故法界とくまなく緣することをしないのでしょうか？

要解 答。有三義。令初機易標心故。阿彌本願勝故。仏与此土衆生偏有縁

故。蓋仏度生。生受化。其間難易淺深。總在於縁。縁之所在。恩徳弘深。種種教啓。能令歡喜信入。能令觸動宿種。能令魔障難遮。能令体性開發。諸仏本従法身垂迹。固結縁種。若世出世。悉不可思議。尊隆於教乘。挙揚於海会。沁入於苦海。慈契於寂光。所以万徳欽承。群靈拱極。

答え：それには三つの意義がある。（一つは）初心者が心を一点に定めることを容易にする為である。（二つには）阿弥陀仏の（四十八の）本願が特に殊勝であるからである。（三つには）阿弥陀仏がこの娑婆世界の衆生と特に縁がある為である。要するに仏が衆生を済度し、衆生がその教えを受けるといふこの関係は、決して容易なことではないといふことである。難しいか容易か、浅いか深いかの鍵は全て縁によつて決定されるのである。

縁のある衆生に種々の教えと啓発を施す場合、恩徳おんとくが広く深い為、その衆生は先ず歡喜し、それにより信じるようになる。また宿世の善根にも感応する。更には魔障ましやうを調伏することができるようになる。最終的には見性し、仏となることが可能になるのである。諸仏はもともと衆生を濟度する為に、法身ほうしんより応化身おうげしんをとつてこの世に現れるのである。もともと下種げしゆ結縁けちえんの行いを絶えずなさっている為、世間においても出世間においても何れも不可思議なこととなつていのである。当經は、全ての經教において、最も尊く、最も嚴かで堂々たるものである。また、十方仏土のあらゆる道場において、仏は当經を特別に挙げて宣揚せんやうなさっている。(当經の教えは)六道輪廻の苦海に沁み渡り、(それによつて衆生は救われる。)(地獄に陥つた重罪の凡夫ですら真に信じ、切に願ひ念仏すれば、一氣に寂光淨土の仏

果を得ることができるといふ。）阿弥陀仏の大慈悲は、正に寂光浄土と契合一致するものである。故に十方諸仏は阿弥陀仏に感服し、当經の弘揚を謹んで承るのである。諸上善人（十方世界無量の菩薩も含む）は北極星を中心に群星が回るように、（阿弥陀仏の徳を慕い）その教えを受けるのである。

要解

当知仏種從緣起。緣即法界。一念一切念。一生一切生。一香一華。

一声一色。乃至受懺授記。摩頂垂手。十方三世。莫不遍融。故此増上緣因。名法界緣起。此正所謂遍緣法界者也。

（衆生の）仏性の種は縁に従つて起こるといふことをよく知っておくべきである。（縁はどこにあるのか？）尽虚空遍法界はその全てが即ち縁で

ある。(阿彌陀仏は法界の称号である為、阿彌陀仏を唱え、その心が一心であれば、仮に一念であつても法界全体に漏れることなく縁を結ぶことができるのである。) 故に「一念即一切念」(一念三千の意)であり、(極樂浄土に往生すれば、即ち十方世界全ての諸仏の浄土に往生することになり)「一生即一切生」なのである。一花一香、一声一色のような些細な事相から、或いは懺悔、摩頂授記、垂手のような重要な事相まで、ありとあらゆる事相は全て三世十方と余すところなく円融無碍であり、そうでないものはないのである。この一向専念は増上縁であり、この因がある為に法界と一体になることが可能になるのである。これが正に法界とくまなく縁を結ぶことの意味なのである。

要解

浅位人便可決志專求。深位人亦不必捨西方而別求華藏。若謂西方是權。華藏是實。西方小。華藏大者。全墮衆生遍計執情。以不達權實一体。大小無性故也。

浅位せんいの人（自力で生死の三界から出ることのできない人、又は見性していない人）は、決死の覚悟で専ら西方極樂浄土への往生を求めべきである。深位しんいの菩薩も西方浄土を捨て、（毘盧遮那びるしゃな如来の）華藏浄土を求めなければならない。（何故ならば、華藏浄土の歸結の場所が西方浄土だからである。）一方で、西方浄土は仮のもの「權ごん」であり、華藏浄土は究極的真理で、実である。西方浄土は小であり、華藏浄土は大であると謂われることがある。それは、全く衆生の遍計へんけい所執性しやくしやうしやう（妄想、分別、執着）に墮ちてしまった結果であり、權實ごんじつ一体、大も小も実体がないという法界実相（諸法実相）

に通達してない為である。

丁二・自問自答して経題を解釈

經 舍利弗。於汝意云何。何故名為一切諸佛所護念經。舍

利弗。若有善男子善女人。聞是經受持者。及聞諸佛名者。

是諸善男子善女人。皆為一切諸佛之所護念。皆得不退轉於

阿耨多羅三藐三菩提。是故舍利弗。汝等皆當信受我語。及

諸佛所說。

要解 此經独詮無上心要。諸佛名字。並詮無上円満究竟万徳。故聞者皆為

諸佛護念。又聞經受持。即執持名号。阿弥名号。諸佛所護念故。

当経は唯一、無上の心要しんよう、諸仏の名号、並びに無上の、円満且つ究極的な万徳について詳しく説き明かしたものである。（「心要」は即ち諸仏の名号で、諸仏の名号は即ち阿弥陀仏である。更に阿弥陀仏の名号には無上の、円満且つ究極的な万徳が具わっている。）故に当経を聞いた者は皆諸仏に護念されることとなる。また聞経受持もんきょうじとは、即ち執持名号のことである。阿弥陀仏の名号は諸仏に護念されるからである。

要解 問。但聞諸仏名。而未持経。亦得護念不退耶。

問い：諸仏の名号を聞くのみで、受持じゆじすることもせず、同じように諸仏に護念され、阿耨多羅三藐三菩提あおくたらさんみやくさんぼだいにおいて不退転を得ることは可能でしょうか？

要解 答。此義有局有通。占察謂雜乱垢心。雖誦我名而不為聞。以不能生決定信解。但獲世間善報。不得廣大深妙利益。若到一行三昧。則成广大微妙行心。名得相似無生法忍。乃為得聞十方仏名。

答え：これは狭義きょうぎと広義くわうぎの二種類に解釈することができる。『占察善悪業報經』によれば、雜乱且つ有垢うくの心で我名号を称えても、「聞く」という意味合いにはならない。心にまだ絶対の信解しんげが生じていないからである。世俗的善報せぞくてきを獲得することはできても、广大で深妙な御利益を得ることはできない。だがもし、一行三昧いちぎょうさんまいに到達したならば、广大で、微妙たる「行心」がはつきりと現れる。故に相似の無生法忍むしょうぼうにんの境地を証得している、と称されるのである。こうして初めて、十方の仏名を「聞く」ことになる、という真相を認めることとなるのである。

要解 此亦応爾。故須聞已執持至一心不乱。方為聞諸仏名。蒙諸仏護念。此局義也。

当經においても同じ道理である。故に当經を聞いたなら、阿弥陀仏の名号を一心不乱に執持しなければならぬ。一心不乱に至って初めて諸仏の名号を「聞く」こととなり、諸仏の護念を受けることになるからである。これが狭義の解釈である。

要解 通義者。諸仏慈悲。不可思議。名号功德。亦不可思議。故一聞仏名。不論有心無心。若信若否。皆成縁種。況仏度衆生。不簡怨親。恒無疲倦。苟聞仏名。仏必護念。又何疑焉。

(続いて) 広義の解釈について説明する。諸仏の慈悲は不可思議なものである。名号の功德も同じように不可思議である。故に仏名を聞いた者は、有心、無心を問わず、信じようと信じまいと、何れも阿弥陀仏と結縁することになり、成仏の種が衆生の心地に下されることになる。況して仏は衆生を済度するにあたり、怨親おんしんの区別なく平等に慈しみ、(極樂往生を願うものである。) しかもそれは恒久的であり、疲れなどを知らぬものなのである。従つて仏名を聞けば、必ずや仏に護念されることになるというのに、何故疑う必要があるだろうか？

要解

然抛金剛三論。根熟菩薩為仏護念。位在別地円住。蓋約自力。必入

同生性乃可護念。

然しながら（無著菩薩と天親菩薩が）『金剛般若波羅蜜經』に關して註釈を施された三部の論著によれば、熟根の菩薩が仏に護念される、とある。これは階位的には別教の初地以上と、円教の初住以上の菩薩のことを指している。つまり自力に頼る場合は必ず、「同生性」（見性の意）の位に入っていないければならない。そうして初めて仏に護念されることになるからである。

要解 今杖他力。故相似位即蒙護念。乃至相似位以還。亦皆有通護念之義。下至一聞仏名。於同体法性有資發力。亦得遠因終不退也。

今現在は、（当經において、阿弥陀仏の威神願力という）他力を頼りにしている為、「相似即」の位は既に仏の護念を受けている。又、「相似即」

の位に至っていない「觀行かんぎょう即そく」の位のものも皆、仏に護念ごねんされている。そればかりか、下は一度しか仏名を聞いたことのない者に至るまで、法性同体の為、發心ほっしんを助ける力を持ち、遠因を得ることもでき、最終的には不退轉の位を証得することが可能となるのである。

要解 阿耨多羅。此云無上。三藐三菩提。此云正等正覺。即大乘果覺也。

阿耨あのおく多た羅らとは、（梵語の音写であり）、漢訳で無上を指す。三藐さんみやく三さん菩ぼ提だいとは、漢訳で正等正覺を指す。即ち大乘円教の円満なる仏果のことである。

要解 円三不退。乃一生成仏異名。故勸身子等皆当信受。聞名功德如此。

釈迦及十方諸仏同所宣説。不可信乎。初勸信流通竟。

円満に（位行念の）三不退を証得するとは、正しく「一生成仏」の別名なのである。故に舍利弗や我々衆生に、信受しんじゆするようお勧めになっているのである。聞名の功德が既にこのように不可思議であり、況してや釈迦仏及び十方の諸仏は異口同音に本経を宣揚なさっているのである。どうして信じずにいられるだろうか？以上をもつて「流通分」の最初の勸信かんしんの部分を終了する。

丙二・勸願流通（人々に願いを勧めて、同経の信受奉行を行うよう導く）

經 舍利弗。若有人已發願。今發願。當發願。欲生阿彌陀
佛國者。是諸人等。皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。於
彼國土。若已生。若今生。若當生。是故舍利弗。諸善男子

善女人。ぜんにょにん。若有信者。にやくうしんじや。应当發願。おうとうほつがん。生彼国土。しようひこくど。

要解

已願已生。今願今生。当願当生。正願依信所發之願無虛也。非信不

能發願。非願信亦不生。故云若有信者。应当發願。又願者。信之券。行之樞。尤為要務。拳願則信行在其中。所以殷勤三勸也。

かつて發願したものは既に往生を成し遂げている。今發願するものは必ずや今世中に往生を達成するであろう。当来（必ず来るはずの世の意）發願するものは必ずや当来のいつかに往生するであろう。このことは、正しく信ずることにより發せられた誓願が、真実無虚であることをはつきりと示すものなのである。信じ切らなければ發願することはできない。願わなければ信じることも生まれない。故に世尊は、信じるものがいるのならば、極樂に生まれたいと心に願わなければならぬ、と御開示なさったのであ

る。また願うということは、信ずることの証あかしであり、篤行とつこうにおける枢しほでもあるので、特に重要である。世尊は「願掛け」を挙げることにより、即ち信も、行もその中に含まれるものであるということを表明したかったのである。それ故に三度に渡り、丁寧ていねいに発願をお勧めになったのである。

要解

復次願生彼国。即欣厭二門。厭離娑婆。与依苦集二諦所発二種弘誓
相応。欣求極樂。与依道滅二諦所発二種弘誓相応。故得不退轉於大菩提道。

又経文の中の「願生彼国」という表現は、即ち「厭離穢土」と「欣求淨土」の二門を意味するものである。（何故ならば、すべての仏、菩薩が修行の初めに必ず起す四つの願いで、総願ともいわれる四弘誓願しごせがんというものがあ）「厭離穢土」は、苦集二諦くじゅうにたいに依り発せられる四弘誓願中の、「す

べての衆生を悟らせよう」、「すべての煩惱を断とう」の二つに相應するものだからである。また、「欣求淨土」は、滅道めつどう二諦にたいに依り発せられる四弘誓願中の、「仏の教えをすべて学ぼう」、「無上の悟りに至ろう」の二つに相應するものだからである。故に、大いなる菩提道において不退転を得ることが可能となるのである。

要解

問。今発願但可云当生。何名今生。答。此亦二義。一約一期名今。

現生発願持名。臨終定生淨土。二約刹那名今。一念相應一念生。念念相應念念生。妙因妙果。不離一心。如称両頭。低昂時等。何俟娑婆報尽。方育珍池。只今信願持名。蓮萼光榮。金台影現。便非娑婆界内人矣。

問い：今発願するものは、当来のいつかに往生するであろうということ

に対しては理解できるのですが、何故今、生まれると表現するのですか？
答え：この中にも二つの意義が含まれている。一つは、「一期」(「今世中」
の意)のことを「今」という。現世において発願持名し、臨終の際必ずや
浄土に往生するのである。一つは刹那のことを「今」と言う。(究極的に
言うならば)「一念相応すれば一念に生まれる」、「念念相応すれば念念
に生まれる」ということである。妙因と妙果は一心を離れないものだから
である。このことは、天秤ばかりの両端のようもので、上がる時と下がる
時は常に同時である。(蓮の花も、同様に花が咲くと同時に実ができる、
いわゆる「花果同時」である為)何故娑婆の業報が尽きるまで待つて、そ
れから極樂の七宝の池に生まれ変わる必要があるか？今現在「信願持名」
しさえすれば、西方の蓮の花は光彩を放ち勢いよく伸び、金の蓮台に往生

してくるものの影（と氏名）が現れる。その瞬間から娑婆世界のものではなくなるのである。

要解 極円極頓。難議難思。唯有大智。方能諦信。

この法門は円満極まりなく、また頓教極まりないものであり、正しく言語道断（ここでは奥深い仏教の真理や究極の境地は言葉では言い表せないの意）、心行処滅なものなのである。唯一大智を持つものだけが、真に信ずることができるのである。

丙三・勸行流通（人々に願いを勧め、同経の信受奉行を行うよう導く）

丁一・諸仏一同贊嘆

丁二・教主贊嘆

丁一・諸仏一同贊嘆

經

舍利弗。如我今者。稱贊諸佛不可思議功德。彼諸佛

等。亦稱贊我不可思議功德。而作是言。釈迦牟尼佛能為甚

難稀有之事。能於娑婆国土五濁惡世。劫濁見濁煩惱濁衆

生濁命濁中。得阿耨多羅三藐三菩提。為諸衆生。說是一

切世間難信之法。

要解

諸佛功德智慧。雖皆平等。而施化則有難易。淨土成菩提易。濁世難。

為淨土衆生說法易。為濁世衆生難。為濁世衆生說漸法猶易。說頓法難。為濁世衆生說余頓法猶易。說淨土橫超頓法尤難。為濁世衆生說淨土橫超頓修

頓証妙觀。已自不易。說此無借劬勞修証。但持名号。徑登不退。奇特勝妙。超出思議第一方便。更為難中之難。故十方諸仏。無不推我釈迦偏為勇猛也。

諸仏の功德、智慧は皆平等である。しかし、衆生に教化を施すにあたり、その対象が違ふことによつて難易度は異なる。浄土において成仏しやすいことに対し、濁世だくせいではそれが困難である。浄土の衆生の為の説法はしやすいが、濁世の衆生に対してはそれが難しい。濁世の衆生の為に、漸教ぜんきょうを施すことは比較的容易であるが、頓教とんきょうは難しい。濁世の衆生の為に、頓教の中の禅、密を教えることはまだ容易だが、浄土の「横超おうちよう」の頓教となると、とりわけ難しい。また、濁世衆生の為に、浄土の「横超」の頓修頓証とんしゅうとんしやう、妙觀みょうかん（実相念仏・觀想念仏・觀像念仏の意）を説くことはかなり難しい。更に、この苦勞を重ね、修行し、その修行による証果を得る必要がなく、ただ執

持名号という近道を取るだけで、（位行念の）三不退の頂上にたどり着く、という奇特で、勝妙で、思議を超出している第一の方便法門を説くことは、「難中の難」である。故に十方諸仏は私、釈迦のことを高く評価しない人はいないし、皆私の勇猛ぶりを褒め称えているのである。

要解 劫濁者。濁法聚會之時。劫濁中。非帶業橫出之行。必不能度。

（続いて五濁悪世について説明する。まずは劫濁くわうじやくについて。劫は時代、濁は汚れの意。）劫濁とは、以下の四つの汚れが集まって、その汚れに満ちた悪い時代のことを指す。劫濁の中においては、業を持ったまま「横超」の念仏法門を修行しなければ、劫濁の世界を解脱できないことは必定である。

要解 見濁者。五利使。邪見增盛。謂身見。辺見。見取。戒取及諸邪見。

昏昧汨沒。故名為濁。見濁中。非不仮方便之行。必不能度。

(二つ目の汚れは見濁である。人間の心身を悩乱させ、成仏の正道を妨げる「五利使」と「五鈍使」と呼ばれる十種の煩惱がある。)見濁とは、その中の「五利使」を指し(即ち見惑のことである。)誤った見解が日々増盛することである。それは身見(身体を真我と見なすの意)、辺見(相對を真理と見なすの意)、見取見(真実の果報ではないのに固執するの意)、戒取見(真実の因ではないのに固執するの意)、諸邪見(その他、因果の真理を否定する、の意)などである。これらの誤った見解は真実を隠し、人の目を誤魔化す為、濁と呼ばれている。見濁の中においては、第一の方便法門を頼りに修行しなければ、見濁の世界を脱出できないことは必

定である。

要解 煩惱濁者。五鈍使。煩惑増盛。謂貪。瞋。痴。慢。疑。煩動惱乱。

故名爲濁。煩惱濁中。非即凡心是仏心之行。必不能度。

(三つ目は煩惱濁である。) 煩惱濁とは「五鈍使」を指し、(即ち思惑のことである。) 思惑が日々増盛するものである。それは貪り、怒り、愚痴、傲慢、疑い(ここでは念仏法門への疑いの意)などである。これらは心を煩わせ、心が動いたり頭が悩乱する為、濁と呼ばれる。煩惱濁の中においては、「凡心即仏心」たることを修行しなければ、煩惱濁の世界を出られないことは必定である。

要解 衆生濁者。見煩惱所感粗弊五陰和合。仮名衆生。色心並皆陋劣。故名為濁。衆生濁中。非欣厭之行。必不能度。

(四つ目は衆生濁である。) 衆生濁とは、見濁と煩惱濁が生んだ粗野で鄙陋な「五陰仮和合」の結果である。(色陰、受陰、想陰、行陰、識陰の五つが) 仮に和合したとしても、仮の名で「衆生」という。色心(物質と精神)ともに陋劣の為、濁と呼ばれている。衆生濁においては、「厭離穢土」と「欣求浄土」の二門を修行しなければ、衆生濁の世界を出られないことは必定である。

要解 命濁者。因果並劣。寿命短促。乃至不滿百歳。故名為濁。命濁中。非不費時劫。不勞勤苦之行。必不能度。

(五つ目は命濁みよじよくである。)命濁とは、因(見濁と煩惱濁の意)と果が共に劣る為、寿命が短くなる、ないし百歳に及ばないものである。故に濁と呼ばれる。命濁の中には、時間のかからない、勤苦の労を必要としない修行でなければ、命濁の世界を出られないことは必定である。

要解

復次只此信願。莊嚴一声阿弥陀仏。転劫濁為清浄海会。転見濁為無量光。転煩惱濁為常寂光。転衆生濁為蓮華化生。転命濁為無量寿。

ところが、ただこの「信願」が具足して、阿弥陀仏の名号を莊嚴に一声するだけで、劫濁を極楽清浄海会に、見濁を無量光に、煩惱濁を常寂光に、衆生濁を蓮華れんげ化生けしように、命濁を無量寿に変えることができるのである。

要解 故一声阿弥陀仏。即釈迦本師於五濁悪世。所得之阿耨多羅三藐三菩提法。

「阿弥陀仏」の一声は、正に釈迦本師がこの五濁悪世において、阿耨多羅三藐三菩提（成仏の意）を証得なさった方法なのである。

要解 今以此果覚全体授与濁悪衆生。乃諸仏所行境界。唯仏与仏能究尽。
非九界自力所能信解也。

今現在も釈迦本師は、自らが証得なさったこの「一生成就」という難信の法を、余すところなく五濁悪世の衆生のためにお説きになつてゐるのである。これは諸仏の所行の境地である為、「唯仏与仏乃能究尽」（ただ仏と仏のみが、あらゆる事物や現象や存在の、あるがままの真実の姿かた

ちを究めつくすことができるの意）と言われるものである。（等覚菩薩を含む）九界の衆生では、（仏力の加持が無ければ）自力のみで到底信解できるものではないのである。

要解 諸衆生。別指五濁悪人。一切世間。通指四土器世間。九界有情世間也。

（経文の中の）諸衆生とは、ここでは特別に五濁悪世の悪人を指す。一切世間とは、通常にいう四土の器世間のことで、九法界の有情衆生の世間を指すものである。

丁二・教主贊嘆

要解 前勸信流通。是諸仏付囑。此本師付囑。囑語略別從通。但云一切世

間。猶前諸仏所云汝等衆生。当知文殊迦葉等。皆在所囑也。

「流通分」におけるここまでの勸信かんしんの部分は諸仏が付囑ふしやくなされたものであり、後文は釈迦本師が付囑なされた言葉である。釈迦本師が付囑なされた対象は、特に五濁悪世の衆生ばかりではなく、一切世間を対象にしているのである。ここでいう「一切世間」は、前文にて諸仏が仰った「汝等衆生じゆじゆう」と同じであるが、ただ「汝等衆生」の中には、文殊菩薩と迦葉尊者等も、皆含まれていることを知っておくべきである。

經 舍利弗。当知我於五濁惡世。行此難事。得阿耨多羅三

藐三菩提。為一切世間說此難信之法。是為甚難。

要解

信願持名一行。不涉施為。円転五濁。唯信乃入。非思議所行境界。

設非本師來入惡世。示得菩提。以大智大悲。見此行此說此。衆生何由稟此也哉。

「信願持名」という修行法は、他の法門の補助を必要とすることなく、円満に五濁を変えることができる。この法門に対して疑いのない心しか悟入することはできない。思議することは所行の境界ではないのである。もし釈迦本師が、この五濁の惡世に生まれてこられなければ、もし円満なる菩提を得、成仏を示現なさらなければ、もし大智と大悲を以てこのありのままの事実を明確に見出し、自ら実行なさり、また衆生にその事実をお

説きにならなければ、衆生はどうやってこの法門を知り、執持するであろうか？

要解

然吾人处劫濁中。決定為時所困。為苦所逼。处見濁中。決定為邪智所纏。邪師所惑。处煩惱濁中。決定為貪欲所陷。悪業所整。处衆生濁中。決定安於臭穢而不能洞覚。甘於劣弱而不能奮飛。处命濁中。決定為無常所吞。石火電光。措手不及。

然しながら我々は、劫濁の中に置かれている時には決まって、時代に翻弄され、その苦に迫られる。見濁の中に置かれている時には決まって、邪智に縛られ、邪師に惑わされる。煩惱濁の中に置かれている時には決まって、貪欲に落ち、悪業に犯される。衆生濁の中に置かれている時には決ま

つて、臭穢しゆえの環境に安住し、それを洞察し悟ることなどできない。喜んで劣弱れつじやくな六道に甘んじ、奮飛ふんぴしてそこを脱出することなどできない。命濁の中に置かれている時には決まって、無常に飲み込まれ、寿命は電光石火でんこうせつかの如く短い。故に突然の死に迫られる際、その対応が間に合わないのである。

要解 若不深知其甚難。將謂更有別法可出五濁。燧焮宅裡。戲論紛然。

もし五濁悪世（六道輪廻）を出ることが甚だ至難であることを深く認識せず、無闇に別の方法があると勘違いしたとする。それは、焼けつつある火宅の中で危険を悟らず、ああでもないこうでもない、戯論紛然たる様相を続けるのと全く同じことなのである。

要解 唯深知其甚難。方肯死尽偷心。宝此一行。此本師所以極口說其難甚。而深囑我等当知也。初普勸竟。

唯一、五濁惡世を出ることは甚だ至難であると深く認識しているものだが、初めて何もかも捨て、この「信願持名」の一本を宝と見なし、執持することができるのである。これが正に、釈迦本師が極端に「甚難じんなんである」と仰った理由であり、再三にわたり我々に知っておくべきであると、言ってお聞かせになっているものなのである。以上をもって「流通分」の普勸ふかんの部分を終了する。

乙二・まとめ

經 仏説此經已。舍利弗。及諸比丘。一切世間天人阿修羅

等。聞仏所説。歡喜信受。作礼而去。

要解 法門不可思議。難信難知。無一人能發問者。仏智鑑機。知衆生成仏

縁熟。無問自説。令得四益。如時雨化。故歡喜信受也。

この法門は不可思議なものであり、信じ難く分かりづらく、一人として質問する者がいないほどである。仏はその円満なる智慧をもって時機を見極め、衆生の成仏の縁が熟したことを知ると、問われずとも自らお説きになるのである。(歡喜、生善、断悪、第一義といった)四つの御利益を獲得させようとなさっている。それは正に水が必要な時に雨が降るように、歡喜の気持ちから信じ受け入れるようになるのである。

要解 身心怡悦名歡喜。毫無疑惑名信。領納不忘名受。感大恩德。投身歸命。名作禮。依教修持。一往不退。名而去。

心身の喜びをもつて歡喜とし、一点の疑念もないことをもつて信とし、領納し、忘れないことを受とする。大いなる恩徳に感謝し、全身全靈で壽命が尽きるまで帰依することをもつて「作禮」となす。この教えに従い、修持し、前進あるのみで行くものとする。

智旭大師ちやくだいしの跋文はつぶん

經云。末法億億人修行。罕一得道。唯依念仏得度。嗚呼。今正是其時矣。捨此不思議法門。其何能淑。旭出家時。宗乘自負。藐視教典。妄謂持名。曲為中下。後因大病。發意西歸。復研妙宗円中二鈔。及雲棲疏鈔等書。始知念仏三昧。實無上寶王。方肯死心執持名号。万牛莫挽也。吾友去病。久事淨業。欲令此經大旨。辭不繁而炳著。請余為述要解。余欲普与法界有情同生極樂。理不可却。拳筆於丁亥九月二十有七。脱稿於十月初五。凡九日告成。所願一句一字。咸作資糧。一見一聞。同階不退。信疑皆植道種。贊謗等帰解脱。仰唯諸仏菩薩摂受証明。同学友人隨喜加被。西有道人瀉益智旭閣筆故跋。時年四十有九。

経は云う：「末法時期には大勢の人々が修行しているが、得道の人は稀である。唯一念仏するものだけが得度できるのである。」と。ああ！今が正にその末法の時期なのだ！この不可思議な法門を捨てて一体どうやって成就しようというのか？私が出家した頃は、禅宗を選び、自惚れ、他の經典を蔑視し、「信願持名」のこの法門を中だの、下だのと妄言を吐いていた。後に大病を患い、西方極樂浄土への往生を決意した。再び（四明知礼の）『観無量寿経疏妙宗鈔』と、（幽溪伝灯の）『阿弥陀経略解円中鈔』、そして雲棲株宏の『阿弥陀経疏鈔』等の著作を研鑽したことにより、ようやく念仏三昧が正に至高の宝であると知った。全てを捨てて執持名号のみに決めた。仮に何万頭の牛に引っ張られようとも、決して戻りはしない。私の友人の去病氏は、長い間念仏の浄業に従事なさっている方で、私に同

經の主旨を簡潔かつ明瞭に纏め、「要解」のような形で注釈して欲しい、と頼んできた。私も勿論遍く法界の有情衆生と一緒に極樂浄土へ行きたいので断る理由などなかった。筆を取ったのは、丁亥（一六四七年）九月二十七日で、脱稿したのは十月五日である。全てを九日間で成し遂げた。願うこととしては、一字一句が全て極樂浄土へ往生する為の糧になるように、一見一聞が一同に不退転を証得できるように。信ずる者も信じないものも成仏の種が植えられて、仏を称えるものも誹謗する者も等しく解脱できるように。諸仏菩薩に撰受しやうじゆ及び証明をしていただけるよう、同参には、随喜ずいきの心でご加護いただけるようお願い申し上げる。西有道人・蕩益智旭はこれを持って跋文として筆を置く。年は四十九歳である。

著者紹介・蕩益智旭

一五九九年生まれ、一六五五年入滅。明代四高僧の一人。名は智旭。字は蕩益。号、西有。江蘇省吳県木渚の出身。姓は鍾。父母とも四十歳の年に、父が『大悲咒』だいひしゅうを十年間誦持したのち、子授け観音の夢を見て子を得た。幼い頃から母の影響を受け礼仏読経し、素食をするようになる。

七歳から儒学を修め、釈迦と老子を誹謗。十七歳の時、雲棲大師の『自知録』序及び『竹窗隨筆』を読んだことがきっかけで、過去の過ちを心から懺悔し、大乘の弘揚を誓った。以後雲棲大師に対して私淑し、学問に励む日々が続いた。二十二歳の時より念仏に専念する心を決め、二十四歳に出家。一宗一派に属することをよしとせず、その思想的関心は多方面にわたって

た。天台、華嚴、唯識、禪、念仏、律に及び、しかもこれらに儒教、道教を加えて、内外一切の教えが対立、排斥しあうものではないという見解にたつ。すべてが調和し、融会すると主張。四十九歳の時、『仏説阿弥陀經要解』を著作した。

一六五五年の正月、病に伏せる。手で西方を指し、結跏趺坐けっかふざし念仏して入滅した。弟子たちは師の遺体を仏龕ぶつがんに安置し、遺言通り三年後に遺体を荼毗たびに付そうとした。仏龕を開けた時、大師は巍然として結跏趺坐のまま、面貌は生前同様で髪の毛は耳を覆うぐらいにまで伸びていた。火葬された後も齒はそのままで焼けることはなかった。師の遺言には遺灰を粉に混ぜ、団子を作り、水族及び鳥類へ供養するようにとあったが、弟子たちはその遺言に従わず、靈峰の本殿の右に塔を作り、大師を偲んだ。『閻藏知津』四十八卷な

ど、一生における著書は多い。古今希に見る存在であった。後世において浄土第九祖として尊ばれている。

付録一

印光いんこう大師から見た蕩益大師と要解について

※蕩益大師は久しく法身を証得し、乘願により再来した者である。大師の学問、見地、行持、そして道徳は末法において稀にしか見ることができないばかりではなく、仏法が盛んであった聖賢せいけん輩出はいしゅつの隋唐の時代に遡っても、ずば抜けて不可思議な大士として数えられるであろう。大師の全ての著述は契理と契機である。従って貴殿が文面の文字に固執し、それを「是」と

する心を放下し、雑念を排して一心不乱に深く掘り下げて研究し、体得すれば、その法喜の喜びは自分の心でしか味わえないし、他人に言うことのできないのである。なぜならば、所得と思っていたものは皆失われ、無所得に回帰するからである。

『印光法師文鈔』三編卷一 丁てい福宝居士に宛てた手紙その五より

※ 蕩益大師は久しく法身を証得し、乘願により再来した者である。少年時代は仏法を信じず誹謗していたが、以後如来の使者として変身された。その一生において行解ぎょうげ相應そうおう、事理円融であった。

『増広印光法師文鈔』卷三 『贊礼地藏菩薩懺願儀』重刻序より

※ 蕩益大師の『弥陀要解』は事、理ともに計り知れない境地に達しており、当經の為の注釈がなされて以来、第一と言える存在であろう。従ってこの要解を確かな拠り所とすべきであり、実行すれば将来必ずや往生する際の品位は高く、皆は閣下と肩を並べることなどできないのである。

『増広印光法師文鈔』卷一 濮大凡居士に宛てた手紙より

※ … 靈峰祖師の著述は千古希少のものである。貴殿たちは法眼が開かれていない為に、その法要を知ることができない。故にいつも「吠影吠声はいえいせい」のように、他人の言うことを受け売りし、初学者を困惑させるのである。もし真の正知、正見を具足するものがそれを読めば、きっと祖師の気持ちに徹底的

に分かるに違いない。靈峰祖師は末法において極めて希な存在であった。師の教えは事、理ともに具足しており、そこから得られる御利益は計り知れないほどある。正にそれぞれの人によって得られる御利益は異なるのである。

『増広印光法師文鈔』卷二 弘こういち一法師に宛てた手紙より

※ 弥陀要解という本は、蕩益祖師の最も精妙を極めた註釈である。仏が当經をお説きになって以来、注釈の中では一番と言えるであろう。仮に古仏がこの世に再び現れ、広長舌相を呈し、再び当經の為に注釈を作るとしても、当要解を超越することはできない。

『増広印光法師文鈔』卷一 永嘉某居士に宛てた手紙その二より

※もし阿彌陀經を研究するのであれば、蕩益大師が註釈なされた『要解』をお薦めする。当『要解』は事、理ともに計り知れない境地に達しており、仏が当經をお説きになって以来、第一の注釈と言えよう。妙なること極まりなく、的確なること極まりないものである。仮に古仏が再びこの世に現れ、再び当經の為に注釈を作るとしても、当要解を上回ることとはできない。従って当『要解』を軽く見ず、真面目に信受すべきなのである。

『増広印光法師文鈔』卷一 徐福賢じよふくけん女史に宛てた手紙より

印光大師について

釈印光、一八六一年生まれ、一九四〇年入滅。法名、聖量。字、印光。

自称、常慚愧僧。俗姓、趙。名、丹桂、字は紹伊。陝西省郃陽県出身。法師が唱えた「敦倫尽分、閑邪存誠、諸惡莫作、衆善奉行、真為生死、發菩提心、以深信願、持仏名号」の理念は、修行の基本と位置付けられている。後世においては浄土第十三祖として尊ばれている。法師は「大勢至菩薩の化身」であると言いつたに伝えられている。その出処は『印光大師永思集』にある。以下においてその原文を翻訳する。

その一 紀夢悼印光大師

私は十八歳の時、上海女子中学に通っていた。同級生に張孝絹こうけんという子がおり、私の親友となった。彼女の家は西門路潤安里にあった。孝絹のお母さんは私のことを実の娘と同じように、たいへん可愛がってくれたので、私も孝絹と同様に張おばさんのことを「お母さん」と呼んでいた。放課後いつも孝絹のお家に行き、食事も寝泊りも一緒で、それが習慣となっていた。

一九三六年十一月二十三日の夜、私は張家に泊まり、孝絹と同じベットで寝ていた。夜中に観音菩薩の夢を見た。遠くに見える小島に観音大士が立っていていらっしやった。周りは全て海で、水天一碧であった。大士は身長一丈余り、瓔珞莊嚴で手に浄瓶をお持ちになり、絵に書かれているのと同じであっ

た。私は小船に乗って島に近づこうとした。大士は手を振って私にこう告げられた。「大勢至菩薩は現在、上海で衆生を教化しているのに、そなたは何故、教えを聞きに行こうとしない？」と。私は黙ったままであった。大士はまたこうも仰った。「印光和尚は大勢至菩薩の化身で、四年後に化縁が尽きるのだ。」と。そう仰ると姿を消された。その時、突然天にまで溢れんばかりの大波が立ち、小舟が転覆しそうになった。私は大声で叫んだ。すると孝絹の声が聞こえてきた。「起きて！悪い夢でも見たのっ！？」と。私は夢の中の出来事を彼女に話し、二人で笑った。

翌朝、昨夜の夢のことを張おばさんにも告げ、こう質問した。「大勢至菩薩？和尚印光って？ご存知ですか？」と。おばさんはかねてより仏を信じており、驚いてこう答えた。「大勢至は西方極楽浄土の菩薩の名前よ。印光和

尚は、昔孝絹のお父さんから聞いたことがあるわ。確か普陀山ふだざんの得道の高僧と言っていたわね」。

私は更に質問した。「その印光和尚はいま上海にいらっしやるのですか?」。おばさんは「わからないわ。」と言った。私は放っておくことができなかつた。翌日、『申報』を広げた時に『丙子護国息災法会の通告』が目に入った。上海の人々は印光法師に上海においていただき、覺園寺で法会が行われていることを知った。なんて不可思議なことだろう!三人とも驚きが止まらなかつた。三人で一緒に覺園寺へ向かうことにした。そこで初めて印光大師に拝謁することができ、説法を聞くことができて、三人とも三宝に帰依した。私に授けられた法名は「慧芬えぶん」、張おばさんは「慧範えはん」、そして孝絹は「慧英えい」だった。残念なことに、私はあまりにも業が深く、せつかくの

機会であったのに、更に精進することはできなかつた。今は毎日子育てに追われる日々で、殆ど修行をしていない。

昨日蘇州の友人から便りが来て、印光大師が靈岩山で既に結跏趺坐したまままで入滅を果たされた、と知らされた。ああ、大師がお亡くなりになった。化縁は四年で尽きる。これは夢の中の内容と一致していた。私は大師とは短い縁であったが、大師を偲ばなければならぬと思ひ、涙をこぼしながらやっとこの文章を書き上げた。大師への哀悼の意と、自分が頑張らなければならぬという励みにもなっている。文章は上海の『覺有情半月刊』へ寄稿し、発表する予定である。最後に南無大勢至菩薩！

一九四〇年十二月七日 楊 信芳 記

『印光大師永思集・紀夢悼印光大師』より

その二 施戒園居士に宛てた手紙

戒園先生へ

拝啓、ご無沙汰しております。お元気ですか？昨日は蘇州にいる妹の雪筠より手紙をもらい、印光大師が入滅なさったことを告げられました。手紙には、上海の『覺有情半月刊』が大師を偲ぶ為の専刊を企画しており、芳姉さんは大師とご縁があるので、一筆したためて貰えたら、観音大士の御開示の悲心に添うことができるのではないかと、書いてありました。私は妹に言われた通りに『紀夢悼印光大師』を書きました。大変申し訳ありませんが、この原稿を送りますので、慕爾鳴路一一一弄六号の『覺有情』刊社へ持って行っていただければ助かります。

ああ、大師は今、西方極樂浄土へお戻りになり、常寂光土にいらつしやるので、恐らくは私のお節介を許していただけるかと思えます！一九三七年の春、私は大師のいらつしやる蘇州へ行き、大師に拝謁致しました。自分が見た夢の中のことを大師に報告致しました。（上海覺園寺の時は人が多かつた為、話す機会がなかつたのです。）すると、大師は私のことを厳しく叱責され、こう仰つたのです。「でたらめを言つてはならぬ！でたらめを言つてはならぬ！凡人が聖人ぶつたりなど！誹謗ひぼう中傷ちゆうしやうを招くことになる。この夢のことは絶対に人に言つてはならぬぞ！約束を守れなければ私の弟子ではない！」と。従つて以後私は師の教戒を守り、この夢のことを公に人へ告げることをしませんでした。仮に戒園先生の前でも私は告げようとはしませんでした。今この件を知っているのは家族と親友を含め僅か二、三人です。実を

言うと私には内心密かに確かめようとしたことがあります。それは、印光大師がこの世を四年後に去られたら、乘願により再来した大勢至菩薩であるに違いないということです。今年でちょうど四年になります。案の定、大師は結跏趺坐したままで入滅を果たされました。訃報を聞いて、涙が止まりませんでした。私は自分の善根が浅薄であることが悔しかったのです。何故、絶好の機会を目の前で逃してしまったのでしょうか！疑うということが学道における障害であることを知ったのです。今やっと信じるようになり、戒園先生のお言葉も信じるようになったのです。私は自分が犯した過ちを懺悔します！私が悪かったのです！話は変わりますが、淑雲は既に無錫に戻りました。彼女の家は数日前に泥棒に入られ、被害が大きかったようです。先生はこの件を知って、きつと残念がられるでしょう。私は最近、朝の日課で『華嚴経』の「離垢地」と「淨

行品』の二つを、夜の日課で『普賢行願品』と『阿弥陀仏経』の二つを読んで
います。更に朝晩はそれぞれ阿弥陀仏の名号を千回ずつ唱えています。回向文
は慈雲懺主じうんざんしゅの『一心帰命文』を用いています。子供たちがいる為、心を集中す
るのはなかなか難しいのが現状です。先生、私にいい方法を教えていただけせ
んか？主人は私の影響を受け、仏を信じるようになっていきます。先生が私のお
じに会われた際、主人のことを報告して頂ければと思います。先生に頼まれた
阿七さんの布は原因が分かりませんが、まだ届いておりませんのでお知らせし
ておきます。最後に皆様のご健康とご安寧をお祈りいたします。

敬具

信芳 より

一九四〇年十二月八日

『印光大師永思集』より

付録二

阿彌陀仏の四十八願

『佛說大乘無量壽莊嚴清淨平等覺經』(會集本) 夏蓮居居士編集より 引用

※我若証得無上菩提。成正覺已。所居仏刹。具足無量不可思議。功德莊嚴。無有地獄。餓鬼。禽獸。蜎飛蠕動之類。所有一切衆生。以及焰摩羅界。三惡道中。來生我刹。受我法化。悉成阿耨多羅三藐三菩提。不復更墮惡趣。得是願。乃作仏。不得是願。不取無上正覺。

若し私が無上菩提を証得し、正覺を成就したら、私の仏刹に無量の不可思議、功德莊嚴が具足する。地獄、餓鬼、畜生、蜎飛蠕動などは存在しない。ありとあらゆる一切衆生及び閻摩羅界、三惡道のものが私の仏刹に往

生しに来て、私の教化を受けたら、悉皆阿耨多羅三藐三菩提を成就することが出来る。再び悪趣に陥ることはない。この願いが叶えば、仏になる。叶うことができなければ、無上正覚を得ることはしない。

1. 無三惡趣の願

2. 不更惡趣の願

※ 我作仏時。十方世界。所有衆生。令生我刹。皆具紫磨真金色身。三十二種大丈夫相。端正淨潔。悉同一類。若形貌差別。有好醜者。不取正覺。

私が仏となった時、十方世界、凡ゆる衆生を私の仏刹に往生させる。皆が紫磨金に輝く色身になり、三十二大丈夫相を具え、端正淨潔で、なにもかも全てが同じである。もし形貌が同じではなく、美醜の差があるなら

ば、正覺を得ることはしない。

3. 悉皆金色の願

4. 三十二相の願

5. 無有好醜の願

※ 我作仏時。所有衆生。生我國者。自知無量劫時宿命。所作善惡。皆能洞視徹聽。知十方去來現在之事。不得是願。不取正覺。

私が仏となった時、凡ゆる衆生、私の国に往生してきたものは自らが無量劫時の宿命を知り、所作の善惡を全て洞觀し透聽することができる。十方世界の過去、未来、現在のことを知り、見通すことができる。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

6. 令識宿命の願りようしきしゆくみよう

7. 令得天眼の願りようとくてんげん

8. 天耳遙聞の願てんにようもん

※我作仏時。所有衆生。生我國者。皆得他心智通。若不悉知億那由他百千
仏刹。衆生心念者。不取正覚。

私が仏となった時、凡ゆる衆生、私の国に往生してきたものは皆他心通
力を獲得することができ。億那由他ある百千仏刹の衆生の心の中を全て
知り尽くすことができなければ、正覚を得ることはしない。

9. 他心悉知の願たしんしつち

※ 我作仏時。所有衆生。生我國者。皆得神通自在。波羅密多。於一念頃。不能超過億那由他百千仏刹。周遍巡歴。供養諸仏者。不取正覺。

私が仏となつた時、凡ゆる衆生、私の国に往生してきたものは皆神通自在、波羅密多を得ることができる。一念の間に億那由他ある百千仏刹を満遍なく巡礼し、諸仏方を供養することができなければ、正覺を得ることはしない。

10. 神足如意の願

11. 供養諸仏の願

※ 我作仏時。所有衆生。生我國者。遠離分別。諸根寂靜。若不決定成等正覺。証大涅槃者。不取正覺。

私が仏となった時、凡ゆる衆生、私の国に往生してきたものは分別心を遠離し、諸根は静寂である。決定して等正覚を成就し、大涅槃を証得することができなければ、正覚を得ることはしない。

12. 定成正覚の願

※ 我作仏時。光明無量。普照十方。絶勝諸仏。勝於日月之明。千万億倍。若有衆生。见我光明。照触其身。莫不安樂。慈心作善。来生我国。若不爾者。不取正覚。

私が仏となった時、光明は無量で、その光明は遍く十方世界を照らし、他方諸仏のそれに比べて絶勝の位置にある。日月の光明よりも千万億倍ほど勝れている。若し衆生がおり、私の光明を見て、其の身を照触されるも

ので身心安樂でないものはなく、慈心作善でないものはなく、我が国土に往生しに來ないものはいない。もしその通りにならなければ、正覺を得ることはしない。

13. 光明無量の願

14. 觸光安樂の願

※ 我作仏時。壽命無量。國中声聞天人無數。壽命亦皆無量。仮令三千大千世界衆生。悉成緣覺。於百千劫。悉共計校。若能知其量數者。不取正覺。

私が仏となった時、壽命は無量である。國中の声聞や天人の数は無数であり、その壽命も皆無量である。たとえ三千大千世界の衆生皆が緣覺になり、百千劫の時間をかけて協力し合い、計算し、その数を知ることが出来

るようなら、私は正覚を得ることはしない。

15. 壽命無量の願

16. 声聞無数の願

※ 我作仏時。十方世界無量刹中。無数諸仏。若不共称歎我名。説我功德国土之善者。不取正覚。

私が仏となった時、十方世界無量刹土の中においてになる無数の諸仏方皆が私の名を賛嘆せず、私の功德と国土の善を褒め称えないようならば、私は正覚を得ることはしない。

17. 諸仏賛嘆の願

※ 我作仏時。十方衆生。聞我名号。至心信樂。所有善根。心心回向。願生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。

私が仏となった時、十方衆生は私の名号を聞いて、至心に信樂し、至心に全ての善根を願生我國へ回向する。乃至十念であつても。もし往生することができなければ、私は正覺を得ることはしない。ただ五逆罪を犯したのみではなく、尚且つ正法を誹謗するものを除く。

18. 十念必生の願

※ 我作仏時。十方衆生。聞我名号。發菩提心。修諸功德。奉行六波羅蜜。堅固不退。復以善根回向。願生我國。一心念我。晝夜不斷。臨壽終時。我与諸菩薩衆迎現其前。經須臾間。即生我刹。作阿惟越致菩薩。不得是願。

不取正覚。

私が仏となった時、十方衆生は私の名号を聞いて、菩提心を起こし、諸功徳を修め、六波羅蜜を奉行し、堅固で不退転になる。また善根を以て「願生我国」へ回向する。「一心念我、昼夜不斷」であれば、臨終の際に私と諸菩薩聖衆がその人の前に現れ迎接する。須臾の間に我が刹土に往生でき、阿惟越致の菩薩になる。この願いを叶えることができなければ、正覚を得ることはしない。

19. 聞名発心の願

20. 臨終迎接の願

※ 我作仏時。十方衆生。聞我名号。繫念我国。発菩提心。堅固不退。植衆

徳本。至心回向。欲生極樂。無不遂者。若有宿惡。聞我名字。即自悔過。為道作善。便持經戒。願生我刹。命終不復更三惡道。即生我國。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、十方衆生は私の名号を聞いて、心を我が仏刹に集中し、菩提心を起こし、堅固不退になる。衆の徳本を植え、至心に欲生極樂へ回向する。願いが叶わないものはない。もし宿悪があり、私の名号を聞き、直ちに悔過し、善をなし、經戒を保ち続け、我が仏刹へ往生を願えば、命終後、三惡道に墮ちることなく、我が国へ即生することができる。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

21. 悔過得生の願

※ 我作仏時。国無婦女。若有女人。聞我名字。得清淨信。發菩提心。厭患女身。願生我国。命終即化男子。来我刹土。十方世界諸衆生類。生我国者。皆於七宝池蓮華中化生。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、国に女性は存在しない。もし女性がおり、私の名号を聞き、清淨の信を得、菩提心を起こし、女性の身を厭い嫌い、我が国へ往生を願えば、命終後、直ちに男性の身に化け我が刹土へ来る。十方世界の諸衆生類で我が国へ往生しに来るものは、皆七宝池蓮華の中において化生する。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

22. 国無女人の願

23. 転女成男の願

24. 蓮華化生の願

※ 我作仏時。十方衆生。聞我名字。歡喜信樂。礼拝歸命。以清淨心。修菩薩行。諸天世人。莫不致敬。若聞我名。壽終之後。生尊貴家。諸根無缺。常修殊勝梵行。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、十方衆生は私の名号を聞いて、歡喜信樂し、礼拝し、歸命きみやうし、清淨な心を以て菩薩行を修める。諸天世人しよてんせいじんで、私のことを敬わないものはいない。もし私の名号を聞いたなら、壽終の後、尊貴の家に生まれ変わり、諸根は無缺であり、常に殊勝なる梵行を修めるものである。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

25. 諸天礼敬の願しよてんらいきやう

26. 聞名得福の願もんみやうとくふく

27. 修殊勝行の願しゆしゆしやうきやう

※ 我作仏時。國中無不善名。所有衆生。生我國者。皆同一心。住於定聚。永離熱惱。心得清涼。所受快樂。猶如漏尽比丘。若起想念。貪計身者。不取正覺。

私が仏となつた時、国に不善の名は存在しない。凡ゆる衆生、我が国へ往生してきたものは皆同じ一心で定聚じやうじゆに住し、熱惱ねつのうから永遠に離れ、心に清涼を得る。皆の受ける楽しみは漏尽ろうじん比丘びくのそれと同じである。もし想念を起こして、身を貪計とんげするようなものが存在すれば、私は正覺を得ることはしない。

28. 国こく無む不善ぜんの願

29. 住じゆ正じやう定じやう聚じゆの願

30. 樂如漏尽の願

31. 不貪計身の願

※ 我作仏時。生我國者。善根無量。皆得金剛那羅延身。堅固之力。身頂皆有光明照耀。成就一切智慧。獲得無辺弁才。善談諸法秘要。説經行道。語如鐘聲。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、私の国に往生してきたものは善根無量になる。皆、金剛那羅延の身を得、堅固な力を有する。身、頭頂ともに光明の照耀があり、一切の智慧を成就し、無辺の弁才を得る。諸法の秘要を自由に説くことができ、説經行道、声は鐘聲の如くである。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

32. 那羅延身の願

33. 光明慧弁の願

34. 善談法要の願

※ 我作仏時。所有衆生。生我國者。究竟必至一生補処。除其本願。為衆生故。被弘誓鎧。教化一切有情。皆發信心。修菩提行。行普賢道。雖生他方世界。永離惡趣。或樂說法。或樂聽法。或現神足。隨意修習。無不円満。若不爾者。不取正覺。

私が仏となった時、凡ゆる衆生、我が国へ往生してきたものは究竟して必ず一生補処に至るようにする。但し、其の本願を發する者を除く。その

者達は衆生の為に弘誓の鎧を被り、一切の有情を教化し、皆に信心を發させ、菩提行を修めさせ、普賢の修行の道を行わせるものとする。その者達は他方世界に生まれ変わっても永遠に悪趣を離れるようにする。その者達は説法を楽しんだり、聴法を楽しんだり、機に応じて自在に神通力を現したり、随意、学び収め、円満でないものはない。この願いを叶えることができなければ、正覺を得ることはしない。

35. 一生補処の願

36. 教化随意の願

※ 我作仏時。生我國者。所須飲食。衣服。種種供具。随意即至。無不滿願。

十方諸仏。応念受其供養。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、私の国に往生してきたものが其の所須しよしゆの飲食、衣服、そして種々の供具を欲しいと思えば、思いのままにすぐ現れ、願いが叶わないものはない。十方諸仏は衆生の供養の念に應じて顕現する。この願いを叶えることができなければ、正覚を得ることはしない。

37. 衣食随念いしょくずいねんの願

38. 応念受供おうねんじゆきやうの願

※ 我作仏時。國中万物。嚴淨。光麗。形色殊特。窮微極妙。無能称量。其諸衆生。雖具天眼。有能辨其形色。光相。名数。及總宣說者。不取正覚。

私が仏となつた時、國中の万物は嚴淨光麗げんじやうこうれいにして形色殊特、且つ窮微きゆうゐ極妙きよくみやうであり、よく称量しやうりやうすることなどできないものである。その諸々の衆生

に天眼が具わっているにも関わらず、その形、色、光相、名称そして数を
辨別でき、またそのありさまを明らかに知り尽せるものが存在するならば、
私は正覚を得ることはしない。

39. 莊嚴無尽の願

※ 我作仏時。國中無量色樹。高或百千由旬。道場樹高。四百里。諸菩薩
中。雖有善根劣者。亦能了知。欲見諸仏淨國莊嚴。悉於宝樹間見。猶如明
鏡。睹其面像。若不爾者。不取正覚。

私が仏となった時、国中の色樹は無量である。その高さは百由旬のもの
もあれば千由旬のものもある。道場の樹の高さは四百里上る。諸菩薩の
中に善根が劣るものもいて、それらのことを明瞭に知ることが出来る。

諸仏の莊嚴なる浄土を見たいと思えば、いつでも願い通りに明鏡に顔を映すように、宝樹ほうじゆの中にそれらをすべて照らし出してはつきりと見ることができる。この願いを叶えることができなければ、正覚を得ることはしない。

40. 無量むりやういろ色樹しきの願

41. 樹現じゆげん仏刹ぶつさつの願

※ 我作仏時。所居仏刹。広博嚴淨。光瑩如鏡。徹照十方無量無数。不可思議諸仏世界。衆生睹者。生希有心。若不爾者。不取正覺。

私が仏となった時、居住する仏刹は広博、莊嚴、清淨、光明、晶瑩しやうえいである。その光と透き通ることは鏡の如くである。十方無量無数の不可思議な諸仏の世界を徹照することができる。衆生、見聞きするものには希有の心

が生まれる。この願いを叶えることができなければ、正覚を得ることはしない。

42. 徹照十方の願

※ 我作仏時。下從地際。上至虛空。宮殿樓觀。池流華樹。国土所有一切万物。皆以無量宝香合成。其香普薰十方世界。衆生聞者。皆修仏行。若不爾者。不取正覚。

私が仏となった時、大地から虚空まで宮殿、樓觀、池、流水、美しき花、樹など国土の凡ゆる一切の万物は皆無量の宝と香りできており、その香りは遍く十方世界に広がり、これを嗅いだ衆生は皆仏道に励む。この願いを叶えることができなければ、正覚を得ることはしない。

43. 宝香普薰の願

※我作仏時。十方仏刹諸菩薩衆。聞我名已。皆悉速得清淨。解脱。普等三昧。諸深總持。住三摩地。至於成仏。定中常供無量無辺一切諸仏。不失定意。若不爾者。不取正覺。

私が仏となつた時、十方仏刹の諸菩薩衆は私の名号を聞き、皆漏れることなく清淨、解脱、普等三昧、諸深總持、三摩地に住し、成仏に至るといつた御利益を得ることができ、定中において常に無量無辺の一切の諸仏を供養することができ、定意を失うことがない。この願いを叶えることができるかなければ、正覺を得ることはしない。

44. 普等三昧の願

45. 定中供仏の願

※ 我作仏時。他方世界諸菩薩衆。聞我名者。証離生法。獲陀羅尼。清淨歡喜。得平等住。修菩薩行。具足徳本。応時不獲一二三忍。於諸仏法。不能現証不退転者。不取正覚。

私が仏となつた時、他方世界の諸菩薩衆は私の名号を聞き、離生法忍を証得し、陀羅尼を獲得し、清淨、歡喜し、平等心に住することを得、菩薩行を修め、徳本を具足する。直ちに初忍、第二、第三忍に至ることができず、諸仏法において、不退転の位を現証することができなければ、私は正

覺を得ることはしない。

46. 獲陀羅尼の願

47. 聞名得忍の願

48. 現証不退の願

後書き

翻訳についての説明

当翻訳書は、中国の明朝末期に蕩益大師が書き記した『仏説阿弥陀経要解』をもとに、日本語に翻訳したものです。蕩益大師は、天台宗、禪宗、律宗及び儒家の思想に精通しており、各宗の真髓を上手く融合し取り入れ、「信願行」の三つの条件を筋道として、『仏説阿弥陀経』に対し、一つの円満な分析及び解釈をしたと言えます。

更に、「信願行」の具体的なものとして、六信（信自、信他、信因、信果、信事、信理）、二願（厭離娑婆、欣求極樂）及び一行（持名念仏）を明確に指し示しました。これは、西方極樂浄土の思想に対し、全面的かつ透徹

して説明したものです。

本書の翻訳は原文の順序に従っており、漢文もそのまま記載しておりますので、読者の方々がそれに照らし合わせて閲読できるようになっております。

古来より、『仏説阿弥陀経』（姚秦鳩摩羅什訳）は、これまでずっと浄土の經典において第一とされてきました。本経は、釈迦牟尼仏が問われずとも自らすすんで仰ったもので、簡潔かつ要領を得たものであり、わかり易く、単刀直入に言われたものです。

更には、「信願行」の三つの条件を以て、ありとあらゆる一切の根機の縁ある衆生を導き、極楽浄土へと往生できるように、一生で成仏できるように、とするものです。三つの条件は浄土法門の基礎であり、浄土の法の

要です。古今東西を通じて、およそ極楽浄土を広めようとする者で、「信願行」を以て浄土の法門を開ける鍵としないものなどいないのです。

仏陀の教えは、完全に時空を越えるものであり、亘古弥新（成語。時間が経って古くなればなるほど、その価値が増していく、の意）の教育です。私達は微力を尽くし、この仏陀の教えをより多くのご縁のある日本の仁徳者の方々に広めていく所存です。更に私達は日本のご縁のある方々と互いに学び、この仏陀の教えを広める事業を続け、共に更なる素晴らしい幸せな未来を創り上げる為に、精一杯努力する所存です。

当翻訳書は善美を極めたものではないかもしれませんが、一字一句その全て、皆様により一層の増上の縁が結ばれる事を願っているものです。もしもこの『仏説阿彌陀經要解』が、日本のご縁のある方々のお役に立つの

でしたら、これに勝る喜びはありません。

最後にこの場を借りて、本書の翻訳に携わって下さった西歸子様、藤本様、如願様、他の皆様、及び本書の出版を手助けして下さいました皆様、ご縁のある方々に感謝申し上げます。皆様方が、この弥陀浄土の為に基礎を築いて下さった善行に感謝申し上げます。皆で自利利他、自他不二の気持ちを以て共に清らかな極楽浄土へ参りましょう！

台湾NPO法人 西有学会 敬具

二〇一七年九月二十八日

著作権について

本書はクリエイティブ・コモンズの台湾バージョン三・〇「氏名表示、非営利性、添削の禁止」一条文を採用しております。この原則に則り、販売することを禁止しておりますが、ご縁の有る方には贈呈しております。

本書の増刷にご興味のある方は、西有学会の規定した方法で引用の出所を明示した上、流通及び頒布することは歓迎致します。ただし、販売及び転売など一切の商業行為及び内容に関する添削はお断り致します。

本書出版へご協力いただいた方々、本書をご愛読下さる方々、本書を通じてご縁を得られる皆様方に送る（同向の）言葉です。

この功德を以って
現世の業を消せるよう願います。

諸々の福と智慧を増やすことで

善の根が育つよう願います。

全ての争い、偏執、飢饉等の災厄は皆悉く消滅するよう願います。

各々、礼節と譲り合いの精神を学び、

本書を手にする方のために読経致しましょう。

本書に現世で触れたご縁に恵まれた方とこの家族には安業が訪れ

先に逝かれた方にも成仏が訪れましょう。

雨風は（荒れることなく）常におだやかなる調べをもたらし

人々は（昔）悉く安らかでいられるでしょう。

法界は善く良識を有しています。

共に無上の仏道を証得致しましょう。



<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/tw/>

This book is for free distribution. It is not for sale. Printed in Taiwan.

◎ 仏説阿弥陀経要解

著者 清・西有沙門薄益智旭

翻訳者 台湾 NPO 法人西有学会

発行者 台湾 NPO 法人西有学会

地址 台湾台中市西屯区台湾大道二段 910 号 8F-7

電話番号 +886-4-23126366

ファックス番号 +886-4-23125600

E-mail: amtb@seiyuu.org.tw

www.seiyuu.org.tw

◎ 本書はご縁のある方に無料で贈呈致します。販売及び転売などの商業行為は一切お断り致します。

◎ 増刷は歓迎致します（内容の添削はご容赦下さいますよう宜しくお願い申し上げます）。本書を広めていきますことは、皆様の無量の功德となりましょう。

二〇一七年十二月 二版

